
ゼロの使い魔 導きの牙

グルタミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 導きの牙

【Nコード】

N1082L

【作者名】

グルタミン

【あらすじ】

思わぬ事故で死んだ男、病によって家族と死に別れた少女。二人が転生した先はゼロの使い魔の世界だった。

片方は伝説の魔獣として生まれ落ち、もう片方は貴族として生を受ける。

その二人が出会う時、物語のベクトルが加速する。

この物語りは、世間知らずだが心優しい主人公と、性格は悪く自分勝手だが博識でチートな主人公が織り成す、時々シリアスで時々

ギャグで時々ほのぼので時々ぐだぐだな物語りである。

二人が出会い物語が始まった時、本来の正史から外れた世界が始まる。

果たして二人は、何を想い、何を紡ぎ、何を残すのか。

この話しは、チートな主人公が原作を無視し、好き勝手改変する厨二な物語です。

最強主人公又は厨二が嫌いなひとは、見ない事をお勧めします。

プロローグ（前書き）

今日は、グルタミンです。初めての作品になりますが、一生懸命頑張ります！

プロローグ

いつもの様に学校から帰って来ている途中だった。

アインツンだが
音楽を聞きながら信号を待つ。

今の時刻は夜の九時で、回りに人はあまりいない。

そんなとき、後ろから複数の小学生達が走って来た。

こんな時間帯に小学校中学年の子が外に要ることじたい危ない気がするんだが。

塾の帰りなのだろうか、ランドセルではなく、皆バラバラのカバンを持っていた。

小学生が俺の横に着くのとほぼ同時に信号が青になり、一人の小学生が飛び出すように走りぬける。

しかし、その時、信号が変わったにもかかわらず一台のトラックがスピードを落とさず突っ込んできた。小学生はトラックの方を見て立ち止まってしまっている。

考えるより先に、言葉を放つより先に体が動いていた。

全力で駆ける。しかし、ギリギリだ。間に合え！

動けなくなっている子を思いっきり突飛ばし、そのすぐ後、横から物凄い衝撃が俺を襲う。

視界が歪み、目の前は何も見えなくなり、そして意識は途絶えていった。

こうして、俺の短い人生は終わった。

プロローグ（後書き）

さてさて、いかがだったでしょうか？　今回はプロローグなので、進展はあまり有りません。

幼稚な駄文になっておりますが、一生懸命精進してまいりますので、よろしく願います。

また、ご意見・ご感想などありましたらよろしく願います。

第零話 神との遭遇（前書き）

今日は、グルタミンです。この話はまだまだ本編ではありません、次の話からが本編です。ではどうぞ！

8 / 13

加筆修正しました。

第零話 神との遭遇

目が覚めると、そこは知らない所だった。何処までも続く白い空間、いつたいここは何処なんだろうか。

「やっと起きたかい」

その声に驚き、声のした方を向く。すると、そこには見た目好青年な人がいた。

「あの、ここはいつたい？それに俺は死んだはずじゃ……」

俺がそう言うと、その人は少し驚いたように話し始めた。

「ほう、自分の死を自覚しているとは。面白いな君は。君の質問に答えるとしたら、ここは君達の言うところの死後の世界だよ。まあ、天国、地獄、天界、魔界、黄泉の国。好きに呼びたまえ」

目の前の好青年が言うには、ここは天国のような所らしい。

「現状は理解しました。貴方はいつたい何なんですか？それと俺はどうなるんですか？」

俺がそう言うと、その人は真剣な顔つきで話し始めた。

「ふむ、私は君達の言うところの神と言う存在だ。しかし、神だからと言って好き勝手出来るわけではない。数多ある世界に無責任に干渉はしないさ。と言うよりも、制約があり干渉は基本的に許可されてないんだ」

「どうやらこの人は神様らしい、俄には信じがたいがとても真剣な顔つきだ。嘘はついていない様に見える。」

「話がそれたね、これからの君の処遇だが、今回の君の死は想定外だった」

その神と言う青年は、いきなりとんでもない事を言った。俺の死が想定外？ いったいどういう事なのだろうか。

「今回死ぬのは君ではなく、あの飛び出した子供のはずだった。君はその様子をただ見てるだけだった。そう、そのはずだった。しかし、君はその子を助けた。自分が身代わりになると言う条件で」

そう、あの時俺はあの子を助けた。しかしあの時は必死で、その後の事を考えていなかった。結果的に身代わりになったようなものだ。

「驚くべきは、ただの人である君が、時の定める事象を覆したと言うことだ。本来はありえない、時の定めた流れは絶対だ。それでこそ我々神と言う存在でない限り、変える事は許されない」

そう言うつと、神様は不適に笑うのだった。

「ふふふ、実に興味深い。我々はそんな君の存在に興味を覚えた。我々は見たいのだ、君と言う存在が世界と言うものを変えられるのかどうか。」

そう言いながらその神はクスリと妖しげな笑みを浮かべ、一呼吸

置いてこう言った。

「さらに言えば、現段階での君の存在も興味深いのだかね。普通なら自分の死を体感、又は自覚をしたさい、その物事の大きさと死の瞬間のシヨック、身体的な痛みや苦痛、そして心的負担のフラッシュバックから、発狂して頭が壊れるか、絶望にうちひしがれ心が碎けるかなんだかね……。実際私が今まで見てきた人間は皆等しくそうだったよ。そう……。ただ一人、君を除いては」

そう言うと神様は、不適に微笑んでいた顔を真剣なものにした。

「君に力を授けよう、
運命を真実を心理をねじ曲げる力を。……………見せてくれ、君の可能性を」

そう言うと神様は、俺の方に向かい手を翳した。その手に光が集まり、俺に向かい放たれ。

そして、光に貫かれた俺の意識は暗転した。

第零話 神との遭遇（後書き）

ども！こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！本編はまだまだ先になります。

とは言っても、そこまで長くはならないと思います。

……たぶん。

と言うわけで、ご意見・ご感想がありましたらよろしくお願いします！

ではでは、次回！『転生、新たな命』です！

第巻話 転生、新たな命（前書き）

第巻話です！どうぞ！

8 / 14 加筆修正しました。

第巻話 転生、新たな命

「我が韻狼族に、新たな子が誕生した！」

歳を感じる渋い声が響いた。誰の声だろうか、そしてここはどこなのだろうか。目を開いてみるが霞んでいるのかボヤけてよく見えない。そして体も上手く動かない。

「リズラルル、よくやったな」

「ふふ、元気な子よ」

この人達が俺の両親なのだろうか。そう思っていると、さきの老人であろう声が響いた。

「さてゲルゼルグ、準備はいいか？」

「はい、長。よろしくお願いします」

我が父であろう人が返事をする、母であろう人の手からかの人、長と言われた人の手にわたった。

そして、しばしの沈黙のあと俺の名が告げられた。

「お前の名はグラスベルだ！強き者になれ」

こうして俺の名は決まった。てか、俺の生まれた所は名付けるのは親ではなく、長老がやるらしい………たぶん。

てか長老が名付けって、何処のライオンキングだつこの。まあ、韻狼だが。

名が決まり、両親の元に戻される、そして父と長の話が始まった。

「ゲルゼルグよ、今度はいつ旅立つのだ？」

「はい、明日にでも」

「そうか、早いな……気を付けるのじゃぞ」

「はい、ありがとうございます」

「しかし、判らん……。なぜ人間を助ける。貪欲で傲慢、醜悪で狡猾じゃ。互いに殺しあい奪いあう、なんと愚かな生き物だろうか。儂には救う価値などなら見いだせん」

「うわ、かなり言いたい放題だな。うん？てか助ける存在を人間と称すると言うことは、やっぱり俺達は人間じゃないのか？」

「まあ、さつきから韻狼族とか言ってるしな。」

「確かに、人間は殺しあい奪いあう。しかし、全ての人間がそうだと言うわけではありません。人間とは不思議な生き物です、醜い面もありますが、逆に美しい面も持ち合わせています。私はそんな美しいモノをもった人間を守りたいのです」

「おお、親父カッコイイな。」

「しかし、子供が生まれたのに旅立つのかよ。家族より他人（人間）かよ！とツッコミたい。」

「そうか……すまなかつたな、もう何も言わんよ」

「長………すいません」

「ハッハッハ、何故お主が謝る」

「妻と息子をよろしくお願いします」

うわゝ、他力本願と思ってしまふ俺は間違っていないと思う。

「うむ、任せておけ」

うお、この人も任されるのか！？
なんとも心の暖かゝい。

「リズラルル、すまん。お前にはかり押し付けて」

まったくだよこの親父は、普通子供が生まれて直ぐに旅に出るか？人助けなんて言ってるが、これじゃあ育児放棄だろ！？どんだけ家庭を省みない夫だ！！

と俺が声にならない声（胸の中）で叫んでいると、以外にも母親であろう女性が優しく話し始めた。

「いいえ、私は大丈夫です。私達には構わず行って下さい、貴方の道を」

おおゝ、我が母ながら人ができてるなゝ。韻狼だけど。

それから、暫く話をした後、解散となった。はたして、これからどうなるのやら、先は見えない。

しかし、この世界はいつたいどこなんだろうか。そんなことを考
えながら俺はいつしか眠りについた。

第巻話 転生、新たな命（後書き）

こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！

さてさて、いかがだったでしょうか？やっとな転生した主人公、本編はまだ少し先です。

オリキャラや能力設定はもう少し後で出したいと思います。

更新ペースが遅くて申し訳ありません。こんな駄文ですが、ご意見・ご感想などありましたらよろしくお願いします！

さて、次回は！『力、それは護る事』です！よろしくお願いします！
す！！

第二話 力、それは護る事（前書き）

第二話です、今回は少し長くしました。ではどうぞ！

8 / 2 1 加筆修正しました。

第弐話 力、それは護る事

親父が居なくなり既に10年がたっていた。韻狼族の中での生活は色々大変だった。

人との違いや韻狼族の中でのルールがあった。

韻狼族は冥府の森と呼ばれる、人間が絶対に近づかない様な森の奥で暮らしている。

韻狼族は、韻と付くだけあって人の姿に成ることが出来る。要はゼ口魔の韻竜と同じだ。

普段は狼の姿をしている。普通の狼と違ってかなり身体はでかく、力も其処らの魔物どもには負けない。

それこそ、ドラゴンや韻竜とだって渡り合えるらしい。

そんな韻狼でも、子供のうちはこの魔物が数多く暮らす森での生活は、危険な事も一杯だった。

そんな生活の中で、あの神から与えられた力が覚醒していった。

ある日の午後だった、大人も親も出かけていて、巢の見張りの大人もつかれていたのか眠っていた。

そんなとき、子供のグループの中で一番年上の奴が閃いた様と言った。

「なあ皆、大人達は飯を取りに行ってるし、残ってる大人は寝てるよな。こっそり抜け出して外で遊ぼうぜ！」

突然そんなことをいい始めた。全く、グレベットはいつもこうだ。後先考えないし、大人にダメだと言われた事をやりたがる。

「で、でもグレベット。そんなことをしたらお父さんや長老に怒られるよ?」

グレベットの言葉に聞き返したのは、俺の二つ年下のボルモルド。気弱で臆病だが、皆に優しい奴だ。

「なんだボルモルド、お前怖いのか?まったく、弱虫だな。」

「そ、そんなことないよ、ほ、僕はただ……」

「ただなんだよ?」

「うう……」

グレベットの威圧の混じった言葉に、ボルモルドはうつ向いて黙ってしまった。

見かねたのか、女の子の中で二番目に年上なアルトリシャが言い返した。

「グレベット、いい加減にしなさいよ。ボルモルドは皆を心配してるの、この間だって長に怒られたばかりでしょ!」

さすがお姉さんなだけある、確りした子だった。

まあ、少し感情的になりやすい所もあるが。

しかし、そんなアルトリシャを宥めるように、グレベットとアルトリシャの間に入る子がいた。女の子の中で一番年上でグレベットと同じ年のルナミールだった。

「まあまあアルトリシャ、落ち着いて。それとグレベットもよ、ボ

ルモルドを苛めないの一番年上でしょ」

「苛めてねーよ、ただ聞いたただけだろうが」

「ただ聞いただけなら、何であんな威圧的に言うの。ボルモルドは気が弱いつて知ってるでしょ、もっと気を付けなくちゃだめよ」

さすが一番年上のお姉さんだけある、アルトリシャと違って落ち着いている。

「なんだよルナミール、俺が一人悪いみたいに言いやがって」

いや、グレベットが悪いんだけどね。

俺が一人そう思っていると、アルトリシャも同じく思っていたのか呆れたように話し出した。

「グレベットが悪いの。いつも大人達の言い付けを破ろうとしてるんだから」

そう言うつとアルトリシャは、メツと言うつように前足をグレベットに向けて振る。

「なんだよ、こんな何も無いところにもつままないだろ」

グレベットはそう言うつと拗ねるようにそっぽを向いてしまった。

しかし、グレベットがそう言った後に、ルナミールはとんでもない事をいい始めた。

「まあでも、グレベットの言いたい事も判るわ。確かにつまらないものね。だから、外には出るけど巢の近くだけで遊ぶってのはどう

「？」

「ちよ、ちよつとルナミール！何言ってるのよ！外は危険なのよ！」

アルトリシャが驚いてルナミールに詰め寄る。

突然そんな事をいい始めたルナミール。おいおい、勘弁してくれよ。

面倒くさいな、よし、このまま寝たふりを続けてやり過ごすかとか考えていると。

「で、グラズベルはどう思う？そろそろ寝たふりを辞めて意見をくれない」

はあ、ばれてたのか。面倒くさいな。

そう思いながら身体を起こす俺。

「はあ、まったく。静に寝させてくれよ。俺個人としては反対だ。巢から少ししか離れてない所だったとしても、魔物は何時出るかわからないからな……………て、俺が言っても聞かないんだよなお前ら」

「あら、わかってるじゃない」

いい笑顔（そう見える）で言ってくれやがったよ。

そう言つとルナミールは掛け声と共に軽く走りだした。

「ほら、行くわよ皆。早くしないと遊ぶ時間がどんどん減るわよ。」

「あ、おい！まてよルナミール！最初に外で遊ぶの提案したのおれ

だぜ！」

「あ！ちよと！ルナミール！グレベツト！もう、ダメって言うてるのに、待ってよ！」

そう言つて二人の後を着いていく他の小さい子達を追いかけるように走っていくアルトリシャ。

「あ、え、み、皆、待ってよ」

そんな情けない事を言いながら皆を追いかけるボルモルド。
はあく、なんでこうなつたんだか。てか、放っておくわけには行かないよな。そんな事を思いながら、重い腰を動かし皆の後を追って行く俺。

こりや後で大目玉だぞ。まったく、先が思いやられる。
そうして、外に向かう俺。

外に出て、見張りの大人に見つからないように移動する。巢の有るところから南に200リーグ程行った所に、小さな泉がある。そこは花々が咲き乱れ、泉が湧き、太陽の光が燦々と降り注ぐ、とても綺麗な場所だった。

冥府の森は、所畝ましと木々が生い茂る森林で、地層の段差がかなり激しく、今いる泉のように日が差し込む場所はとても少ない。

泉が湧き日が差し込む場所には生き物が集まりやすい。魔物や魔獣はそれを狙って現れたりする。だから普段は、必ず大人が付き添うのだ。

女の子達は、虫を追いかけてたり木の実を探したりして遊んでいる。ルナミールは、そんな子達があぐれたり、勝手に何処かに行かな

いように面倒を見ている。

男の子達はと言うと、取っ組み合いの力比べをしている。グレベツトが指揮を取り、下の子達と遊んでいる。こう言う時はさすがに年上として面倒を見るようだ。

かく言う俺は、遊び相手はグレベツトに任せて、見よう見まねで取っ組み合いをしている小さい子達が怪我をしないよう、喧嘩にならないように見ている。

「この！おりゃ！これでどうだ！」

その声に吊られ、声のした方を見てみると。グレベツトが取っ組み合いをしていて、相手を押し転がした所だった。

しかし、転がした方向がまずかった。グレベツトが相手を押し転がした方向には、木の実を探し下を向いているアルトリシャがいたのだ。

「アルトリシャ！危ない！」

「え？きゃあ！？」

あっちゃん、見事にストライクだよ。こりゃ怒るぞ。

そう思って見ていると、アルトリシャがガバツと立ち上がる。

「もう！何なのよ！」

そう言って此方の方を見るアルトリシャ。

そして、相手を押し転がした時の姿勢のまま固まって見ていたグレベツトを見て、全てを理解したのか顔が怒り顔になる。

「グ〜レ〜ベツ〜ト〜!」

「うわ!マジイ!」

そう言って逃げ始めるグレベツトを追いかけるアルトリシャ。

「もう!待ちなさい!」

「誰が待つか!」

まったく、何時ものが始まったよ。本当に仲がいいな、子の二人は。

しかし、何時までもこのままって訳にもいかないし、止めるか。

「ほら、二人とも、仲がいいのはわかったから。そろそろ辞めとけ」

俺がそう言うと、何故かアルトリシャが凄い勢いで目の前に来て、焦るように言い始めた。

「グラズベル、別に仲が言い訳じゃないわよ!本当よ!変な誤解しないで!」

うん、なんか凄い必死だ。何でこんなにも必死なんだ?

「あ、うん。判った、判ったから少し落ち着いてアルトリシャ」

「本当よ?本当なんだからね?」

「判った、判ったから」

どうしたんだアルトリシヤ？よくわからんが、そんなにグレベツトと仲良く見られるのが嫌なのか？

そう思っていると、今度はからかう様にグレベツトが言う。

「へん、こつちだってお前と仲良く見られるのは御免だぜ。お前みたいなのがキに興味ないつつの」

はあ、グレベツトはまた余計な事を。そんなに歳が違う訳じゃないんだからガキも何もないだろうに。

あゝ、アルトリシヤ完全に怒ってる、毛が逆立つちゃってるよ。

「だ、誰がガキよ！！」

そう言っつてグレベツトの方へ走り出すアルトリシヤ。

「お前の事だよ！！」

そう言っつて逃げるように走り出すグレベツト。

そして、グレベツトは泉から巣とは違う方に走って行ってしまい、アルトリシヤもそれを追いかけて行ってしまふ。

「あ！ちよ、二人とも！？」

俺の止めようとした声も虚しく、二人は森林の中へ行ってしまった。

「あゝもう、何でああなんだか。ごめんルナミール、皆をお願い。

俺は二人を追うよ」

「うん、まかせて。魔物には気を付けてね」

ルナミールのその言葉を聞いて、頷き返事をする。

「うん、判った。それとボルモルド!」

「な、何!?!」

俺の少し強い口調に、少し気後れしながらも返事をする。
そして俺は真剣な眼差しと声で話した。

「いいかボルモルド。俺がいなくなったら此処にいる一番年上の男はお前だ。皆の事、確り護ってやるんだ、頼むぞ」

「……う、うん!?!」

覚悟を決め力強く返事をしたボルモルドに頷き、俺は二人を追いかけるため、走り出した。

二人の匂いを追い走る。

まったく、世話が焼ける奴等だ。

そう思いながら必死に二人を追いかけた。

第弐話 力、それは護る事（後書き）

こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！

今回は前編と後編に別れます。

け、けて時間がなとか、アイデアが思い付かないとかで別ける訳ではないですよ！（汗）

さて、今回はオリキャラが多数出ましたが、今後オリキャラが本編に関わる事は無い予定です。

そしてそして、今回はなんと初戦闘シーンがあります！……………、はつきり言って自信はありません。ええ、全く。

しかし！全力で頑張りますので！よろしくお願いします！

最後に、ご意見・ご感想、又は誤字脱字など有りましたら、遠慮なくどしどし言ってお下さい！

是非、お願いします！

今回は『力、それは護る事（後編）』です！よろしくお願いします！

第参話 力、それは護る事（後編）（前書き）

後編です、どうぞ。

8 / 22 加筆修正しました。

第参話 力、それは護る事（後編）

（セブテンデキム・スピリトウス・グラキアーレス・コエウンテ
ス・イニミクム・コンキダントサギタ・マギカ・セリエス・グラキ
アーリス！（氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法
の射手・連弾・氷の17矢』））

俺の放った魔法の射手が四頭のワイバーンを貫き凍らせる。残り
のワイバーンは四頭、二頭が殺されたと判ったのか、怒りの声を上
げて襲いかかって来る。

「うお！？危ね〜」

ワイバーンの吐いた火炎をよけまた心の中で呪文を唱える。

（ウンデキム・スピリトウス・アエリアーレス・ウインクルム・フ
アクティ・イニミクム・カプテントサギタ・マギカ・アール・カ
プトウーラエ！（風の精霊11人。縛鎖となつて敵を捕らえる。『
魔法の射手・戒めの風矢』））

風の拘束の魔法で、四頭のワイバーンを拘束する。暴れて拘束を
破ろうとするが、かなりの魔力を込めている。そう簡単には解けな
いだろう。

まあ、いきなり何故こんなことになっているのかと言うと、それ
は15分前に遡る。

グレベットとアルトリシャを追いかけて、森林を走っていた。
匂いを追いかけて走る。その時だった。

突然頭の中に声が響いた。

(突然すいませんが、もう少し急いだ方が良いでしょう)

「なっ、何だ!？」

(ああ、すいません。驚きましたか？私です、神です。お久しぶりです)

どうやら転生する前に会った神様らしい。

ビックリした、いったいどこから話しかけてるんだ？

(もちろん天界からですよ)

へっ、凄いなっつて思考まで読み取るなよ！地の文だよ！

(それよりも急いで下さい、貴方のお友達の危機ですよ)

「な!どういう事だ!？」

神のその一言にまた驚き慌てる俺。しかし、神は至って冷静に状況を説明した。

(ワイバーンの群れが近づいて来てます。急がないと取り返しのつかない事になりますよ)

「くっ!そんな事を言ったって、これでも全力だよ!」

そう、俺はさっきから全速力で走っている。これ以上は速度は出せん。

しかし俺がそう言うと、神は判っているかの様に、当たり前のようにしれつと言った。

(ええ、でしょうね。だから加速の魔法を使って下さい。貴方にはその力を与えています。何、簡単ですよ。風の妖精や精霊達に呼び掛ければいいだけです)

「な、マジか！？もっと早く言ってくれ!!」

そうやって俺は、心の中で風の精霊達に呼び掛けた。

(風の精霊よ……)

すると、風が俺の回りに集まり、加速させる。

(ふむ、大丈夫そうですね。あと、これは貴方の能力を試すいい機会です。頑張って下さいね)

「ああ、判ったよ!!…よし!これなら間に合うか!」

そうやって加速した速度で走っていると、前方に何か小さく見え始めた。

(うん?何だあれ?)

そして、よく見ると。グレベットとアルトリシャが、今まさに襲われている所だった。

(ちくしょう!させるか!セブンデキム・スピリトウス・オブスクーリー・コエウンテース・イニミクム・コンキダントサギタ・マギ

カ・セリエス・オブスクーリー！（闇の精霊17柱。集い来たりて敵を打ち砕け。『魔法の射手・連弾・闇の17矢』）

（ああ、ちなみに君なら思い浮かべるだけで、ほとんど無詠唱で出きるはずです）

「まじか!？」

そんな会話をしつつ、闇の射手をワイバーンにぶつける。グレベツト達に襲いかかっていた先頭の二頭を仕留める。

おおう、かなり威力があったのか。ワイバーンがエグいことに…。

「グレベツト！アルトリシャ！大丈夫か？」

先頭のワイバーンを倒し、空かさず二人とワイバーンの間に入り、時間を稼ぐため更に魔法の射手を放つ。

「グラスベル!？来てくれたの？」

安心した、どうやら二人とも無事みたいだ。

二人の無事を確認した俺は、此方を警戒するワイバーンの群れと向き直るのだった。

うは、生ワイバーンだよ！かけー！じゃなかった、今は戦いに集中しなきゃな。

side アルトリシャ

グレベットの言葉で頭に来た私は、グラスベルの言葉も聞かず、グレベットを追いかけた。

どれくらい追いかけたのかしら、少し開けた場所でグレベットに追いつき、私は飛びかかった。

「さっきの言葉、訂正しなさいよ！」

「誰が訂正するか！ガキ！」

「だからガキじゃないって言ってるでしょ！」

「はん！ここまで追っかけて来てるやつがよく言うぜ！そこまで頭に来てりゃ、自分でガキって認めてるようなもんだぜ！」

「な！なんですって〜！」

そのグレベットの言葉に、更に怒りが上昇し攻撃をしようとしたのだけど、それをグレベットが真面目な声で止める。

「さて、アルトリシャ。何か変だぜ」

何が変なのよ？そう思って私はグレベットに言い返した。

「何真剣なふりしてるのよ、そんな事しても誤魔化されないわよ！」

そう言いつて、止められた攻撃を再び仕掛けようとした私を、グレベットはまた真剣な声で止めた。

「違う！本当におかしいんだ、……………森が静かすぎる」

(森が静かすぎる？何言ってるのよ……………)

そう思っていた私は、次の瞬間に出てきたモノに驚愕した。

ガサガサと草木を掻き分ける音を立て、細い木や倒れた朽ち木を踏み倒しながら、目の前の森林の影からワイバーンが顔を出し、此方を睨み付けて来た。

「ひっ！」

「わ、ワイバーン!?!」

此方を確認したワイバーンは、体が恐怖で硬直する程の威圧を込めた、もの凄い雄叫びを上げた。

「ギギヤヤアアオ!!」

私は、その雄叫びに体が硬直し、恐怖で声が出なくなっていた。そして、グレベツトが言った言葉に更に恐怖した。

「やばい、あいつ仲間を呼んだぞ!アルトリシャ!逃げろ!」

「え?に、逃げろって。無理よ!相手はワイバーンよ!それに仲間を読んだんでしょ、に、逃げ切れないわよ!!」

「いいから!早く逃げろ!」

しかし、私は恐怖で体が硬直し動かす事ができず、その場で震える事しか出来なかった。

「何やってんだ！早く逃げろって！」

「…む、無理よ。こ、怖くて、体が言うこと聞かないのよ」
「くっ、ちくしょう！」

そうこうしてる内に、仲間のワイバーンが来てしまった。空から降りて来る、八頭のワイバーン。

もう私は声を出す処か恐怖で息も上手くできなくなっていた。

「い、いや……」

恐怖の中、絞り出した声は小さく。目の前のグレベットにも聞こえてないと思う。

（いや！死にたくない！！助けて………誰か、助けて）

私は、心の中で宛の無い助けを叫ぶ事しかできなかった。
低い唸り声を出しながら近づいて来るワイバーン。

一步、また一步と私達の命の終りが近づいて来る。

そして、ついに終りを迎えるときが来た。

二頭のワイバーンが、私達目掛けて飛び込んで来た。

（もうダメ！お父さんお母さん！！）

そう心の中で叫び私は、ぎゅっと目を瞑り下を向いてしまった。
しかし、訪れるはずの死への痛みは来なかった。
代わりに来たのは私達への、救済の音だった。

高速の何かが、質量と弾力があるモノにぶつかる音がして、そのすぐ後に何か大きなモノが、地面に倒れる音が響いた。

私は、何時までたつても来ない痛みと、衝撃に疑問を持ち顔を上げ、目を開けた。

そして、目の前に広がる光景と、目の前の人物の言葉を聞いて、驚きと歓喜の声を上げた。

「グレベット！アルトリシャ！大丈夫か！」

「グラスベル！？来てくれたの？」

嬉しかった、恐怖から解放された喜びと安堵ももちろんあったけど、グラスベルが私の危機に助けに来てくれたのが、すごく嬉しかった。

私達とワイバーンの間に立つグラスベルは、私の知らない魔法を使い、黒い球状のモノを出しそれをワイバーンに向けて放った。

威嚇なのか、わざと外しワイバーン達の足下に落ちる。すると、魔法の玉が落ちた所は、轟音と共に小さな穴が出来、ワイバーンは警戒し少し後ずさった。

(す、凄い……)

私は、グラスベルの魔法に驚き見入ってしまった。

不謹慎にも、此のとき私を守るように立って居るグラスベルに見惚れてしまい、かっこいいと思ってしまった。

そんな私をグラスベルの声が現実に戻す。

「二人とも！皆に危険を知らせて先に巢に戻るんだ！」

「お、おう！判った！」

「え？で、でもグラスベルは…」

「俺は大丈夫だから！早く！」

「う、うん！」

そう言うと、グレベツトが走り出し、私はそれに続いた。

走り始めて少したった後、私とグレベツトが来た方から大きな爆発音とワイバーンの叫び声が聞こえた。

それを聞いて、私はグラスベルが私達の為に戦っている事を理解した。

急がなきゃ。グラスベルが頑張ってる。急いで皆に知らせて大人を呼ばなきゃ。

そう思うと、自然と足が速くなった。

待っててグラスベル、直ぐに大人を呼んでくるから！

side out

SIDE グラスベル

時は戻り、四頭のワイバーンを捕縛した俺は有ることを考えてい

た。

さつき神様が言っていた様に、これは力を試すいい機会だ。なので、俺はここで大技を試す事にした。

ふふん！ここから始まるぜ俺無双！！

（よし、やってみるか。ウエニアント・スピリトウス・グラキアーレス・オブスクランテース・クム・オブスクラティオーニ・フレット・テンペスターズ・ニウアーリスニウイス・テンペスターズ・オブスクランズ！（来れ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。

『闇の吹雪』）

もの凄い量の魔力が収束し、爆発的な威力を持ってワイバーンに襲いかかる。

前方のワイバーンは、最早何だったのか判らない、所々焦げたような溶けたような肉の塊と化し。後方にいたワイバーンは、当たった所が焦げたような溶けたよう、そして凍り付いているような、よくわからない状態になって、苦しみ悶えながら、絶叫している。

しかし、俺の攻撃はまだ終わらない！

（これで決めてやる！ウエニアント・スピリトウス・アエリアーレス・フルグリエンテース・クム・フルグラティオーニ・フレット・テンペスターズ・アウストリーナヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンズ！（来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐。『雷の暴風』）

空気を裂き吹き荒れる風と穿つ雷が、ワイバーンを直撃する。絶叫を上げる暇もなく、残りのワイバーンは、炭の塊となった。

「よし、やったか。…運が悪かったな、これが俺の仲間を襲った結果だ」

既にいない敵に向かい口上を垂れる。

ふふん、俺って主人公って感じだな！ フハハハ！我に叶うもの無し！！

とまあ、そんなアホな事を考えていると、後から誰か来る気配と共に声がした。

「グラズベル！大丈夫かグラズベル！」

その声に振り向くとアルトリシャやグレベットの父親が立っていた。ウエニンスとアルハンドだ。

「おじさん！俺は大丈夫だよ！」

そう言って俺は尻尾を降った。

「この……馬鹿者が……！」

「ぐっ……！」

父親から前足で張り倒されるグレベット。

「グレベットだけじゃない、ルナミールやグラズベル、お前らもだぞ。グレベットが話を持ちかけた時、何故止めなかつた？あれほど

子供だけで外に出てはいけないと言ったはずだ」

「はい、すみません」

「……ごめんなさい」

謝る俺とルナミール、叱る父親に俺達を庇うように言うアルトリシャ。

「そんな事無いわ、お父さん。グラスベルはちゃんと止めたわ！ルナミールだって！」

「でも外にでただろう？」

「それは……」

暫しの沈黙の後に、アルトリシャの父親が話し始めた。

「アルトリシャ、いくら止めたと言う事実があっても、実際に外に出ては意味がない。ましてや、こんな事件が起きてはな。一歩間違えれば、皆死んでいたかもしれない」

「でも！」

アルトリシャの父親の言っている事は正しい。

しかし納得出来ないのか、ルトリシャは反論しようとする。

そのアルトリシャを止めるように言葉を出す。

「いいんだアルトリシャ、おじさんの言う通りだよ」

「グラスベル……」

するとアルトリシヤは、顔を伏せ黙ってしまった。どうやら落ち込んでしまったらしい。

おやおや、全く困ったね。

「アルトリシヤ、俺をかばってくれてるんだよね、ありがとう」

俺がそう言っていると、今度は照れ隠しか一言いい、ソツポを向いてしまった。

「べ、別に。グラスベルの為に言ったんじゃないんだから……」

うむ、あからさまな照れ隠しですな。

ここまで来ると、もはやツンデレと言わざるおえない。

流石はアルトリシヤ、彼女は皆に優しい。つまりは皆にツンデレなのだが。

その後、俺達は長老や母親にさらに叱られた。しかし、大人達は皆叱った後には必ず無事だった事を心から喜んでいて。

それを見て、やはり心配をかけてしまったと痛感した。

そして、俺が使った魔法の事は二人には黙っていてもらった。

何故かと言うとそれは、色々と説明するのが面倒くさいからだ。

まあその後も何やかんやあり、この事件は無事に幕を下ろしたのだった。

今回のワイバーンとの戦いで、無詠唱魔法は殆ど使わなかった。

まあ腕試しなのと感覚を覚えるのにまずは詠唱を試してみたんだが、これは正解だった。

このおかげでネギま！の魔法の感覚がつかめた。

まあ単に詠唱してみたいだけでもあつたんだが。

今回の敵はあまり相手にならなかつたな。次はもっと強い奴と戦いたい。

じゃないと戦いの訓練にならない。まだ試したい魔法もあるしな。

さあ、次は俺を何が待ち構えているのだろうか！今から楽しみだぜ！

第参話 力、それは護る事（後編）（後書き）

こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！

はてさて、ここまで読んでいただき誠にありがとうございます！
今回は更新が遅れ申し訳ありません。

今回の話で、出だしがいきなり呪文から入り、何だ？と思った方もいると思います。

まあやつと主人公の能力の一つが判ったと言うことで………すいません！許して下さい！

ぶつちやけ力加減とかモンスターの強さの比がよく判りません。本当に申し訳ありません。

と言う訳で、こんな駄文しか書けない私ですが。精一杯頑張りますので、これからも暖かい心で生暖かい目で見守って頂けると嬉しいです！よろしくお願いします！

今回はようやくくなのですが、なんと二人目の主人公が登場しますよ！其にともない、時間がかなり飛びます。

何せ二人目は普通の人間で、一人目は韻狼ですので。時間差が出来てしまいます。

ちなみに、一人目の主人公が生まれた時代は、原作の四百年程前です。

いや〜長いですね〜。まあ、その四百年の間に色々とあるのですが、それは又別の機会に。

てなわけで！次回は！第四話 もう一人の転生者です！よろしく
お願いします！

第四話 もう一人の転生者（前書き）

怒濤の第四話！始まります！

訂正しました。

第四話 もう一人の転生者

私、アジアことアタナシア・ルミール・ムグドラン・ド・ヘブラ
ンストは只今緊張しております。

「我が名は……………」

一人の女生徒が、サモン・サーヴァントの詠唱をしている。

己にあつた使い魔を召喚すべく、神経を集中させ、心に浮かんだ
呪文を紡ぎだす。

すると、緑色の鏡のような物が現れ、さらにそこから一匹の猫が
出て来る。

どうやらサモン・サーヴァントに成功したらしい。まあ、大概是
失敗なんかしないのですが……………、少し遠くの方でサモン・サー
ヴァントをしている私の友達は、かれこれ13回目である。

我が友達ながら、すごいと思う。こんなに失敗してもまだめげて
いないのだろうか、まだやる気らしい。回りからのヤジを無視して、
担当のコルベル先生に何か言っている。

そんな彼女の方を見ていると、どうやら私の番が来たらしい。

よし、私も頑張らなくっちゃ！

そう思いながら、タクトのような杖を掲げ、ルーンの詠唱を始め
る。

「我が名はアタナシア・ルミール・ムグドラン・ド・ヘブランスト、
古からの始祖の盟約に従い我が呼び掛けに答え、顕現せよ！」

ルーンを唱え、杖を降り下ろす。その瞬間、目の前に大きな鏡のようなゲートが出現し、その中から私の使い魔になる生き物が現れる。

そして、私は驚愕した。それは何故かと言うと

「……アジアが人間を召喚した!?」「」「」

そう皆の言った通り。人間が出て来たのだ。

その人間は今、方膝を着き私の目の前にいる。

そして私は、混乱する頭の中、その召喚した彼に問抜けなことを聞いていた。

「あなた……だれ?」

遠くで何か騒いでいたが、今の私の耳には入って来なかった。

そんな私に、彼は立ち上がり、凜々しい顔で、真剣な声で言った。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴女が私のマスターか?」

sideグラスベル

今俺は、戦闘の真っ最中だった。なぜ戦闘なんかしているのかと言うと、俺は旅をしていた。たまたま立ち寄った村で、宿屋を探したのだが、どうやら小さい村だけに宿屋は一つしかないらしく、運悪く宿は商人達でいっぱいだった。

仕方がないので野宿をすることにした。
町を出て少し歩くと森がある。俺はその森の中で野宿をするべく、準備をするための場所を探していた。その時だった。

「き、きやあああ!」

近くから悲鳴が聞こえた。

(な、何だ?)

突然の悲鳴に驚いたが、悲鳴の聞こえた方に向かい走った。
その場所には直ぐに着いた。そして、悠長に見てる場合ではない事を知った。

四体のオーク鬼が一人の少女を追い詰めていた。

「い、嫌……来ないで」

少女の悲鳴を無視して近づいてくるオーク鬼。
遣るっきゃないか。

腰の剣を引き抜き、すぐさま魔力を纏わせる。紅く魔力を纏った剣を構え走り出す。

横から奇襲のように飛び出し、一体目の首を刎ねる。

空かさず二体目に斬りかかるが、持っている棍棒を横風ぎに振って来た。

しかし甘い!そんな攻撃は当たらん!空かさずジャンプして避け、落ちる力を利用し頭から斬り付ける。

二体目のオーク鬼が真つ二つになり、次に斬り掛かろうとしたのだがここで不味い事に気がつく。

残りの二体が俺を挟む様に立ち、一体は棍棒を上には振り上げ。もう一体は、横に振りかぶっている。

(くそ！こうなったら！)

考えてる暇は無い。素早く左横に生えている木に飛び、更にその木を蹴り飛躍する。その瞬間、オーク鬼の棍棒が木に当たり、木が真つ二つに折れる。

オーク鬼の姿が下に見える。

また落ちる力を利用し、オーク鬼頭に剣を突き刺すのと程同時に肩を足蹴にしてすぐさま剣を抜き、ジャンプして地面に着地する。

残り一体は、さてどうする。オーク鬼は此方を睨み様子を伺っているようだ。ならば少し遊んでみるか。

生前(前の人生)俺はRPGが好きで、よく主人公とかがやる剣技をやってみたいと思っていた。

(よし、やってみるか！)

剣に纏った魔力を更に強め、剣を後ろに構える。

そして、上に振り上げるように前方に振るう。力を込め、魔力を飛ばすイメージでもって剣を振る。

「魔神剣！」

声と共に剣を振り上げる。

そして、オーク鬼に向かい地面を走る様に跡を残しながら飛んでいく斬撃。

なかなか頭がいいのか棍棒を盾にするオーク鬼だが、魔神剣は盾にした棍棒を真つ二つにしてオーク鬼に直撃。

腹が縦に裂け、絶叫を挙げながら腸をぶちまけて絶命する。てか成功したよ魔神剣！やった、何か嬉しい。

オーク鬼達の生死を確認し、少女の方を向く。　　啞然としながらへたりこんでいる。

そりゃそうだ、いきなり出てきた男が突然オーク鬼を倒し始めた
あげく、技名叫びながら衝撃波擬きを飛ばしてるんだからな。
少女の下まで行き、かがんで声をかける。

「おい、大丈夫か？」

俺の声に反応し我に戻る少女。

「え？あ、はい！」

ビクツと身体を強張らせ反応する。しかし、何が何だか判ってな
いようだ。

「怪我は？痛む所は？」

「え？あ、大丈夫です」

うむ、大丈夫そうだな。さて、事件は解決だ。さっさと野宿の準
備をするか。

「もう大丈夫だな。森の中は色々と危険だから気を付けるよ」

そう言って歩き出そうと立ち上がり、踵を返したその時、何故か
少女に呼び止められた。

「あ、あの！待って下さい！」

机を囲み、横には先ほど助けた少女が。向かい側にはこの村の長であるう老人がいる。

そして、回りには村人であろう人が沢山いる。何故こうなったのだろうか、面倒くさい事になった。

この老人が言うにはここ最近、さっきの森にオーク鬼が住み着き、狩りも野草摘みもできなく困っているらしい。すでに村人も数人犠牲になっているらしい。

領地主の貴族に頼めと言ったら、もうすでに頼んだのだが、全く動いてくれないらしい。たく、これだから貴族は嫌いなんだよな。

普段は威張っているくせにいざと言うときに全く役に立たん。

「して、どうでしょうかのう。引き受けてはいただけないだろうか」

まあ、要はオーク鬼の討伐依頼だ。しかしな、かなり面倒くさい。なんせ村で確認しただけでも12体はいるらしい。まあ勝つ自信はもちろんある。てかオーク鬼ごときに誰が負けるか。

「お願いします、報酬はあまり出せないかもしれませんが出来るだけの事はさせて頂きます」

別に報酬とかはいらんのだが。どうすつかな。まあ色々やってみたい事もあるっちゃあるんだが……。

と考えていると、横から服の袖を軽く引っ張られた。

引っ張られた方を見ると、瞳を涙で滲ませて不安そうな顔をしている少女がいた。

「私からもお願いします、あの森で山菜や野草が取れないと困るんです、私で出来ることなら何でもしますから」

何でもと言われても、しかし参ったな。こりゃ断りづらい。

「……………、判りました、引き受けます」

「本当ですか!？」

「おお!受けて下さいますか、ありがとうございます!」

結局受けることにしてしまった。まあ、色々と試したいしいいか。さて、頼みたいことも多々あるし早めに話を付けるか。

「すいませんが、明日の朝から始めたいので色々と用意をして頂きたいのですがよろしいでしょうか」

「はい、我々で出来ることならば何でも」「では、三食分の携帯食料と今夜一晩の寝床を用意していただきたいのですが」

俺がそう言うと、何故か皆驚いた顔をして黙ってしまった。はて、俺は何か変な事を言ったか?

しばらくして、村長である老人が口を開いた。

「そ、それだけでよろしいのですかな?」

「ええ、それいがいはいは要りませんが。あ、それと別に報酬は要りませんから。金には困ってないので」

そう言うと更に驚かれた。まあ報酬が要らないと言って驚くのは判るが、何故その前に驚かれたのかは判らない。

そんなこんなで、話は纏まり、翌朝からオーク鬼討伐をすること

になった。

宿は空いてないので、村長の家の空いている部屋を借りる事になり、その晩はお世話になったのだった。

「はああああ！虎牙破斬！！」

オーク鬼を斬り上げ、更にもう一撃切り下ろす。

絶賛戦闘中である。

朝日が昇る前に森に入り、肉を焼く。その匂いに釣られ、続々とオーク鬼が集まって来た。

「お前らに怨みは無いがここで死んでもらうぜ」

そして戦闘が始まった。今しがた倒したので三体目のオーク鬼だ。しかし、聞いていた数より多い。くそ、二十体程はいるか。面倒くさいな、一気に仕留めるか。

(ウンデトリーギンタ・スピリトウス・オブスクリー・コエウンテ
ース・イニミクム・コンキダントサギタ・マギカ・セリエス・オブ
スクリー！(闇の精霊29柱。集い来たりて敵を打ち碎け。『魔法
の射手・連弾・闇の29矢』)

闇の射手が敵を貫き、次々とオーク鬼を絶命させる。

いまので12体倒せた。まあまあかな、ここまで減らせばあとは剣技で行けるだろう。

そして、俺は走り出し、オーク鬼に接近する。

「雷神剣！」

雷のような電撃を発する剣を突き刺し、引き抜く。斬撃と電撃の合わせ技だ。

間を空けず他のオーク鬼に斬りかかる。

「獅子戦吼！！」

素早い突きと共に、獅子の形をした闘気が敵を吹き飛ばす。

「まだまだー！」

ぶっ飛ばした敵がまだ生きていたので追い討ちをかける。まずは邪魔な前方の敵からだ。

「裂空斬！！」

空中を前方に回転しながら敵の頭を切り裂き移動し、さつき吹き飛ばした敵の上に落ちその勢いで持って心臓を一突きにする。

よし、残り五体だ。よっしゃ行くぜ！見せてやる！やるーてめーぶっころーす！

「殺劇舞荒剣！！」

縦に、斜めに、横に、高速の剣技が降り注ぐ。瞬く間に四体の敵を細切れにする。

なす術もなく次々と倒されるオーク鬼。

そして最後に残った一体は、他のオーク鬼よりでかく体に幾つもの傷があった。

どうやらコイツがボスらしい。よしまずは小手調べだ。

「魔神剣！」

高速の斬撃が地を走りオーク鬼にぶつかると思ったその時に、なんとソイツは持っていた棍棒で斬撃に衝撃を与え相殺した。

こいつ、なかなかやるな。だが、勝てない相手じゃない。てか楽勝だ。

「行くぜ！」

突きの構えで敵に突っ込む。

「雷神剣！」

電撃を纏った剣が敵を襲う。しかし、くしくもその斬撃は棍棒で防がれる。だがそれでいい、狙いは電撃の方だ。

斬撃は防がれたが電撃の方は防げなかった。

電撃に打たれオーク鬼の動きが止まる。その瞬間を逃さない。

「魔王炎撃破！！！」

炎を纏わせた剣を、渾身の力でもって横一線に尻ぎ払う。

「グウオアアアア！！！」

オーク鬼の絶叫が森にこだまする。

胴から真つ二つになり、切れた上の方が倒れてきたのを横に飛んでよける。

その時にだった。まさかそんなタイミングでアレが出てくるとは思わなかった俺は、なす術なく吸い込まれて行った。

「ちよつとま」

その言葉が、その場で俺が発した最後の言葉だった。

「ちくしょう、もし召喚のゲートがでたら狼の状態で行く予定だったのに」

膝を付く姿勢で下を向き、誰にも聞かれないようにボソッと呟く。そして、俺を召喚したであろう少女が喋った。

「あなた……だれ？」

ふむ、さてどう答えるか。

ここはネタに走るか。一度やって見たかったんだ。

すつと立ち上がり、真剣な顔をして目の前の少女を見つめる。数秒してから問い掛けるように話始める。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴女が私のマスターか？」

しばらく沈黙が続いた。くっ、何か沈黙が痛い。失敗したかな。そう思っていると、突然弾かれたように返事をする少女。

「あ、はい！私が、マスターです！」

必死で返事をする俺の主が可愛いと思った件について。

ゲフン、いや、何でもない。さて、ネタ的に小芝居を続けるか。

「了解した。今この瞬間より我は主と共にあり、我は主の剣となる」
そう言つて、その少女の前にかしずく。

「マスター、指示を」

よしよし、一度やって見たかった。いや、前世の時色んなSS
読んだ中でオリ主がサーヴァントのまねして言つてたんだよね。

「は、はい。それではコントラクト・サーヴァントを行いますね」

少し緊張した様子で言う少女。うむ、やっぱり可愛いな。何か当
たりのような気がする。

そう思っていると、少女は詠唱に入った。

「我が名はアタナシア・ルミール・ムグドラン・ド・ヘブランスト。
五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とな
せ」そして呪文を唱え終り、此方を向く。 見ると少女の頬が
紅潮している。

はて？何故だ？……………あつ、そっか！

そう言えばコントラクト・サーヴァントってキスするのか！

「えっと……………失礼します／＼／＼」

ちょっと待つて。そう言おうとしたが、時すでに遅かった。
目を閉じ頬を染めた顔がちかずき唇がくつつく。プニツと唇がく
つついた時、ドキツとしたのは秘密だ。

唇がくつついている数秒間、固まったまま動く事が出来なかった。
少女独特の甘い香りがする。やばい、柄にもなく緊張してるよ俺。

コントラクト・サーヴァントが終り、唇が離れる。
はい、とても柔らかかったです。

「えっと、お、終わりました：／／／／」

しばらくして左手に鋭い痛みが走る。

ぐお、なかなか痛いぞこれ！？

痛みを歪めていると、少女が心配そうに声をかけてきた。

「あの、大丈夫ですか？」

ふむ、我がマスターは優しい娘らしい。

「ああ、大丈夫だ。心配はいらない」

痛みがやみ左手を見てみるとルーンが刻まれていた。何て読むのかは解らんが。ガンダールヴ ではないのは確かだろう。

そう言えば、まだ自己紹介をしてなかった。

「俺の名はグラスベル、これからよろしく頼むマスター」

「あ、はい。私はアタナシアです！よろしくお願ひします！」

そう言っつてペコツと頭を下げた後“そう言えばさつきも言いましたね名前”と言っつてテヘっつと照れ笑いを浮かべる。

ふっ、なかなかの高等技術だぜ。やるじゃねえか。

とまあ、そんなこんなで俺の使い魔生活がスタートした。

とある村娘の話

その人は突然現れました。

野草を摘みに森に行った私は、誰もが恐るあのオーク鬼に襲われてしまいました。

恐怖で身がすくみ、動けなくなり、もうダメだと思ったその時でした。

風のように颯爽と現れたその人は、まるで舞踊るように次々とオーク鬼を倒して行ったのです。

私は、その姿にボクッと見惚れていました。いつの間にか戦いが終り、私はその人の言葉で我に帰りました。

「おい、大丈夫か？」

その言葉に、私はすっとんきょうな声で答えました。

「え？あ、はい！」

だって、緊張してたんですもん。あうう、今思い出しても恥ずかしいです。

「怪我は？痛む所は？」

するとその人は心配そうに私に聞きました。私はとっさに答えました。

「え？あ、大丈夫です」

するとその人は安心したのか、微笑みを浮かべ言いました。
その笑顔に胸が高鳴ったのは内緒です。

「もう大丈夫だな。森の中は色々と危険だから気を付けろよ」
そう言うとその人は立ち上がり、踵を返しました。

私は、今このまま別れたらもう二度とこの人には会えないと思いましたが。

気がつけば私は、その人を呼び止めてました。

「あ、あの！待って下さい！」

その人は此方に振り返り、何か？と言った顔をしました。

私はお礼がしたいからと言い、必死で引き留めました。

その人は断ったのですが最後は私の押しに負けました。

お母さんに言われた通りです、男の人は押しに弱いです。

そんな訳で、お礼をするために村に来て貰うことになりました。

村に行く道のりでどんなお礼がいいか聞いた所、泊まれる所を紹介して欲しいと言われました。困った私は、村長に相談することにしたのです。

私の家に泊まっても良いのですが、その、何て言いますか、両親が居るとはいえ男女が同じ屋根の下で寝ると言うのは、あの、よろしくないかと思うのですよ。はい。って、もう 何言わせるんですか、もう！

そんな訳で、村長に相談すべく村長の家に行き、さっき起こった事の全てを話しました。

舞の様な剣捌き、魔法の様な剣技、まるでお話の中の騎士様の様でした。

私の話を聞いた村長は突然真剣な顔付きで真剣な話をしたいと言ってその人をテーブルに座らせました。

村長の話を聞くとどうやら、最近森に住み着いたオーク鬼の討伐を依頼しているようでした。グラズベルさんは貴族には頼まないのかと村長に聞いていました。

あ、名前はさっき村長とグラズベルさんが自己紹介してるのを聞いて知りました。

話は戻りますが、領地を統治している貴族様にはもう何回も頼みました。でも、貴族様は動いてくれません。

村長と村の男の人達は、もう貴族様に頼るのは諦め、自分達で倒すか、村を捨てて違う領地へ逃げるか迷っていました。

どちらにしても命懸けです。私達の村はとも小さな辺境の村です。ただでさえも人が少ないのに、オーク鬼討伐なんてやって村の男が犠牲になったら生活していくのにも大変です。

他の領地に行くにしても、受け入れてくれる貴族様がいるかどうかです。

これは非常に難しいです。下手したら貴族間の争いになり、最悪貴族の誇りに傷を付けたと難癖をつけられ処刑されてしまうかもしれません。

なので、話し合いは難航していました。そんな時にグラズベルさんが現れたのです。

村長からすれば藁にもすがる思いでしょう。

でも私は少し後悔していました。

なぜなら、グラズベルさんはその話を聞いて困った顔をしていたのです。

私は、もしかしたらこのために連れて来たのじゃないか、とかわれているかもしれない、嫌われたかもしれないと思いきなり、目に涙が滲みました。

何故か判りませんが、私はグラズベルさんに嫌われたくないと思っただのです。しかし、こんな時に私一人の勝手な感情で動いてはいけないと思いました。

事は村全体の問題です、私一人のワガママで止める訳にはいきま

せん。そして、私は言いました。

「私からもお願いします、あの森で山菜や野草が取れないと困るんです、私で出来ることなら何でもしますから」

これは私の心からの言葉でした。

私はもう誰かが悲しむ姿を見たくなかったのです。

幼馴染みのヨシアの恋人のジョンも、ヘンリーのお父さんも、私と中の良かったマリナも、皆オーク鬼に殺されました。残された家族は皆悲しみにくれ、マリナのお父さんなんかは、もう廃人同前なほどに心が壊れてしまいました。

私はもう、あんな姿を見たくありません。

すると、私の言葉を聞いたグラズベルさんは、驚いた顔をして直ぐに真剣な顔をして答えてくれました。

「……………、判りました、引き受けます」

私は凄く嬉しくなりました。

そして話は進みグラズベルさんが言った言葉に驚きました。

「では、三食分の携帯食料と今夜一晚の寝床を用意していただきましたのですが」

なんと彼は、用意する物は最初にお願ひした泊まる場所と保存食一日文だけでいいと言ったのです。

これには私だけでなく回りにいた皆も驚きの声を上げたのでした。オーク鬼を倒しに行くのに保存食以外用意が要らないと言うのです。常人では考えられません。

しかし、次のグラズベルさんの言葉に、さらにまた驚かされました。

「ええ、それいはいは要りませんが。あ、それと別に報酬は要りませんから。金には困ってないので」

もうこの言葉には皆言葉も出ませんでした。

オーク鬼の討伐なんて、普通は命を掛けた死闘です。

これが国からの依頼であれば、500エキューは下りません。

それをなんと、グラズベルさんは何も貰わないと言ったのです。

もう私は感動で言葉が出ませんでした。

こんな小さな村で出せる報酬なんてたかが知れています。でも、そんな報酬でも村人全員で一生懸命に出す物です。

当然、生活が苦しくなるかもしれません。それでも、自分達で討伐するより、亡命するよりずっとましなのです。

でもグラズベルさんは、そんな私達の事情を判っているかのように、そう言ったのです。

なんて心優しい人だろう、なんて強い人なのだろう。暖かな気持ち私を満たしました。

気がつくと、グラズベルさんは村長の家に泊まる事が決まっています。

少し残念に思ったのは内緒です。

そしてその日はその場でお開きになりました。

家に帰り、今日起こったつい今しがたまでの話を両親にした所、凄く怒られ、喜ばれ、感動していました。

私の話を聞いた両親は二人の思いでの話をしてくれました。

お母さん達も若い頃、ワーウルフに襲われた事があるそうです。

そして、今日の私と同じように知らない異国の剣技を使う男性に助けられたそうです。

その話を聞いて私は、何か運命的なモノを感じました。

そして私はその夜、グラズベルさんの事を考えて眠れぬ夜を過ごしました。

次の日になり、私は少しお寝坊をしてしまいました、理由は一晩中グラスベルさんの事を考えていたからです。

ふふ、恥ずかしいですねえ。

私は、グラスベルさんが帰ってきたら改めて御礼をしようと心に誓っていました。そして私はグラスベルさんを待つ間、ずっとそわそわしてました。

しかし、グラスベルさんは帰って来ませんでした。

村の男達が余りにも遅いので見に行く事になり、私も連れて行ってくれるように頼みましたがやはり駄目でした。

五人程の男が見に行き帰って来て、その話を聞き驚きました。

なんと、森の少し奥に入った所にまるで道を造るようにオーク鬼の死骸が並んでいたそうです。

その中には、あのオーク鬼の群の、ボスの死骸も確かにあったそうです。

それを聞き、村中が歓喜に沸き立ちました。そう、村がオーク鬼の脅威から解放されたのです。

それを聞いた時は私も喜びました。しかし、次の瞬間に疑問と不安が浮かびました。

はたして、オーク鬼を倒した後、グラスベルさんはどうなったのでしょうか。

私は直ぐに見に行った五人に聞きましたが、誰一人彼を見た人はいませんでした。

オーク鬼は倒され居なくなり、村に平和が戻り嬉しいはずなのに、私は泣き出してしまいました。

回りの人はそんなに嬉しいのかと言いましたが違います。私は悲しいのです。

なぜかもうグラスベルさんには会えないような、そんな気がしてとても悲しくなってしまうのです。

一人悲しみに泣いている私を、母だけは判ったのか優しく抱き締めてくれました。私はしばらく母の腕の中で泣きました。

ああ、ブリミルさま、どうか出来ることなら、もう一度あの人に、グラスベルさんに会わせて下さい。

そう祈らずにはいられませんでした。

第四話 もう一人の転生者（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです。

はい、四話なのに全然原作に遠いですね、すいません！

しかも、題名がもう一人の転生者なのに村娘の話の方が長くなつてますね。

……す、すいません！！

本当に申し訳ありません！本当はもつと短くてなる予定だったのですが……気が付いたらあの長さに。

文才がなくて本当に申し訳ありません。これが私の限界かもしれません（T—T）

そんな私ですが、これからも精進してまいります、なにとぞよろしく願います！

それと、ご意見・ご感想など有りましたら、何とぞよろしく願います！

さてさて、次回は！第五話 貴族として生まれた私 です！よろしく願います！

第五話 貴族に生まれた私（前書き）

更新が遅くなりました、そのわりには駄文です……orz

訂正しました。

第五話 貴族に生まれた私

そう、私は確かに死んだはずでした。

小さな頃から体が弱い私は、人生のほとんどを病院で過ごしました。

私は、生まれつき心臓に病気があり、学校に通う処か私生活すらまともに出来ませんでした。

そのため、楽しみと言えばお母さんが持つて来てくれる本やお兄ちゃんの聞かせてくれる学校や友達の話ぐらいでした。

小学校二年生までは、病院に通院しながら学校に通っていました。時々入院することもありましたが。なんとか通っていました。

しかし、二年生がそろそろ終わると言う12月でした。私は急激に体調を崩し、急遽入院することになりました。

私の病名は先天性心疾患と言うらしいです。どう言ったものなのかは良く判りませんが、遺伝子の異状で起こるモノらしいです。

治すには移植しかなく、15歳になつていない私は、投薬を続けながら移植できるようになる日をただ待つしかありませんでした。

その日も、普段どおりに過ごしていました。

急に胸が苦しくなり、私の心臓が悲鳴を上げていました。苦しい胸を押さえながら、必死にナースコールを押しました。

看護師さんとお医者さんが直ぐに来てくれましたが、私は胸の苦しみで周りの人達が何を話しているのかなど、全く判りませんでした。

ベッドごと運ばれていく私は、無意識の内に家族を呼んでいました。

「お……母さん……お父……さん……お兄……ちゃん」

誰かの声がしますが、もう誰かも判りまん。

集中治療室に入り、注射を射たれ、私は意識を手放しました。

次に意識が戻った時、自分が今どこにいるのかわかりませんでした。

突然誰かに手を握られ、自由にならない身体をそのままに、首を軽く傾けそちらを向く。

そこには私の手を握っているお母さんと私を覗き込むお父さんとお兄ちゃんの姿がありました。

「真理恵！」

「目が覚めたか！」

「マリ！……良かった」

皆凄く心配そうな顔をしていました。私は悲しくなり、独りでに涙が溢れました。呼吸器を付けているのか息は苦しく声がこもります。

「お……か……あ……さん……」

「何？真理恵？」

「お……とお……さん……」

「何だ？」

「お……兄……ちゃん」

「どっした？マリ？」

「……めね……」

「……！」

「な、何バカな事言ってるの。真理恵は何にも悪くないでしょ」

「真理恵、そんなこと言うな。疲れてるんだ、お休み」

母さんとお父さんのその一言に私は安心して眠りに着きました。

でも、別れは直ぐにやって来ました。

深夜なのか辺りは静まり物音は聞こえず、聞こえてくるのは胸の苦しみに呻く自分の声と、ベッドの中で悶える音だけでした。

「真理恵？どっしたの真理恵！？」

お母さんがお医者さん呼び、部屋が慌ただしくなったのが判りました、お父さんとお兄ちゃんも入ってきます。

しかし、私はもう自分の命が終るのが不思議と判りました。

お医者さんが何かをしています、もう痛みも苦しみも感じなくなってきました。

ああ、もう終わるんだ。そう思った時、無意識に私は家族を呼びました。

「お……か……あさん……お……と……お……さん……お……
……に……い……ちゃん」

朦朧とする意識のなか、もうまともに見えない目で、家族を必死

に探して手を動かすと、誰かが握ってくれたのが判りました。
そして、私は最後の言葉を紡ぎました。

「だ……い……す……き……だっ……た……よ……」

その言葉を最後に、私の短い13年と言う人生は終りを告げました。

side兄

妹の状態が急変したのを聞いて、俺は急いで学校を出た。走って駅に向かい、定期券で急いで電車に乗り病院へ急いだ。
病院に着くと母がいた。集中治療室の前を行ったり来たりとしていた。

「母さん！」

「直也！」

「マリは？」

「さつき病院から電話があつて急いで仕事場から飛んで来たのよ。
私が出来た時にはもう集中治療室に入つて……」

母は落ち着かない様子で話し始めた。

聞いてる間も終始落ち着かない。とにかく母をなだめながら父を

待つことにした。

一時間後、会社を早退して父が来た。慌てて来たのか、ネクタイはズレ。ワイシャツは飛び出し服が荒れほうだった。

「真理恵は」

真剣な顔をして聞く父に母が説明する。その時だった。集中治療室の扉が開き、担当医が出てくる。

顔色の思わしくない医者が父さんと母さんを前に話し始める。

「薬の投与で何とか一命は取り止めました、しかし予断は許さない状況に代わりはありません。今夜が山でしょう」

それを聞き、ショックを受けふらつく母を慌てて支える父。しかし医者は、さらに深刻な顔付きで渋るように話しはじめた。

「もう一つ、申し上げなければならぬ事がありますので、診察室に来ていただけますか？」

その言葉を聞き、何かあったのかと診察室へと急いだ。しばらく診察室で待っていると医者がやって来て、こう告げた。

「……残酷な事を申し上げますが今夜を乗り切ってもあまり長くないでしょう。持って4ヶ月……短くて2ヶ月でしょう」

最初、医者が何を言っているのか理解出来なかった。

後4ヶ月で妹が死ぬ？何を言ってるんだコイツは？死ぬってなんだよ？

その言葉の後も何か言っていたが、もう俺の耳には入って来なかった。

俺はいつの間にか集中治療室の前にいた。中にいる妹を見て、俺はただ呆然と見ているしかなかった。その時だった、一人の看護師さんが声を掛けてきた。

「ご家族の方ですね、そろそろ面会時間も過ぎますが今夜はどうなさいますか？」

俺はもちろん、父も母も妹の側に要ることを望んだ。

その胸を告げた時、もう一人の看護師さんが出てきて言った。

「真理恵さん、意識を取り戻しましたよ！」

父も母も、そして俺も慌てて妹の側に向かった。

そして母が妹の手を握ると、薄く目を開いた妹が首を傾け此方を見く。三人で呼び掛けると、ユツクリと口を開き話しはじめた。

「お……か……あ……さん……」

「何？真理恵？」

「お……とお……さん……」

「何だ？」

「お……兄……ちゃん……」

「どっした？マリ？」

妹の呼び掛けに、それぞれ答えた三人。しかし妹の次の言葉に俺は何も返せなかった。

「……め……ね……」

「……!」

「な、何バカな事言ってるの。真理恵は何にも悪くないでしょ」

「真理恵、そんなこと言うな。疲れてるんだ、お休み」

その言葉を聞き、安心したのか目を閉じ眠る妹。

俺は、何も言えなかった。妹の謝罪に、どんな気持ちが入められているのか、俺には判らなかった。

唯一判った事は、俺には妹に謝られるような資格はないと言うこと。それだけだった。

俺は何一つ妹を助けられない、何もしてやれない、駄目な兄貴だ。

あれから四時間たった。妹はいまは穏やかな顔で眠っている。

集中治療室の外の椅子に座り一人で色々と考えていた。

今日を生き残っても、あと四ヶ月程で死んでしまおうと言われた。なぜ、なぜ妹が！なぜ妹なんだ！

ついそんな事を考えてしまう。あと二年だ、あと二年で15になるのに！それなのに、なんで四ヶ月しかもたないなんて……。

妹に覆い被さる絶望と、何も出来ない自分の情けなさにうちひしがれる。

……俺は、無力だ。

しばらくすると集中治療室から父が出てきて家で休んでもいいと言われたのだが、俺はここに居ることにした。それからしばらくしてその時は訪れた。

父と椅子に座り、二人とも黙っていた。その時、看護師さんが血相を変えて集中治療室から出てきた。

「お父さん！お兄さん！直ぐに来てください、真理恵さんの容態が急変しました！」

急いで妹の側に向かう俺と父。

そんな、まさか、嫌な結末が頭を過る。

病院に入ると、母が懸命に呼びかけていた。

「真理恵！真理恵！！」

母と同じように俺と父も呼びかけてる。

「真理恵！」

「マリ！」 心拍を測る機会から流れる音が、だんだんと間隔が長くなる。

どれだけ呼び掛けたか、腕を上げる力も無いのか、何かを探すように手を動かす。

母が手を握り、父がその上に手を重ねる。

そして妹は最後の力を振り絞るように、か細い声で言った。

「お……か……あさん……お……と……お……さん……お……
……に……い……ちゃん、……だ……い……す……き……
だ……よ……」

そして、妹の手から力が抜け、心拍を測る機会から命の終演を告げる音が流れる。

ピーーーーー

「まり…え、真理恵？真理恵！真理恵！！いや！いやああああ！真理恵ーーーー！！」

「嘘だ……嘘だろ？おい、マリ。目開けるよ、おいマリ！マリ！！……なんで、何でだよ！マリーーーーー！！……マリ」

こうして、俺達は大切なモノを失い。

妹、真理恵は短い、余りにも短い13年の人生に終りを告げた。

俺は、何も出来なかった自分を何時までも悔やみ続けた。

side out

いつからこの意識があるのかは、自分でも判りませんが、気が付くと何か暖かいモノに包まれていました。そして誰かの話し声が聞こえました。

「マリアンヌ！生まれたのか！？」

「貴方、無事生まれましたわ。可愛い女の子ですわ」

扉を開く音と共に男性の物だと思われる声が聞こえました。そして、それに答えるように自分のすぐ近くで女性の声がしました。しかし、何処の国の言葉なのでしょう、意味は理解出来ません。

（うわわ！？な、何ですか！？）

暖かいモノに包まれている感覚から急に強い浮遊感に襲われました。そして、またさきの男性と思われる声がしました。

「よくぞ生んでくれたマリアンヌ！我がヘブランスト家のめでたき第一子に名前を付けなくてわな。そうだな……」

そう言うとうんうん考え出す男性。

数秒間考えた後に、決まったのでしょうか決意のこもった声で言いました。

「……アタナシアだ。よし、お前の名前はアタナシアだ。よく我がヘブランスト家に生まれてきてくれたな。わが愛しの娘、アタナシア・ルミール・ムグドラン・ド・ヘブランスト」

こうして、私の新しい人生が始まりました。

三年後

「おとーたま、おかーたま」

「おお、どうしたアタナシア」

「どうしたのアタナシア」

「あたなしあはまほぐが、つかいたいです」

最初に答えたのは私のお父様のグロイツ・ムグドラン・ド・ヘブランストで、その次に答えたのは私のお母様であるマリアンヌ・マクダウエル・ムグドラン・ド・ヘブランストです。

新しい親の下、新しい人生を始めた世界には、信じられない事に魔法が存在しています。

最初は信じられませんでした、お父様達が実際に魔法を使っているのを見て、信じざるおえませんでした。

私が生まれて三年が経ち、色々な事を知りました。

この世界では魔法が使える人と使えない人で貴族と平民に別れます。

更に各国には王家があり。貴族は王家に忠誠を誓い、王の統一の下で権力を振ります。

貴族には爵位と言う階級のようなモノがあり、爵位によって貴族同士の上下関係が決まります。

あ、因みに家は上から二番目の侯爵です。

爵位の順番は上から、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の順です。

まあ偉さと権力の強さのランクのようなモノです。

それと、魔法の事です。魔法にもランクがあります。

一つの系統を使えるのがドット、二つの系統を足せるのがライン、三つの系統を足せるのがトライアングル、そして一番強い四つの系統を足せるスクエアです。

あ、そうでした。さっきから言っている『系統』と言うのは魔法の属性の種類的事了。

種類は五種類あります。それは、『火』『水』『土』『風』、そして伝説の系統の『虚無』です。

私はまだ杖との契約をしていないので、魔法が使えません。だから自分の得意な系統は判りません。

私の両親はどちらもスクエアです。

お父様は風のスクエアで、二つ名は『豪風』です。

お母様は水のスクエアで、二つ名は『麗水』です。

お父様達はかなりの実力を持っているらしく、巷ではかなり名が通っているらしいです。

その証なのかは知りませんが、ヘブランスト家は王家から自分の部隊を持つことを許されているらしいです。

さて話を戻しますが、三歳になった今。私は魔法が使いたいと思えました。せつかく魔法のある世界には産まれたんですから、早く使えるようになりたいと思うのは当たり前だと思つのです。

なので両親に聞いてみる事にしました。

「アタナシア、前にも言ったがお前はまだ三歳だ、残念だが杖との契約が出来るのは六歳になってからなんだ。だからまだ使えないのだよ」

「む〜」

「あらあら、そんな顔をしないの。可愛い顔が台無しよ。さあこつちにいらっしやい、私の小さなアタナシア」

お父様に諫められ若干拗ねてくれる私に、椅子に座り手を広げ笑顔でおいでと言うお母様。

むくれながらもその言葉に従いお母様の下に行くと、お母様は優しく私を抱上げて膝の上に座らせてくれました。

するとお母様は私を諭すように話し始めました。

「アタナシア、杖との契約はね、とても厳粛で神聖なものなのよ。魔法使いにとつて、貴族にとつて、とても大切なモノなの。だから杖との契約は六歳になってからつて決まっているのよ」

「…はい」

「それにね、お父様はアタナシアの事を大切に思うからあのようになつたのよ。けして貴女を蔑ろにしているわけじゃないわ。アタナシアが、貴女が大好きだからああ言つたのよ、もちろん私も大好きよ」

そう言つてお母様はギュッと抱き締められました。

お母様に抱き締められて、すねていたのも何だかどうでもよくなり、私はいつの間にか笑顔になつていました。

「アタナシアは私とお父様のこと好き？」

「はい、大好きです」

笑顔で言う私に、お母様は笑顔で答えてくれました。

そしてお母様は軽く私の頬にキスをしてくれました。

私もお返しにお母様の頬にキスをしました。

「さあアタナシア、お父様はお仕事があるから私と一緒に御本を読みましょう。さあ、お父様にご挨拶は？」

お母様に言われ、私はしゃがんで目線を合わせたお父様に挨拶をして、頬にキスをしました。

「お父様、お仕事頑張つて下さい。んっ」

チユッ

「ありがとうアタナシア、いい子でいるんだよ」

そう言つと、お父様はマントを翻し部屋を出て行きました。

そしてその後はお母様に本をよんでもらい、一日を過ごしました。

そんな平和で暖かな日々を過ごし、様々な経験を積み私は成長し、魔法のクラスもトライアングルになり、トリステイン魔法学院に行く事になりました。

そして今日のは出発の日です。

「それではお父様お母様、行ってまいります」

「道中気を付けてね、怪我や病気の無いように祈っているわ」

「しっかり学んできなさい」

「はい、お父様お母様。…お、お母様？」

笑顔で私は答えます。

すると感極まったのか、目に涙を貯めていたお母様が抱きつき泣きながら言ってくれました。

「ああ、私の大好きなアタナシア、どうか元気でいてちょうだい。何かあったら直ぐに手紙をよこすのよ」

「はい、ありがとうございます。お母様。お母様もお元気で、向こうに着いたら手紙を書きます。お父様お元気で、お仕事頑張ってください。」

「ああ、ありがとう。さあ、そろそろ時間だろう、マリアン又離してやりなさい、何時までもそうやってたらアタナシアが行けないだろう。」

お父様がそう言うと、お母様はユツクリと離してくれました。

いつものように、お父様お母様の頬にキスをして、しばしの別れの挨拶をしました。

「それでは、こんどこそ行ってまいります」

そう言って私は部屋を出ました。階段を降り、玄関をでて私を待っている馬車に向かいます。

馬車の前に着き屋敷を振り替えると、二階の部屋の窓からお父様とお母様が見送ってくれていました。私は軽く頭を下げ、馬車に乗りました。

これから行くトリスティン魔法学院は、いったいどういう所なのでしょう。

そして、何が私を待っているのか、トリスティン魔法学院に向かいながらそんなことを考えていました。

そうして、私の魔法使い物語は幕をあけたのです。

第五話 貴族に生まれた私（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです！

大変に遅くなりました、すみません！

それと、何だか前世の話が長くなりまして、しかも上手く書けませんでした……orz

まあ所詮私の文章表現力なんてこの程度です。はい、本当に文才がありません。

まだ原作キャラも出てきて居ませんが、次かその次あたりから出ると思います。

しかも今までシリアスばかりですいません。でもちゃんとギャグや恋愛要素も入れますので、どうか見捨てないで下さい……（T

ーT）

まあそんな私ですが、今後ともこの作品をよろしくお願いします。是非ともご意見・ご感想をよろしくお願いします。もっとこうした方がいい、またはこの部分がダメだなど、何でも良いです。よろしくお願いします。

さて次回は！第六話 何気にバトルが多くないか？ です。よろしくお願いします。

……バトルか……苦手なんだよな……。

第六話 何気にバトルが多くないか？（前書き）

第六話です！

あれ〜？グラスベルの戦闘わ？

訂正しました。

第六話 何気にバトルが多くないか？

召喚の儀式は恙無く終り、今はアタナシアの部屋である。

女の子らしいかは判らないが、綺麗に整頓された部屋である。

今は椅子に向かい合わせで座っている。目の前には紫の長い髪を髪飾りでツインテールにした少し幼さが目立つ可愛い少女がいた。

「……………」

「……………」

沈黙が痛い。さてどうしたものか。

さっきの召喚の時はふざけてたしネタに走ってたし。何とかなかったが。困ったな。

前世では、彼女いない歴〃年齢だった俺をなめんな！

因みに今世で韻狼になっても恋人はいません！てか寿命が長い上に人間より老けるの遅いからよけい恋愛なんかできんわぼけ！！

はっはっは、参ったか！！

さて現実逃避もここまでにするか。

さてどうすっかな。まあ無難に普通に話しかけるか？

そう考えていると、アタナシアの方から話しかけてきた。

「あ、あの……………」

「はい？何でしょうか？」

緊張しているのか、少し吃りながら話す。

「グラズベルさんがさっき言ってた事って……………サーヴァントセイバ

「って何ですか？」

ああ、あれか。しまった、ネタで言ったんだがこの世界の人間じゃ当然解らんよな。失敗した、説明めんどいな。

「ああ、あれは冗談です。ネタです」

「……へ？」

うん、何言ってるか判らないんだろうな。

「まあ、気にしないでください」

「あ、はい、判りました……」

うん、また沈黙だよ。話が進まないな。しょうがない、こっちから切り出しすか。

「さて、俺はマスターに召喚されたわけなので、これから使い魔としてマスターをあらゆるモノからお守りします。それに先駆け、まずは自己紹介から行きましょう」

「あ、はい、よろしくお願いします」

「名前は先程名乗った通りです。グラスベルでも、ベルでもラズでも好きに呼んで下さい。あ、でもグズやズラは御勘弁下さい。流石に落ち込みますから」

「は、はい、判りました」

う、うわ。普通に流された。滑ったよ、痛いよこれ。

「まあ、呼び方は任せます。見ての通り、俺は剣を使います。使い魔としてマスターを守る事は出来ると思います。ですが、秘薬の材料の収集や感覚共有は難しいと思います」

まあ韻狼だから知識はかなりあるし色々できるがそれはめんどいから教えん。

それとネギまの魔法の事はどうしようかな。うん、まあ教えると面倒な事になるし今はいつか。

「まあさっきも言った通り、特技は剣技です。以後よろしくお願ひします」

「あ、はい、こちらこそ」

丁寧にも返してくるアタナシア。

うむ、しかし弱腰というか謙虚と言うか。なんか貴族らしくないな。まあ、こつちとしてはやりやすいが。

それでもこの丁寧な話し方、どうにかならぬかな。

「ところでマスター、私は使い魔ですが（見た目は）人間です。しかし貴族ではありません。なので丁寧なしゃべり方はしなくて言いと思います」

「え？あ、でも癖なので」

うむ、どうやら遠回しに言ってもダメらしい。仕方ないな、こうなったら少し強引に行くか。

「判りました、言い方を変えましょう。そう言う堅いしゃべり方はやめて下さい。俺はそう言うのは好きではありません」

「あ、はい。じゃなかった、…うん」

よしこれでいい、まあ少し強引だが前よりはましだろう。もちろん俺の精神的な意味でだ！

さてあらかた俺の話は終わったな。俺としては今後のためにも色々聞きたいのだが。特に、今がゼロ魔の原作の時間列なのかどうかが知りたいのだが。

旅をしてたからどんな貴族がいるとかは知ってるか、詳しい事情や実状までは流石に知らん。

「以上が俺の自己紹介ですマスター、何か質問はありますか？簡単なものならお答えします。それと、出来ればマスターの事やこの学院の事を教えていただきたいのですが」

促すように話す俺。しかし、アタナシアの次の言葉に俺は沈黙で答える。なぜなら。

「あの、グラスベルさんは使い魔や貴族について詳しいようですが何ですか？」

「……………」

丁寧な口調に戻ってるし名前にさん付けだぜ。ああ判ったよ、もう普通に話すまで反応してやらん。

「グラスベルさん？」

「……………」

「あの……………」

「……………」

「ラズ？」

「はい、なんでしょうマスター」

うむ、少し呆れたような顔をしているがいいだろう。

「えっと、ラズは平民でいいんだよね？」

「はい、そうですね」

「じゃあ、何でそんなに使い魔とか貴族に関して詳しいの？」

しまった、そう言われるとたしかに。普通の平民ならそんな事知らないよな。知ってるもんだからついそのまま喋っちまった。やっべ、まずったか。

さてどう答えるかな。

「その質問については少々答えにくいのですが、昔、少し貴族の方に使っていた時があります。その時に色々と教えていただきました。」

まあ使っていた訳ではないが、嘘は言っていない。前に貴族の用心棒的な事をしたことがある。

まあその話は別の機会に。
俺がそう言つと、何故か物凄く真剣な顔をして、何かを決意する
ように答えた。

「そうなんだ、うん、判つた」

うん、訳判らん。何か勝手に納得してるが、まあいいか。

「他に何かありますか？」

「あ、それなら」

そう言つと、なぜか少し頬を赤くした。何故？てか大丈夫かこの
娘。

「私の事はアジアって呼んで欲しいな。それと、そんな丁寧な言葉
は使わなくていいよ」

アタナシア改めアジアが笑顔で言う。

驚いた、まさかそんな事を言つとは。普通貴族はプライドが高い
から平民にタメ語や俗語はで話しかけるのは許さない。だから純粹
に驚いた。

ふむ、どうやらこの娘は俺が思っている以上に優しい娘らしい。

「判つたよアジア」

そう言つて笑顔で答える。

うん？何かアジアがボクッとしてるが、まあいいか。

さてそろそろ本題に入るか。

そして、俺が情報を得ようと話しかけたその時にだった。

「なあ、聞きたい事が」「アシア！話があるの！！」……おい」
ボタンと勢いよくドアを開けて桃色ブロンドの少女が入ってきた。

sideアタナシア

その場を沈黙が包んでいました。
召喚の儀式が終わって外から帰って来るときから、この部屋に入
ってだいぶ経つのですが、お互い黙ったまま口を開きません。

うつゝ、どうしよう。困ったな、何を話せば……。

困った私は、ちらっと彼を見ました。

さつきも見ましたが、濃い黒に近い青い髪に、スツと線の細い端
整な顔立ち。

服装は肩と胸だけの鎧にその上から黒いマントのようなローブを
している。上下の服も黒い服で、靴も黒いブーツのような物を履い
ています。一見すれば貴族に見えなくはないですが、どこか怪し
げな雰囲気と腰にさしている剣のおかげで貴族でわれない事が判りま
す。

見れば見るほど不思議な人です。

しかし、何時までも黙りしている訳にもいきません、なので此方
から話しかける事にしました。

「あ、あの……」

「はい？何でしょうか？」

あつ、怖い訳ではないのですが。緊張します。それでもしつかり話さなくちゃ、よし、頑張れ私！そう気合いを入れ聞いたのですが、グラスベルさんの返した言葉に私は驚いて、啞然としてしまいました。

「グラスベルさんがさっき言ってた事って……サーヴァントセイバ―って何ですか？」

「ああ、あれは冗談です。ネタです」

「……へ？」

ね、ネタって？えっと、どう返したら……。

「まあ、気にしないでください」

「あ、はい、判りました」

うつ、上手く返せませんでした。

でも……サーヴァントセイバ―って何処かで聞いた事があります。うくん、何処だったっけ……。

あ！思い出しました！あれは確か前の私のお兄ちゃんに教えてもらった話です。

アニメ好きの友達から教えてもらったって言うてましたが。

確かFate/staynightに出てくる主人公のサーヴァントで、女性だったとおもうのですが……、何故グラスベルさんが知っているのでしょうか？

私が一人で思考に溺れていると。グラスベルさんが話始めました。

「さて、俺はマスターに召喚されたわけなので、これから使い魔と

してマスターをあらゆるモノからお守りします。それに先駆け、まずは自己紹介から行きましょう」

「あ、はい、よろしくお願いします」

私がそう言うと、一呼吸置き、また話し始めました。守ると言われたとき、ドキッとしたのは内緒です。

「名前は先程名乗った通りです。グラスベルでも、ベルでもラズでも好きに呼んで下さい。あ、でもグズやズラは御勘弁下さい。流石に落ち込みますから」

「は、はい、判りました」

確かにそうですね、いくら親しみを込めるとは言ってもそう言うのは私もダメだと思います。

コルベール先生に面と向かって禿と言うくらい酷いですね。判りました、気をつけます。

「まあ、呼び方は任せます。見ての通り、俺は剣を使います。使い魔としてマスターを守る事は出来ると思います。ですが、秘薬の材料の収集や感覚共有は難しいと思います」

驚きました、本来なら私が説明しなければいけない事なのですが、グラスベルさんはすでに知っているようです。

何故こんなに詳しいのでしょうか。
とても気になります。

「まあさつきも言った通り、特技は剣技です。以後よろしく願います」

「あ、はい、こちらこそ」

そう言って一礼しました。すると、何を思ったのでしょうか、数秒考える素振りを見せたあとグラズベルさんは話し出しました。

「ところでマスター、私は使い魔ですが人間です。しかし貴族ではありません。なので丁寧なしゃべり方はしなくて言いと思いますが」

突然こんな事を言いました。でも困りました、初対面や年上の人と話す時はいつもこうなのでなかなか変えられません。

なので、私はそのまま言う事にしました。

「え？あ、でも癖なので」

すると、またグラズベルさんが数秒考えてから言いました。

「判りました、言い方を変えましょう。そう言う堅いしゃべり方はやめて下さい。俺はそう言うのは好きではありません」

むう、そう言われましても……。まあしかたありません、ようはお願いみたいなものなので、ここはグラズベルさんの御主人様としてお願いをきいてあげましょう。

「あ、はい。じゃなかった、…うん」

私がそう返事をする、納得したように話しました。

「以上が俺の自己紹介ですマスター、何か質問はありますか？簡単なものならお答えします。それと、出来ればマスターの事やこの学院の事を教えていただきたいのですが」

願ってもない言葉でした、丁度知りたいた事がありましたので。
早速私はさつき思った事を質問しました。

「あの、グラスベルさんは使い魔や貴族について詳しいようですが
何ですか？」

「……………」

しかし、グラスベルさんは黙ったまま返事をしてくれません。ど
うしたのでしょうか、困った私はもう一度名前を呼びました。

「グラスベルさん？」

「……………」

えっと、どうしましょうか。と言うか私は何か言ってはいけない
事を言ってしまったのでしょうか？

「あの……………」

「……………」

うっ、沈黙で部屋がいやに静かです。
でもどうして何も言ってくれないのでしょうか？うん……………は
っ！まさか……………。

「ラズ？」

「はい、なんでしょう」

あはは、やっぱりそうでした。ついさっき呼び方と話し方で話したばかりでしたね、そう言えば。

まあつまり、私がまた丁寧な言葉に戻ったから黙りだったんですね。

でも、それならそうと言ってくれればいいのに……。

はあ、まあいいです。では改めて話を続けましょう。

「えっと、ラズは平民でいいんだよね？」

「はい、そうですね」

うん、ここは間違っていないらしいです。

「じゃあ、何でそんなに使い魔とか貴族に関して詳しいの？」

すると、また何か考え始めました。

いったい何を考えているのでしょうか、私には何か言葉を選んでいるように見えました。

そして、考え終わったのか何かを決意した様に話をし始めました。

「その質問については少々答えにくいのですが、昔、少し貴族の方に使っていた時があります。その時に色々と教えていただきました。」

その話を聞いた時、私は思いました。

ああ、この人は自分とは遠い存在なんだなと。

だって、その話をしている時のラズの顔はどこか悲しそうな、苦しそうな顔をしていたから。

ラズはまだ何かを隠している話していない事がある、そう思いま

した。

それと共に、少し悲しくなりました。

会ったばかりの私には、まだ話してくれないのでしょうか。そう考えてしまったのです。でもならば、いつか話してくれるように仲良くなるだけです！

よし、そのためにも頑張ります。

「そうなんだ、うん、判った」

新たな決意を固め、私はそう言いました。

ラズは良く判らないと言った顔をしていましたが、一呼吸置いた後に訪ねて来ました。

「他に何かありますか？」

そう言われた私はふと思いました。

仲良くなるにはまず此方から歩み寄る必要があると思います。

なので、私は先程ラズが言った事と同じような事を言うことにしました。

「あ、それなら」

でも、考えると少し恥ずかしくなりました。

だって、お父様以外の男の人と話したことはあまりありませんし、前の私の時もお兄ちゃん以外の年の近い男の人と話した事はありません。

それに、話したといつても挨拶や社交事例ばかりでしたし。タメ語で話したことはありません。

今までは緊張と軽い興奮で意識しませんでした。そう考えると今度はさつきとは違った緊張が私を襲います。

う、ううう！は、恥ずかしいです。

緊張で鼓動が速くなります。自分でも解るぐらい顔が熱いです。でも、仲良くなるためです！

そう言い聞かせ、私は今までにない勇気を振り絞り言いました。

「わ、私の事はアジアって呼んで欲しいな。それと、そんな丁寧な言葉は使わなくていいよ」

い、言えました。ホツとした私でしたが、次のラズの言葉と行動に更にさらに顔が熱くなり、体の温度が上がりました。

「判ったよアジア」

そう言ったラズの顔は、召喚されてからずっと見せている、あまり顔の表情の変わらない人物と同じ人物とは思えない程の、綺麗で優しい笑顔をしていました。

その笑顔を見た私は、さっきまでの緊張はどこに行ったのか、ラズのその笑顔に見惚れてしまいました。

それは不意打ちでした。

あまりの不意打ちに、しばらくはボクッと見惚れていた私は、とある乱入者により現実の世界へと引き戻されました。

「なあ、聞きたい事が 「アジア！話があるの！！」……おい」

その乱入者は、私のよく見知った顔でした。

「ル、ルイズ？どうしたの？」

開かれた扉には、珍しい格好の男の子と一緒に、私の親友のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールがいまし

た。

s i d e o t h e r

とある貴族の少女は、おのが使い魔をつれ友の下へ向かっていた。召喚の儀式が終り、自分の部屋まで戻るさいに周りの奇異の目線を浴びながら、自分と使い魔に向けられている中傷の言葉と共に、ある言葉を聞いたからだ。

それはおのが使い魔に、色々説明するため自室に向かっている時だった。

『あれが、ゼロの使い魔か』

『本当に平民だぜ』

『そう言えば聞いたか？あの『癒水』のアタナシアも平民を召喚したらしいぜ』

その言葉を聞いて、桃色ブロンドの少女は立ち止まり、その発言をした男を睨むように見る。

そして、あからさまに不機嫌な顔をしながらツカツカ足音を立てと近寄り、ズイツと顔を近づけ問いただす。

「今の話は本当なの？」

「え？」

「今話してた事よ」

「え、えっと、ミス・ヘブランストの事かな？」

「そう、その事よ。本当なの？」

睨みを聞かせ聞き返す少女ルイズに、引きつった笑顔を浮かべ何度も頷く。

「そう」

そう一言言い残し、ルイズは再び歩き出し、自室に向けていた足を、友のいる部屋へ向け、歩き出した。

友の部屋に向かう途中でおのが使い魔に、使い魔のやるべき事と使い魔がどういう存在かを説いた。

まあその際色々煩く言っていたが、適当に流しつつ肉体言語で黙らせた。

友の部屋は自分の部屋より階が上で少し離れている。

召喚の儀式が終わってから、系統魔法どころかコモンマジックも使えないルイズは、歩いて来たためだいぶ時間がかかってしまったが、やっと目的の部屋の前についた。

「来る途中も言ったけど、私の親友に失礼な事しないでよ。いいわね」

「へいへい」

「返事は一回！」

「……へい」

使い魔が、サイトがそう言う。渋々ながらの返事で少しイラッとしたが、今はそれどころじゃないと思います。は入る事にした。軽くドアをノックし開ける。

「アジア！話があるの！！」

「ル、ルイズ？どうしたの？」

そこには、顔を赤くし驚いている少女の優しき親友と、濃い黒に近い青の髪をした全身黒づくめの、剣士のような格好をした男が、向い合わせのテーブルに座っていた。

side out

side ルイズ

「突然ごめんね、聞きたい事があるんだけど、入っていいかしら」

「あ、うん、どうぞ」

「そう、それじゃあ失礼するわ」

突然の訪問にも嫌な顔をしないで入れてくれるアジア、やっぱりアジアは優しい。

魔法を使えない私にも分け隔てなく接してくれる。

普通に、それが当たり前のように。

そんなやり取りをして中に入り、後から入ってくるサイトがドアを閉める。

そして、アタナシアと一緒に座っている男が立ち上がり、私に席を譲る。

その男は私が座りやすいように椅子を引いて待っている。

「……内のバカと違って気が利くわね」

そう言っ、男が空けた席に腰をかけた。

するとその男は、私が座つたのを確認すると、私達から離れて壁に寄りかかり腕を組むと目を閉じた。

……何か、良く判らないけど、気が利くのは確かなようね。 数

秒その男を見てアタナシアに視線を向け話しを始める。

「あれ、アジアの使い魔？」

「うん、そうだけど……。ルイズと一緒に入ってきた男の子って…

…」

アタナシアにサイトの事を聞かれ一瞬押し黙る私。でもずっと黙ってる訳にはいかないから不本意だけど答える。

「……私の使い魔」

「あ、やっぱりそうなんだ……」

「ええ、認めたく無いけど、残念ながら」

ええ本当に不本意だけどね！

私のその言い方に引っかかるモノを感じたのか、突っかかってくるサイト。

もう、疎いしいわね。

「おいこら、何か聞き捨てならないぞ」

「煩いわね、今はアジアと話してるの、アンタは黙ってて」

サイトの抗議の声に、苛立ちを覚え私は言い返した。

あゝもう、煩いわね！

「何だよ、その言い方。一タム力つくやつだな、可愛くね」

「あ、アンタに言われたくないわよ！このバカ犬！」

こ、コイツ、言うに事欠いて可愛くないですつてえ！

本当に生意気な奴ね！それに何なのかしら、御主人様に向かってきく口のきき方じゃないわ！

「何だと！」

「何よ！」

「あわわ、ちょっと、二人とも」

挑発するような物言いの私に突っかかるサイト、いがみ合う私達をおろおろと戸惑いながら止めようとするアジア。

アジア止めないで、コイツには躰が必要なのよ！

そう心の中で叫んだ私は自分の杖に手を伸ばした。

でも、見かねたアジアの使い魔の男に、呆れたように頭をかきながら、止められた。

「その辺にしておけ」

サイトに向かっていうアジアの使い魔の男。

ふふん、そうよ、アジアの使い魔の言う通りよ。

「あまり突っかかるな。頭に血が登りすぎだ、きりがないぞ」

突然入って来た男に驚き怪訝な顔をして言うサイト。

「何だよ、俺が悪いのかよ」

当たり前よ、アンタが悪いに決まってるでしょう。このバカ犬！
しかし、アジアの使い魔はサイトだけでなく、私も悪いと言ってきた。

「そうは言っていない、だが少年にも悪い所があるのも確かだ。君は少し短気すぎるんじゃないか」

サイトにそう言ったアジアの使い魔は、今度は私の方を向き丁寧な言葉使いで話し始めた。

「それと突然の介入失礼しました。アタナシアが使い魔のグラスベ

ルと言います。以後、お見知り置きを。ところで貴族の婦人、貴女にも問題があると思われませんが」

「むづ、何よ」

わ、私にある問題って何よ。私の何が悪いって言うのよ！

私はそう思いながらアジアの使い魔グラスベルに聞き返す。

「いくら平民とは言え、先ほどのような罵詈雑言を言われれば流石に頭に來ます。特に彼は召喚されたばかりです、もう少し言葉に気を付けた方が言いと思いますが。さらに言わせてもらえば貴族であるならば、たとえ平民でもそう簡単に人を卑下するべきではないと思います。貴族同士のようにお互いを尊重しあえとまでは言いませんが。せめて、相手の話を聞き入れる余裕を持ってあげて下さい、お願いします」

そう言つて、グラスベルは頭を下げた。

少し頭に來ただけだ。

至極真つ当な事を言われ、さらに頭を下げられた私は言葉が出なかつた。

そして言い終わると、またサイトの方を向くグラスベル。

「先ほど名乗つた通り、俺の名前はグラスベルだ。少年、君の名前は？」

「え、ああ、俺の名前は才人、平賀才人」

「そうかよろしくサイト、俺の事はラズと呼んでくれ」

「ああ、うん判った、よろしくラズ」

そう言って握手をする二人。

何よ、私の言うことは素直に聞かないくせに！

そして、手を離すと真剣な表情でグラスベルが話した。

「マスター達は二人で話があるだろうから此方も二人で話そうか」

そう言ってサイトと一緒に壁際に行く。

むむ、壁際に行ったわね。個々からじゃ少し聞き取りずらいわ。

私は、アジアに覚られないように注意しながら、二人の話に耳を傾けた。

side out

side サイト

「さっきの話の続きで申し訳ないが、ハッキリ言っ君は運がいい」

「へ？」

俺はラズが何を言ってるのか判らなくて、間抜けな声で返事をする。

運がいい？アレが？冗談じゃない！凶運だよ！大凶だよ！

「いいか、薄々は理解していると思うが。ここは貴族と平民で格差がある。極端な言い方になるが貴族が絶対と言ってもいいくらいだ。中には平民を物扱いする貴族もいれば、動物扱いする貴族もいる」

「な、何だよそれ！横暴じゃないか！そんなの許されるのかよ！」

グラズベルの言葉に俺は怒り出す。

何だそれ！人権無視じゃんか！人間差別じゃんか！ふざけんなよ！しかし、俺の怒った様子にも意に介さず冷静に話を続けるラズ。

「そうだな、でもここは、この世界はそう言う世界なんだ。貴族と言うのは、良い意味でも悪い意味でもプライドが高いからな。だからこそだ、ルイズに召喚された君は運がいい」

「どついう事だ？」

ラズの言ってる事が俺には判らなかつた。

だってあれだぜ？直ぐ怒鳴るわ人を犬呼ばわりするわ、しまいは肉体言語だぞ？あいつの何処が良いんだよ！

いや、まあ見た目は確かに良いけどさ……。

俺がそう思っていると、何を考えてるのか判ったのか、ラズが諭すように話し始めた。

「それはね……。サイトは使い魔の事は聞いたか？」

「うん、聞いたけど、それが？」

まあ、一応聞いたけどよ。

えっと確か、使い魔はメイジの手となり足となる存在で、メイジ

の実力を見るには使い魔を見よ…… たったつけ？
で、それが何なんだ？

「使い魔は、何らかの方法で契約が切れるか死ぬかしないかぎり、新たに召喚することは出来ない。しかも今のところ、契約を切る方法は死ぬ以外見つかっていない。そしてだ、もしさっき言ったような貴族に君が召喚されたとしたらどうする？」

ラズにそう言われ俺は考えた。

えっと、平民を物や動物のようにしか思っていない。もしそんな貴族に召喚されたら。

幻獣や竜などを召喚しようとして俺のような平民が出たら。 …

…… 納得する使い魔が出るまで…… 殺す？

もしかして俺…… 死んでた……。

その考えに至った時、俺の背筋を寒いものが駆け抜けた。

青ざめた顔の俺を見て、自分の言いたい事を理解したのが判ったラズは、笑顔で言った。

「良かったな、優しい御主人様で」

「う、うん」

俺はユツクリと頷き、本当に良かったと心から思った。

いや、マジで良かったラズが言ったような貴族に召喚されなくて始めてルイズに感謝した。

その後、程なくして話は終り、俺とルイズはアジアとラズの部屋を後にした。

ルイズの部屋に帰っている途中でルイズに色々言われたが、俺は

あまり反抗しなかった。

その際ルイズが何か怪しんでいたが、まあそれはどうでもいいと思う。

こうして、それぞれの慌ただしい一日が終りを告げた。

side out

翌日・ヴェストリの広場

side グラズベル

俺はメイジと対峙する。おれは、全身から殺気を軽く出したたずむ。

目の前の糞虫は小刻みに体が震えている。そして、極限状態の中で脂汗をかきながら立ち竦んでいる。

「さあ、始めようか」

俺は怒りが頂点まで振り切り、逆に冷静になっている頭で考える。どの方法で目の前の害虫以下の糞虫の、息の根を止めるかを。

「くっ、ぼ、僕の名はセザール・ド・ヴァシユレ、二つ名は『連石』だ。ふん、せ、精々僕の魔法の餌食となるがいいさ」

俺が放つ軽い殺気に当てられながらも、気丈に振る舞う糞虫。
まあいいさ、これからもっと絶望を味わうのだからな。
なぜこうなったのか、それは一時間程前に遡る。

~~~~一時間前~~~~

アジアをお越し洗濯や部屋の掃除を済ませた。授業には参加しなかった。なぜなら面倒だし魔法の事は知っているからだ。いままら俺が習っても意味がない。

なので、朝食を食った後は自分に出来る事をしていた。

やることも無くなり暇になった。俺は、学園の中を見て回る事にした。寮塔を出て、外に出た。

するとどこからか良いにおいがした、釣られるように腹の虫が鳴いた。

そう言えばもう昼飯の時間らしい。とそこにメイドと一緒に歩くサイトを発見した。

サイトと一緒にいると言うことはシエスタか。

ふむ、丁度いい俺も飯にありつくため話しかけるか。

と言う訳で俺は、二人に話しかけた。

「何処にいくんだ、サイト」

「ん？なんだラズか。これから厨房に行くんだ、シエスタが食い物くれるんだって」

「シエスタ？」

まあ、知っているが一応聞いてみる。

「ああ、そっか、このメイドの娘だよ」

サイトがそう言ってシエスタを見る。すると、シエスタが続いて自己紹介する。

「あ、メイドのシエスタです。よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしく、俺はグラスベルだラズって呼んでくれ」

「はい、判りました」

そう話しているとサイトの腹の虫がグウ〜と鳴った。

シエスタと俺は思わず失笑してしまった。

すまんサイト、しかしなかなかのタイミングで鳴ったぞ、さすが主人公だよ。

まあ、そんな事があり何だかんだで俺も一緒に食うことになった。うむ、上手く行った。

これから飯を食べると言うことは、この後はギーシュ戦だな。

そう、俺の目的はここにある。ようは原作の介入だ。

まあ、だからと言って俺がギーシュを倒すつもりは無い。もちろんここはサイトががんばってもらおう。

ならばどう介入するかと言うと、言葉で介入する。

サイトが怪我をする前にギーシュを上手く口車に乗せて剣を出させる、これが目的だ。まあ、つまりサイトに圧勝させたい訳だ。

何故かって？ギーシュが嫌いだからに決まってるだろう！！俺はああ言うナルシス馬鹿は大嫌いだ！！

そんな訳で、俺達三人は厨房に向かった。

と言うわけで今は食後のデザート配膳のお手伝い。



ケーキの乗ったワゴンからケーキをトレイに移し、そのトレイを片手に持ち貴族達がいるケーキのないテーブルへと運ぶ。

失礼しますと一言かけ目の前にケーキの乗った皿を置く。

そして失礼しましたと言い、一礼して次のテーブルへ行く。

何だか配る席にいる女の子がいやに俺の方をジッと見ていたが、そんなにケーキが欲しかったのか？それとも男の平民が珍しかったのか？

まあいいや、とにかく、俺とサイトはシエスタの手伝いをしていった。

その時だった。例の事件が起きた。そう、ギーシュの二股発覚事件だ。

サイトが香水の入った壺を拾い、それを周りにばれ、モンモランシーとの仲が発覚。そして

「ギーシュさま……。やはり、ミス・モンモランシーと……」

ポロポロと泣き出す女生徒。あれがケティか、アニメで見たがやはり可愛いいな。

「彼らは誤解してるんだ。ケティ。いいかい、僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……」

そんな臭い台詞を吐くが、無様にも平手打ちをくらうギーシュ。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

そう言つとケティは泣きながら走り去って行った。

あゝあ、可哀想に。

すると、俺の目の前のテーブルに座っている少女が立ち上がった。少し驚き見ると、金髪で巻き髪の少女が立ち上がり、ものすつこい不機嫌な顔をしている。うん、こりゃ完全に切れてるな。

ああ、この子がモンモランシーね。

モンモランシーはそのいかにも怒ってますと言った表情のまま、かつかつとギーシュの席まで歩いて行った。

すると、ギーシュが見苦しい言い訳をし始めた。

「モンモランシー。誤解だよ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエー口の森へ遠乗りをしただけで……」

うわ、白々しいやつ。

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

うえっ、吐き気がして寒気までしたよ。

お、テーブルにあるワインを掴んだ。

おお、豪快に頭からかけたよ。あるいみ贅沢だな。ぷぷっ、ギ  
ーシュさまあ。

「うそつき！」

そう怒鳴って去って行くモンモランシー。あゝあ、可哀想に。

その場を沈黙が支配する。

すると、ハンカチを取り出しうざったらしい拭き方で顔を拭き、首を振りながら、芝居がかった仕草をしながら宣った。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

ああ、もうこいつ一回死ねばいいと思う、本気で思う。  
そこからの展開は原作通り進んだ。

逆ギレしたギーシュにサイトが捕まり、ギーシュの言葉に正論と皮肉で返す。

そして決闘騒ぎ勃発。よしよし、やっときたか。

ヴェストリの広場に移動していくサイトとギーシュ、そして貴族達。

お、シエスタが一言二言言って駆けてった。

入れ替わるようにルイズが来て何か言っている。

そしてサイトが動き出した。さて、今もってるケーキを置いたら俺も行くか。

俺は素早くケーキを配った。

場所は変わりここはヴェストリの広場。サイトとギーシュを囲むように大きな円ができている。

てか暇だなお前等、まあ殆ど男だけだ。

「諸君！決闘だ！」

お決まりの台詞を吐き歓声が沸く。ハッキリ言っとうざりたい。

「さてと、では始めるか」

ギーシュがそう言うと、先手必勝と言わんばかりにサイトが駆け出した。

がしかし、ギーシュが出した青銅のゴーレムを見て、驚いて立ち止まる。

「な、なんだこりゃ！」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「て、てめえ……」

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

そう、この台詞を言い終わると同時にギーシュは攻撃を開始するはずだ。なら、介入すべきは今。

「その決闘！ 意儀あり！」

騒がしく轟く歓声の中、響くはずのない声が響く。

俺の発した言葉が場を沈黙させる。

突然の乱入者にその場の誰もが注目している。

俺が動く俺を避けるように道が出来る。俺はその道を進み前に  
でる。

「何だ君は、意儀とはどう言うことかね」

よし来た、ここからが勝負だ。

「ギーシュとやら、これは決闘なのだな？」

「そうだ、正々堂々とした決闘だよ、そうだろう、皆！」

ギーシュのオーバーなパフォーマンスでまた歓声が沸く。ふん、だが甘い。貴様が今言ったその言葉が命取りだ。

「ほう、おかしいな。今貴様は正々堂々と言ったな。だが、お前が魔法を使うのに対しサイトは何も手にしていないぞ」

俺の言葉にまた場が静まる。

「だから、何なのかね？」

そのギーシュの言葉に、ほとほと呆れ果てたと言わんばかりにため息をつき、ジロツと睨む。

はあ、コイツあつほじゃねの？

「はあ、そんな事も判らないのか、貴族が聞いて呆れる」

「何？」

おお、頭にきてる。よし、もう少しだ。

そこから、俺の猛攻劇が始まる。

「つまり、貴様が魔法を使うのに対しサイトは何も使うものが無いだろ。それは明らかに不公平だ、それで正々堂々だと？笑わせるなよ、貴族が魔法を使うなら平民は武器を使わなければそれは平等じゃない、単なる虐めだ。そんなモノは決闘でも何でもない。もし貴族の誇りが少しでもあるなら、貴様から武器を、平民の磨いた牙を与える。それが決闘を申し込んだ者の礼儀だ。それとも、貴様は礼儀も知らない腐った俗物か？武器を持たせたら勝つ自信が無くなるのか？」

畳み掛けるように喋る俺。

はっはー！ずっと俺のターン！

ギーシュに余裕と隙を与えないため、矢継ぎ早に言いきった。

おおおう、怖い顔しちゃって。でもよし、これで乗ってくるはずだ。

「……………いいだろ、君の言う通りにしてやる。まあ、何を持とうがその平民が僕に勝つことは無いがね！」

そう言つと、薔薇の形の杖を一振りする。

一枚の薔薇の花らびらが舞い、その花びらが一瞬で剣に変わり、サイトの目の前の地面に突き刺さる。

よっしゃ、引っ掛かった！ニヤリッ、計算通り。

「さあ、取りたまえ平民」

その剣を見て俺を見るサイト、俺は笑顔でサイトに言う。

「やってやれ、お前の力を見せてやれ」

そう言つとサイトは剣を取る。

すると、サイトの左手のルーンが強く光り始めた。

しかし、ここで乱入者がまた現れた。

まあ、予想はしてたよ。むしろ遅いぐらいだな。

そこに現れたのは、ルイズとアジアだった。

「ちよつと！いい加減にして！大体ねえ、決闘は禁止じゃない！」

まあ俺が言うのも何だが。ルイズよ、空気読め。

仕方ない、無視だ。

そして俺はその場から少しさがり、宣言する。

「さあ、今度こそ対等だ、これこそ決闘だ。両者……始め！」

俺の言葉と共に決闘が始まる。

やつと始まった決闘に歓声が至るところから上がる。

もはや誰も止められないだろう。決闘の火蓋を切った俺を睨み付け怒鳴りかけるルイズ。そして、慌てて止めろと言うアシア。

「ちよつとあんたね！何勝手な事してんのよ！」

「そ、そうだよラズ！危ないよ！早く止めないと……！」

煩いな、黙って見ててくれないかな。まあ無理か、何だかなだでルイズは優しいからな。

でもここは見てて貰わないと困るのだよ。

それにアシア、睨んでいるんだろうが凄みが無いぞ。むしろうるうるした瞳で見つめるその顔は可愛い。あ、何かむしる困らせたくなる。

「悪いが黙って見ていてくれないだろうか、この決闘は互いが武器を持った正式な決闘だ」

「な、何言ってるのよ！そんなの関係ないわ！平民が貴族に、メイジに勝てるはずがないの！早く止め」

ルイズが止めてと言おうとしたその時だった、皆一様に驚愕の声を上げた。

その声に何があったのかと振り向くルイズ、サイトに何かあったのかと言う気持ちを裏切るような、目の前に広がっている光景は信じられないものだったろう。

ルイズが見たそれは、サイトが剣を振り抜き、ギーシュの青銅のゴーレムを一刀のもとに両断しているものだった。

周りの貴族達も唖然とし、言葉も出ないようだ。

ふふふ、この愚か者どもが、特と驚愕するがいい！！はっはっはっ！はあゝっはっはっはっ！

「う、うそ……」

ルイズは唖然としていた。まさか、平民であるはずのサイトが、貴族でメイジであるギーシュに、対等以上の戦いをしているのだ。

そして、サイトの力を見て驚いたギーシュが、六体のゴーレムを錬金した。

しかし、そのゴーレムもサイトによって簡単に切り裂かれる事になる。

「俺は元の世界にや、帰れねえ」

六体の同時攻撃を横に転がるようによけ、素早く立ち上がり、横に一閃し二体のゴーレムを切り裂く。

「ここで暮らすしかないんだろ」

切ったあとの隙を付き攻撃してきたゴーレムにカウンターを合わせ一撃を入れる。また一体、ゴーレムは泥粘土のように崩れる。



「使い魔でいい。寝るのは床でもいい」

攻撃後の隙に、死角からゴーレムの猛打が襲う。それを間一髪で剣で防ぐが数メートル程吹っ飛ばす、だが直ぐに体制を立て直す。

「飯は不味くたっていい。下着だって、洗ってやるよ。生きるためだっ……しょうがねえ……」

喋りながらも、ゴーレムの攻撃を避け隙を見つけて思いと共に剣を切り付け、ゴーレムを銅屑へ変える。

「でも……」

背後からのゴーレムの攻撃を、僅に体を動かし後を向かないままカウンターを入れ、ゴーレムに刺さった剣を上振り抜き、すぐさま後を向いて蹴り飛ばす。

「下げたくない頭は……、さげられねえええ!!」

サイトの追撃に咄嗟に残った一体のゴーレムを盾にしたが、瞬間に切り裂かれ、塵と化す。

「ひっ!」

瞬時に接近し、恐怖に引きつったギーシュの顔を蹴り飛ばし、七メートル程吹っ飛ばす。

吹っ飛んだギーシュ目掛け跳躍し、馬乗りになるように着地し、それと同時にギーシュの顔スレスレの三サントの位置に剣を突き立てる。

恐怖で瞑っていた目を開けると、ニヤリと笑い、サイトは呟くよ

うに言った。

「続けるか？」

ギーシュは首を振り、震えた声で言った。

「まっ、参った」

ギーシュは、完全に戦意を喪失していた。その場を鎮静が支配する。

「か、勝っちゃった……」

ルイズの声が静に、しかし確かに響いた。次の瞬間、その場を大歓声が包んだ。

まあ、人間とは判りやすいな。勝てば官軍負ければ賊軍だ。ギーシュの上から動き、勝者の道を歩いて戻って来る。

そのサイトを、ルイズはボツツと見つめていた。

そしてサイトがルイズの目の前まで来ると、こう言った。

「へへ、どうだ、勝ったぜ」

そして、ニツコリと笑った。

次の瞬間、ルイズの顔が音が立つかと思うぐらいボツと赤くなっ  
た。

いや、さすが主人公、ニコポですか。

「ふ、ふん！ギーシュに勝つくらい当たり前よ！このダメ犬！」

「うっわ、可愛くね」

そう言つて剣を地面に突き刺し、左手から離れた途端、サイトの膝から力が抜けガクツと折れ曲がる。

「あ……あれ？」

その体を咄嗟に支える俺。

まあ大方、ガンダールヴの覚醒と酷使で力を使い果たしたんだろ  
う。

「え？ちよつと！？サイト！？どうしたのよ！？」

ルイズが何が起こつたのか判らず混乱気味に話す。  
仕方ない、ここは助けてやるか。

「大丈夫だ、力を使いすぎて疲れたんだろ。サイト部屋に運ぼう」

「わ、判つたわ！」

「うん、判つた！」

うんうん、素直な娘はお兄さん好きですよ。

そして、サイトを肩に担ぎ上げ、運ぼうと動き出したその時だつ  
た。

誰かが俺を呼び止めた。

「おい、まてそこの平民」

何だよ、面倒くさいな。何か用かよ。

しかし、答えないわけにもいかず、渋々答えた。まあ顔には出さ  
ないが。

「はい？何か用でしょうか」

すると、憎いものを見るように俺を睨み付けてこう言った。

「それだ、お前のその態度だ、気に入らないな、その貴族を見下した態度は、侮辱罪に値するぞ、貴族の顔に泥を塗ったことがいかに罪深いか、僕が直々に教えてやる」

はあ、こう言いタイプの奴か。マジうざって。  
しゃあねえ、適当に謝ってやり過ぎるか。

「そうですか、それは知らず知らずの内に大変失礼しました、以後気を付けて振る舞います。それでは、急いでおりますので」

俺がそう言って踵を返そうとすると、何故かその貴族は激怒しはじめた。

「貴様……何処までも馬鹿にしおって、ようしわかった、やはりこの僕が直々に躡をしてやる必要があるらしい」

そう言うとズボンのベルトにつけられている杖を取りこう言った。

「諸君、決闘だー!!」

「え！？そんな!？」

「ちよつ、勝手に何決めてるのよー!」

いやあ、もう全くです。アジアとルイズの言う通りです。訳判ら

ん。

てかその台詞はさつきギーシュが言ったし！もろ被りだよ！？いいの？そのままだとどう頑張っても死亡フラグだよ！？

勿論、戦いなら俺は手加減するつもりは無い。特にこつ言つ馬鹿には。

そして、そいつは俺に向かって言つてわならない事を言った。

「ふん、平民風情が調子に乗るな。貴族の土地に住まわせてやっているんだ、ようは道具や家畜と同じだろうが。そうだ、平民は貴族に服従すべきなんだ。なのに、貴様と言いさっきの平民と言い、生意気何だよ、道具風情が逆らいやがって、この僕がお前の立場を判らせてやる。貴族の顔に泥を塗ったことを後悔しろ」

かつちーん、はい、コイツ今何て言いやがった？

うん？平民が道具？家畜？ああそうかい、判ったよ。どうやら俺が間違つてたらしい。

うん、コイツは適当に見逃していいやちじゃなかったんだな。

本気で、いや……全力で、殺す気で殺らなきゃいけないんだね

……………マジでぶつ殺す。

「アジア、ルイズ、先にサイトを部屋まで運んでくれ」

「え？でも…………」

「そ、そうよ！いい加減決闘なんて馬鹿な事止めなさいよ！」

どうやらこの二人は俺の心配をしているらしい。

本当に優しいなこいつらは。それを見て改めて思う。ああ言う屑は消さないとダメだと。

「悪いが二人りとも、今回ばかりは譲れん。アイツは言っちゃならん事を言ったんだ、だから俺は絶対にアイツは許さない」

「で、でも！」

ルイズはまだ食い下がる。だが、俺の様子がおかしいことを察したのか、アジアは悲しそうな、辛そうな顔をして、一度だけ頷いた。

「……判った」

「え！？ちよつと！アジア！？」

そう言うときアジアは、俺に担がれているサイトに『レビテーション』をかけた。

レビテーションで浮かんだサイトを、寮塔に向かい押し始める。それを見て交互に俺とアジアを見るルイズ。

しばらくオロオロした後、諦めてアジアとサイトを追う。置き土産のような言葉を残して。

「ああもう！勝手にしなさい！怪我しても知らないんだからね！」

そう言うとき二人を追いかけ走り出す。

よし、これで懸念してた事態にはならんだろう。

ぶっちゃけ、これから遣ろうとすることは誉められた事じゃないし、少し刺激が強いからね。

ふふふ、楽しみだよ。害虫以下の糞虫を絶望的な力で持って蹴り（にじり）殺すのが。

「さあ、始めようか」

アジア達が居なくなったのを確認し。糞虫に向かい殺気を放つ。途端に、ビクツと肩を振るわせ、全身を痙攣したかのように震わせる。

準備万端だ、さあ、残虐シヨウの始まりだ。そして後に、ここにいる貴族たちのトラウマになる、学園史上最悪の事件が幕を開ける。

F i n

## 第六話 何気にバトルが多くないか？（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです！

いや、題名的に戦闘が有りそうな感じなのに戦ったのサイトだけですね。

本当にすみません。

グラズベルは次の話で戦闘をします！

はてさて、先ずはこの場をお借りしてお礼をば。

普通様、るなくろ様、アロン様、貴重な感想ありがとうございます！本当に為になります。これからもよろしく願います！

そして、今回の話はいかがでしたでしょうか？

はい、相変わらずの恋愛・ギャグがありませんね。

もしかしたらですが恋愛・ギャグは番外編でやるかもしれません。あ、でもちゃんと本編でも恋愛はするつもりです。………出来

る限りの努力します。

相変わらず稚筆な私ですが、この作品共々、よろしく願います！

さて、ご意見・ご感想又は誤字脱字やその他の違うだろ！と思うことが有りましたら、是非是非教えて下さい、よろしく願います！

次回！第七話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる を、よろしく願います！

あ、言い忘れてましたが。次回は残酷描写が満載の予定です。



**第七話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（前書き）**

こんにちは！さあ、いったい子の話しはどう言う方向に行くのか！それは俺にも判りません！

何だかんだであまり上手くはいきませんでした。が、第七話です！

## 第七話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる

Side グラズベル

前回までであらすじだが、こんな感じだ。

才人・ギーシュ、決闘勃発

俺、参上（介入）！

才人圧勝&疲労気絶

俺の介入に糞虫マジギレ

糞虫の平民道具家畜発言

死刑執行（現在）

そして今、俺は殺気をぶつけて様子を見る。

さてこの塵をどう片付けようか。

ハッキリ言つて手を抜いても楽に勝てるだろう。

しかし、俺は手を抜くつもりは全く無い。

いかに徹底的に、凌辱的に、屈辱的に。希望を尊厳を踏み躪るか。どうやって自分と言う存在が、ちっぽけで弱くて愚かで無価値かを脳髓に叩き込むか。

その為にも先ずは格の違いをを思い知らせてやる事にした。

俺は剣も抜かず糞虫に向かい歩き出す。

ユツクリとしかし確実に、相手に恐怖を与えるように。  
一歩たじろいで、声を震わせながら、絞り出す様に言う。

「き、貴様、な、何故剣を抜かない？」

まあ、当然の疑問だろう。

ついさっき、ギーシュとサイトの決闘の時に、武器を平民の磨いた牙と言い、それを持つことで対等だと言ったのだから。

「貴様ごときに武器など必要ない」

俺は冷たく、さも当たり前のように言いきった。

「な！？き、きさまあああ！」

糞虫は激怒する。

そりゃそうだろう、魔法を使う自分より無手の平民の力の方が上と言ってるようなものだ。

まあ、遠回しにそう言ったんだがな。

貴族である糞虫にとって、この上ない侮辱となっただろう。

しかし、それが俺の狙いだ。

本気で攻撃させ、その全力を出した糞虫を、それ以上の力でもってねじ伏せる。その為にもまずはキレさせる必要があるのだ。

杖を掲げ詠唱を始める糞虫。

俺はジツとその様子を見ている。

そして詠唱が完成する。と同時に糞虫の魔法が飛んでくる。

「ストーンレイニー！！」

大量の拳台の石を作り出し、それを雨のように高速で飛ばす。

ふむ、『土』と『風』のラインスペルか。

だが甘い、この攻撃は直線的過ぎる。

まあ、ある程度のコントロールで軌道を曲げる事も出来るかも知れないが、今の糞虫じゃあ無理だろう、さっきの言葉による激怒と俺の殺気による緊張で、そんな余裕など無いだろう。

あってもこの程度の攻撃など当たらんがな。

俺はその攻撃を、少しの動作で避ける。右に左に体をずらし、ずらしながらも確実に近づく。

攻撃が当たらず、尚も余裕と殺意をもって近づくと俺に恐怖し、声を荒げ、さらに攻撃の手が増える。

「う、うああああ！」

しかし、恐怖で乱れたその攻撃は、狙いが定まらず弾道は外れており、速度は速いが避けやすい。次々と振り掛かる石の猛攻を、余裕で避ける俺。

そして、後三メールと言うところで、糞虫が新たに魔法を発動させる。

「ロックウォール！！」

目の前に縦横二メートル程の岩の壁が出来る、防壁のつもりだろうがこの場合悪手だな。

これじゃあ自分の視界を塞ぐ上に敵の動きが解らなくなる。敵が攻撃してきたのなら解るが、何もしてないのに壁を出してどうする馬鹿だなこいつ。

まあ、俺を視界から外しなお安全を確保したいのだろう。でも無駄だ。

「はあ…はあ…」

「自分の視界を塞いでどうする、馬鹿が」

「なっ！？ゴブアッ！！」

瞬時に回り込んで声をかけると、糞虫が俺の声に振り向く。振り向いた糞虫を、岩の壁諸とも蹴り飛ばす。

糞虫の胸辺りに蹴りを入れたさい、肋骨を数本砕いたのだろう。

ゴキ、ベキと鈍い音がした。

砕けた岩と共に吹っ飛び、数メートル程地面を転がり動きを止める。そして、糞虫のうめき声が聞こえた。

「うっ…あっ…」

血を吐きながら、苦しみながらもがく糞虫に向い歩く。

まだまだ、圧倒的な恐怖と絶対的な絶望を与えるには、まだ足りない。

もっと恐怖を脳髓に刷り込み、苦痛と共に絶望を刻み付ける。

一步また一步と近づく俺に、糞虫の情けない叫びが飛んでくる。

「くっ来るな…来るな！き、貴様！貴族である僕に、こんな仕打ちをして良いと思ってるのか！」

糞虫が何かほざいたがどうでもいい。てか、コイツは何言ってるんだ？馬鹿か？いや、馬鹿だったな。

「貴様何か勘違いをしているな」

「な…何！？」

糞虫の眼前まで行き冷たい目で、見下す（みくだす）様に見下ろす（みおろす）。

そして、冷静に、冷たく、突き刺すように言い放つ。

「何がこんな仕打ちだ。お前は決闘を申し込んだんだぞ？決闘とは、文字通り闘いを決すると書く。闘いとは命を賭けるものだ。謂わば真剣な殺しあいなんだよ」

「ひっ！」

そう言い目を細める様に睨み付ける俺。

その俺に恐怖し、体の震えが増す糞虫。

そして、更に俺は冷たく言葉を放つ。

「ふん、戦いの意味も重さも理解していない青二才の愚図が、何が貴族だ」

そう言い糞虫の腹をを蹴り飛ばし仰向けにする。

「あがぁっ……っ！」

仰向けにされ、必然と空を仰ぐ形になる。

相変わらずの冷たい視線と殺気に、顔面蒼白で歯をガチガチ言わせている。

「……哀れだな、所詮貴様などこの程度だ」

そう言って、糞虫の顔の横にしゃがみ込み、更に嫌みな言葉を投げ掛ける。

「どうだ？貴様が道具だと、家畜だと蔑んだ平民に殺られる気持ち  
は？さぞ悔しいだろう、だがこれが現実だ。さて……」

そう言っただち上がり、一拍置いて足を上げる。

そして、渾身の力でもって糞虫の腕に足を突き落とす。

骨の折れるゴキーンと言う鈍い音と、折れた骨が肉を突き破るブリ  
ュツと言う音がある場に響き、糞虫が絶叫を上げる。

「ぐぎゃあああああああ！」

踏み碎いた腕からは、湧くように出血し、シルクの白い服を染め  
て行く。

それを回りで見ている他の貴族たちは、青い顔で皆沈黙している。  
中には目を反らし、口元を抑える者や、耐えられず走り去る者も  
いる。

腕を踏んでいる足をどけると、糞虫の腕はもう力が入らないのか、  
ピクピク痙攣をお越しながら力なく横たわっている。

そんな糞虫の横に、再びしゃがみ込む。

「どうだ？痛いか？」

痛みで返事も出来ないのか、息を荒げ、涙と鼻水を醜く垂れ流す。  
そして絞り出す様に掠れた声で言う。

「も……もう、ゆるし」

死にたくないのか、命乞いをする糞虫。だが、その言葉を遮るよ  
うに話し始める俺。

「……貴様等貴族は勝手だな。自分から決闘を申し込んで置いて命乞いか？ふざけるなよ、戦いはどちらかの命が尽きるまで、終るまで続くんだよ」

「う……あつ……」

顔を恐怖に染めた糞虫に、自身の死を突きつける。

一拍置き、さらに言葉を放つ。

「俺は今までの人生であらゆる貴族を見てきたが、大半の貴族は存在事態を嫌悪する程の屑ばかりだった。貴様らは平然と平民の物を命を、そして尊厳を奪うくせに、いざ自分達の事になると、命を惜しみ、媚び、へつらい、逃げる。今のお前の様に許しをことう平民を、何の罪もない平民を、侮辱し、蔑み、嘲笑い、そして全てを奪う。貴様等のような汚く醜く、傲慢で害悪にしかない者に、人のモノを奪う資格も、貴族を名乗る権利もないんだよ」

そう、実際に俺は転生してからの長い人生の中で、あらゆる貴族を見てきた。

今言ったよに、殆どの貴族は腐った塵ばかりだった。

まあ、その話しは今はいいだろう。

そして、最後の仕上げをしようとして剣に手を掛けた時、とある一方向から軽い殺気がした。

目線だけをそちらに向け、今までで一番強い殺気を飛ばす。邪魔をするならお前から殺すぞと言う意味を込めて。

そこには、シヨートヘアで綺麗な青い髪で眼鏡を掛けた、自分の身長より少し小さい位の杖を持った少女が、殺気に当てられながらも杖を此方に向けていた。

だがどうやら、殺気をぶつけた事で、詠唱を止めたようだ。



あれはタバサか。まあいい、続きに戻るか。  
殺気をこめた視線をタバサから糞虫に戻す。

「さて、選ばせてやる」

剣を抜き、糞虫の頭上に、突き立てる位置で構える。

そして、絶望の言葉を紡ぐ。

「自身の尊厳に、貴族の誇りに賭けて、その害虫にも劣る命を、自らの手で終らせ、誇りある死を選ぶか。最後まで俺と言う平民に、貴様の塵にも劣る誇りを踏み躪られながら死んでいく事を選ぶか。二つに一つだ、俺が五つ数える間に選べ。どちらも選ばない場合、沈黙の同意とみなし後者を実行する」

「そ……そんな……」

ガタガタ震えながら、目を見開く。

「一」

ユックリと。

「あつ……」

しかし確実に。

「二」

死の瞬間が。

「……嫌だ」

目の前に。

「三」

近づいて来る。

「た……助け」

絶対的な力で持つて。

「四」

自分の命を。

「ああ……」

奪い取る為に。

「五、時間切れだ……死ね」

その言葉と共に、圧倒的な絶望を宿した剣を振り上げ、絶対的な死を与えるため振り下ろす。

「あ、あああああああああ！……」

死の絶望を自覚し、迫る命の終焉に魂からの叫びを上げる。

その場にいる誰もがもう駄目だと思っ、目を瞑り背けたであろう、その時だった。

凍り付き静まり返っていたその場に、救いの声が響き渡る。

「ダメえええ！」

その余りにも幼稚な、しかし必死な声に俺は剣を止めた。

てか、やっと来たか。ベラベラ喋って時間稼ぎした甲斐があったな。

声の方を向くと、息を荒げ今にも泣き出しそうな顔のアシアがいた。

うげ、泣きそう顔してるよ(汗)。

ジッと見ていると。静にだが良く通る声でアシアが言った。

「ラズお願い、止めて」

その言葉を聞き、視線を戻し、眼前一サントの位置で止めていた剣をどける。

目を見開き、彫刻の様に固まる糞虫に呟くように言う。

「マスターに感謝しろ……命拾いしたな。今後は発言には気を付けることだな」

そう言って剣を鞘に収め、膝を付く形でしゃがみ、骨折している肋と腕に手を翳すように当てる。

糞虫は俺の行動に、一瞬ビクツと肩を震わせる。

周りの貴族たちもハツと息を呑むのが聞こえた。

そして俺は、ネギまの治癒魔法を掛け、回復させる。メキメキと音を立て、元の状態の戻って行く。

少し痛いのか、うめき声を上げる。

「うぐっ……!？」

糞虫は治って行く自分の怪我と、魔法を掛ける俺を驚いた顔をしながら交互に見ている。

治癒魔法を掛けながら、最後の言葉を放つ。

「最後に教えてやる。真の貴族と言うものは、命を尊び、けして命を軽んじず。平民のため、領民の為に自身の権力を、力を振る者の事を言う」

そして、あらかた怪我が治ったのを確認し立ち上がる。

まあ途中なのは、俺が治癒魔法得意じゃなくて治しきれないからだ。あまり怪我しないし。怪我しても治るの早いし。けして面倒臭いわけじゃない。

そして、踵を返しアジアの下まで歩き出す。ふう、終わった終わった。まあ、結局俺の自己満足でしかないが。まあ、あの糞虫しかり、周りの貴族たちも少しは判っただろう。

まあ、最初から殺す気は無かった。………本当だぞ？

ただ殺す気でやらないと殺気って出せないし。

それに、アジアならまた戻って来ると思ってたし。まあ、アジアが来なくても顔の横スレスレに突き立てるつもりだったしな。

俺はアジアの横を通り過ぎ、そのまま別の広場に向かった。

べ、別にやり過ぎたから一緒にいるのが気まずい訳じゃないんだからね！

気持ち悪いですね、すいません。

てか、自分で怪我させて自分で治すって魔力の無駄使いだよな。まあ、俺が負わせた怪我のせいで後々アジアに何かあっても困る

し。こつ見えても俺使い魔だからね。

こつして、俺の鉄拳制裁地獄の死刑執行が終わった。

side out

side アタナシア

力を使いすぎて眠ってしまったサイトを、ルイズと一緒に部屋に運びました。

寝かせる所がルイズのベッドしかないので、どうするか聞くと、ベッドに寝かせていいとの事なので、私はそのままベッドにそつと降ろしました。

「サイト……」

ベットに寝かせたサイト君を、心配そうに見ているルイズを見て、私は思わず笑みが漏れました。

私の笑みに気が付いたルイズが訝しげに聞いてきました。

「何笑つてるのよ？」

「ふふ、ルイズは優しいな〜って思って」

そつ言つとルイズは顔を真っ赤にして否定しました。

「な、何言ってるのよ！ば、バカじゃないの……」

そう言うと、プイツとソツポを向いてしまいました。

ルイズのこう言う所が可愛いと思います。

そんな暖かい空気の中、私は突然ゾクツと寒いものを感じました。悪寒とでも言うのでしょうか。何かは判りませんがこのままじゃいけないと思いました。

「あ！ちよつと、アシア！？何処に行くのよ！？」

ルイズの呼び止める声も無視し、弾かれるように私は部屋を出ました。

ダメ、このままじゃ取り返しの付かない事になる。

私は夢中で走りました。階段を駆け降り、廊下を駆け急いでヴェストリの広場に向かいました。

ヴェストリの広場に行く途中ですれ違った人達は、皆顔は青ざめ、気持ち悪そうに口を押さえたり、自分の肩を抱いて震えていたりしていました。

一体、何が有ったのか。私の不安は更に増し、急ぐ足を更に急がせ、広場に向かいました。

広場には、先程のサイト君とミスタ・グラモンの決闘と同様に人の囲いできて今した。

私はその囲いに急いで近づきました。しかし、囲いまで後数メートルと言う所で私は止まりました。いえ、止まらされました。

何故なら、その囲いの中から異様な気が放たれ、私は本能で入りたくない、近づきたくないと思いました。

そう、それは殺気でした。異様なまでの強い殺気。それを私の本能が感じ取ったのです。

動かない。いえ、動けないと言った方が正しいです。

私は行くべきか、それとも帰るべきか迷っていました。あの言葉が聞こえるまでは。

それは私にとって、衝撃的な言葉でした。

「俺は今までの人生であらゆる貴族を見てきたが、大半の貴族は存在事態を嫌悪する程の屑ばかりだった。貴様らは平然と平民の物を命を、そして尊厳を奪うくせに、いざ自分達の事になると、命を惜しみ、媚び、へつらい、逃げる。今のお前の様に許しをこう平民を、何の罪もない平民を、侮辱し、蔑み、嘲笑い、そして全てを奪う。貴様等のような汚く醜く、傲慢で害悪にしかならない者に、人のモノを奪う資格も、貴族を名乗る権利もないんだよ」

その言葉を聞いて胸がズキンと痛みました。

その言葉には、貴族に対する憎しみがある様に感じました。

たしかに貴族の中にはそう言う人もいます。でも、少なくとも少数は心優しい貴族もいます。

私はそれを知っています。

だから、ラズの言葉を聞いて私はこう思いました。

ラズは、貴族が嫌いなのだと。それも、憎しみを抱くくらいに。

その考えと同時に、私は嫌な考えが頭の中に浮かびました。

私も嫌われているかもしれない。

その考えが頭の中に浮かんだとき、再び胸がズキンと痛くなりました。

必死に、違う！そんな事はない！と自分に言い聞かせました。しかし、その嫌な考えが頭から離れません。その考えが浮かぶ度に、胸がズキンと痛くなりました。

しかし、そんな心の葛藤も、ラズの発した言葉で現実に引き戻されました。

「貴様に選ばせてやる……、自身の尊厳に、貴族の誇りに賭けて、その害虫にも劣る命を、自らの手で終らせ、誇りある死を選ぶか。最後まで俺と言う平民に、貴様の塵にも劣る誇りを踏み躪られながら死んでいく事を選ぶか。二つに一つだ、俺が五つ数える間に選べ。どちらも選ばない場合、沈黙の同意とみなし後者を実行する」

え？殺す？誰が？誰を？

私は訳が判りませんでした。

と言うより、理解しなくなかったのでしょうか。あの優しい笑顔をするラズが今、人を殺そうとしていると言うことを。

しかし、無情にもカウントダウンは始まってしまいます。

私は我に帰り、咄嗟に駆け、困いとなっている人達を掻き分ける様に進みました。

「一」

ダメ！

「二」

待って！

「三」

お願い！

「四」



止めて！

「五、時間切れだ……死ね」

「あ、あああああ！！」

その絶叫が聞こえたのと同時に人垣から抜け出た私は、力一杯叫びました。

「ダメえええ！」

すると、ラズが振り下ろした剣が、貴族の男の子の顔スレスレの位置で、ピタッと止まったのです。

ラズは確認するようにこつちを向きました。数秒間の間見つめあった後、私は口を開きました。

「お願い、止めて」

また数秒間の沈黙が流れました。

そして、ラズは一言呟く様に言うのと突き付けていた剣を、鞘に仕舞いました。

「マスターに感謝しろ……命拾いしたな。今後は発言には気を付けることだな」

するとラズは、膝を付くようにその場にしゃがみ、倒れている貴族の男の子に両手を翳しました。すると貴族の男の子は驚いた顔をして、ラズの顔とラズの手を翳している部分を、交互に見ていました。

手を翳しているあいだ、ラズが言った言葉は、短く、しかしとて

も心に響く言葉でした。

「最後に教えてやる。真の貴族と言うものは、命を尊び、けして命を軽んじず。平民のため、領民の為に自身の権力を、力を振る者の事を言う」

私の胸にはその言葉が響き渡りました。

命を尊ぶ者が、平民の為に力を使うのが……真の貴族。

その言葉には、先程までの冷たさは無く。代わりに、心を包み込むような暖かさが有りました。

私はその言葉が響く余韻に気を取られ、ラズが横を通り過ぎる瞬間まで気が付きませんでした。

ハッと我に帰り、通り過ぎたラズの方を向き、私はその背中を見て、ふと思いました。

なんて寂しい背中なんだろう……。

私にはその背中が言いようもない悲しみを背負っているように思いました。

「き、君」

そして、突然掛けられた声に私は振り向き、大変な事に気が付きました。

私を呼んだのは、ついさっきまでラズと決闘をしていた貴族の男の子でした。

その男の子の左腕の袖は真っ赤な血に染まっていました。

(いけない！怪我してる！)

すぐさま駆け寄り、私は得意の水の治療魔法をかけました。  
すると貴族の男は、私に聞いて来ました。

「彼は君の使い魔なんだろう？」

「あ、はい。怪我を負わせてしまいすいません」

私がそう言うと、男の子は驚くべき事を言いました。

「いや、もうそれはいいんだ、さっき彼自身が治して行ったのだからね」

「え！？うそ……」

「僕も信じられないよ、彼は一体何者なんだ？」

私と男の子は、二人でラズの去った方を見ましたが、すでにラズの姿はありませんでした。

何れだけそうして居たのでしょうか、静かな広場に微かに聞こえる、啜り泣く音で我に帰り、周りを見渡し、私は驚きました。

そこには、しゃがみこんで啜り泣く子や、青ざめた顔で腰を抜かしたように座り込んで下をむいている子、啞然とラズの去った方をいまだに向いている子がいました。

その惨状を暫く眺め、私は有ることに気が付きました。

そうだ！ラズを追わなくちゃ！

そして私は、直ぐにその場から走り出しました。

ラズが向かった方に走り、暫く走って移動すると、ラズは見つかりました。

ラズは隣の広場の木の翳で、木の幹に寄り掛かり片足を伸ばし、もう片方は膝を曲げた状態で座っていました。

首を傾け、少しうつ向き加減にして眠っているようでした。

サラサラの濃い青黒い、男の人にしては少し長い髪が垂れ下がり、顔が見えません。

私はユツクリと近づき、直ぐ横で膝を付く状態で、ラズの顔を覗きこもつと垂れ下がった髪をずらすため手を伸ばしたその時でした。後数 سانتと言う所で、寝ていたはずのラズに止められました。

「…何か用か？」

「ひゃ、ひゃい!？」

突然声を掛けられた事で驚き、驚愕の声と返事が混ざり、変な声を上げてしまいました。

あつ、恥ずかしいです／＼／＼。

慌てた私は、上手く言葉が出てきません。

「あ、あの、その」

私が慌てていると、ラズは顔を上げて落ち着くように言いました。

「少し、落ち着け」

「あ、うん……よし」

何回か息の吸い吐きをして、気持ちを落ち着かせ、私は聞きながら、口にした事。

「えっと……ラズは、私の事嫌い？」

「は？」

私の言葉にラズは、ポカンとした顔で少し驚いていました。あれ？私何か変なこと行っただけかな？

あ、そっか、『貴族の事が』って言うのを話さなくちゃ判らないよね。

再び聞き返してきたラズに、私は応えました。

「どうしたんだ急に？」

「うん、あのね。さっき広場で言った事を聞いてちゃって、ラズは貴族の事嫌いなのかなって思ってた……私も貴族だから」

その言葉に納得したのか、何故か前方を向き応えました。

「ああ、嫌いだね」

「えう！？」

その言葉を聞き、私はショックを受けました。

やっぱり、私は嫌われて……。

私は自然と下を向き、うつ向いてしまいました。

そして、心には悲しみが溢れ、いつの間にか私の目には涙が溜まり、今にもこぼれてしまいそうでした。

ああ、私はラズに嫌われてるんだ……。

そう判った途端に、先程の胸の痛みよりずっと強い痛みが私の胸に響きました。

ズッキンズッキンと痛む胸を手で押さえて、私は痛みに耐えていました。

でも、ラズの次の言葉に私は顔を上げました。

「何か勘違いしてないか？」

「へ？勘違いって……」

私がそう聞くと、ラズは立ち上がり、言いました。

「確かに自分勝手に傲慢な貴族は嫌いさ、……でも、アジアは違うだろ？少なくとも、昨日からアジアを見て俺はそう思っているが」

私は途端に嬉しくなりました。さっきまで心の中で渦巻いていた悲しみが、パツと消え去り、強い胸の痛みもいつの間にか止み、それらとは全く違う別の暖かいモノが私を包みこむような気がしました。

でも、私はそこで気がついてしまいました。そう、それは

「ラズ、もしかして……からかった」

「さあ、何の事かな？」

そんなことを言いながら、ラズは綺麗な笑顔を私に向けて、歩いて行きます。

「あ！ラズ！びどいよ、もう！」

剥れた顔でそんな事を言いながらラズを追いかけて走り出した私に、ラズは笑ながら言いました。

「アジアは面白いな」

「もう、どう言う意味〜！」

ラズの言葉にそう言い返しながらも、私は悪い気はしていませんでした。

むしろ、私の心は楽しく弾んでいました。  
からかわれたのに、不思議です。

こうして、騒がしくて大変だったお昼は終わりを告げました。暖かい気持ちと、少しの憤りを残して。

side out

fin

## 第七話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです！

先ず始めに、この場をお借りしてお礼を言わせていただきます！  
何と、アクセス十万を突破、更にユニーク一万越えしました！！  
本当にありがとうございます！！こんな駄作に付き合って頂き、  
感謝の極みです！！本当にありがとうございます！！なので、ア  
クセス五万越えと十万越えを祝い、特別編を書きたいと思います！！  
まあ、ただでさえも更新が遅いのですが、何とか頑張ります！！

はてさて今回は、残酷描写やグロ表現を中心にもっと酷くするつもりでしたが……何か微妙になっちゃいました……。

そして改めて実感しました。文才無いな……。  
なんかもっとこう上手い表現がなかったのですが、何か参考になるものあるませんか？有ったら教えて下さい、お願いします。

とまあそんな訳で、今回の話はどうだったでしょうか。  
それから、今回のオリキャラは今後のストーリーには一切関わらないと思います。だってただのやられ役だし。

さて、今後どう言った展開にすべきか、真面目に悩んでおります。  
基本は原作に沿って進ませるつもりではいます。

はあく、もっとネタ入れたいですね。

でも、あまり入れると收拾が付かなく可能性が高いですね。

あと、相変わらずギャグが少なくてすいません。でも、そろそろ入れると思います。………精進します。

と言うわけで、今後この駄作を良くしていく為にも、皆さんのご



意見・ご感想又は誤字脱字の報告や『いや、ここちがくね？もつとこうした方が良いつしょ？』と言った事も、是非教えて下さい！切に、よろしくお願いします！

さて次回は、閑話と言いか七・五話です。

第七・五話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（サイドストーリー編）  
です！ではまた次回をよろしくお願いします！

第七・五話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（サイドストーリー編）（前書

第七・五話です！

うーん、タバサは難しい。

そして、キュルケ空気。

訂正しました。

第七・五話 死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（サイドストーリー編）

side 雪風

その日も、何時もと同じように昼を食べ終わり、部屋に帰り本を読むつもりだった。

親友のキュルケと歩き部屋に向かっている時だった。

私達の横を通り過ぎる生徒達の会話を聞いたキュルケが興味を持ち、決闘を見に行こうと言い出した。

「……興味ない」

「いいから、あなたは隅っこで本でも読んでればいいじゃない」

そう言うときュルケは私の腕を掴んで引っ張って行った。

仕方ないので付いて行く事にした。

決闘の場所、ヴェストリの広場に着くと人垣が出来ていて、キュルケはその人垣にまざり。私は隅っこで本を読み始めた。

本当の闘いの意味を理解してない貴族の決闘ごっこに興味は無かった。

サイレントの魔法を掛け、周りの喧騒から自分を隔離し、本の世界に入る。

読んでいる本はイウヴァルデーの勇者と言う少し子供向けの本だが、中々に深い話の構成と、単純ながらも考えさせられる話に、私はのめり込んでいた。

どれぐらい経っただろうか、本の世界に入っていた私は、突然の殺気に我に返った。

本をしまい殺気のする位置を探すと、それはあの人垣からした。いったい誰がこんな殺気を出しているのか。私は興味を持った。

私の知る限り、この学院にこんな殺気を出せる人物はいない。なので、その人物はおのずと限られてくる。

前日の使い魔召喚の儀式で人間の平民が召喚されたのは、親友のキュルケから聞いている。

しかし、平民にこんな殺気が出せるだろうか。

そんな考えが、余計に興味を増幅させた。

人垣に近づき、背の低い私は見やすい位置を探し、中の様子を見た。

その光景を見たとき、私は目の前の光景を信じられなかった。

魔法を使うラインメイジだろう男子生徒は、必死に攻撃を飛ばすが全てが紙一重でかわされている。

しかもその平民は、男子生徒の猛攻にも関わらず、一切表情を変えず余裕で避けている。

いくら男子生徒の攻撃が荒いとは言え、あそこまで完璧に、余裕で避けられる者は、この学院にはそういないだろう。

それだけでは無い、彼は避けながら更に接近しているのだ。普通の平民なら避けられないし、腕利きの傭兵でもあの数の攻撃なら避けるので精一杯だろう。

しかし、彼は違った。

そして、男子生徒が岩の壁を出す。しかし、私は確信していた。

そんな物は意味がないと。

寧ろこの状況だと悪手だとすら考えていた。

(動きの速い相手に、視界を塞ぐのは命取り)

私が考えていたことは適中した。

男子生徒は、岩の壁事蹴り飛ばされ数メートル程転がり動きを止める。

口からは血を吐きながら何かを叫んでいる。

ユックリと近づいていく彼は、予想にしかった行動に出た。

誰から見ても勝負は着いている筈なのに、彼は男子生徒を蹴り仰向けにすると、左腕を踏み砕いたのだ。

私はその行動の必要性が判らず驚いていたが、先程から彼らの会話が聞こえない事に自分がサイレントの魔法を解いてない事に気が付き、急いで解除すると、彼の口から出た言葉に驚いた。

「……貴様等貴族は勝手だな。自分から決闘を申し込んで置いて命乞いか？ふざけるなよ、戦いはどちらかの命が尽きるまで、終るまで続くんだよ」

その言葉を聞いて、私は彼がただ者ではない事を確信した。

まさに、その通りだ。実際の戦争などの戦いとは命の取り合いだ。そこには礼儀も作法も無い。貴族どうしの決闘など、所詮は戦いごっこに過ぎない。

私は彼の言葉に納得した。

しかし、なぜ彼はここまでするのだろうか、私は彼の行動に疑問を持った。でもその疑問も次の彼の言葉によって晴れるのだった。

「俺は今までの人生であらゆる貴族を見てきたが、大半の貴族は存在事態を嫌悪する程の屑ばかりだった。貴様らは平然と平民の物を命を、そして尊厳を奪うくせに、いざ自分達の事になると、命を惜しみ、媚び、へつらい、逃げる。今のお前の様に許しをこう平民を、何の罪もない平民を、侮辱し、蔑み、嘲笑い、そして全てを奪う。貴様等のような汚く醜く、傲慢で害悪にしかない者に、人のモノを奪う資格も、貴族を名乗る権利もないんだよ」

その彼の言葉に、私は理解した。どうやら男子生徒が彼の怒りに触れるような行動や言語を言っただろう。

彼の言っている事は至極真つ当だと、正論だと思った。でもそれ故に理想論だと思った。

何故なら、そう言えるのは彼が強者の位置に居るからだ。

普通の平民なら、もしそんな事を言えば侮辱罪で即刻死刑に処されるだろう。

彼の言っている言葉は、強者でなければ、抗い打ち勝つ力の有る者でなければ言えない言葉だ。

そして、普通の平民にはその力はない。

だからと言って彼の言っている事が間違っている訳でも否定した訳でもない。

だがしかし、悲しいことに現実には正しい事が必ずしも罷り通るとは限らない、いやむしろ間違った事の方がこの世には多いだろう。

だから彼の言っている事は、理想論に、空論になってしまう。正しいが故に。

そして、皆それは判っていて、判っていても力が無い故に、従うしかないのだ。私の様に……。

だから、私は憧れた、あの物語の、イウヴァルデーの勇者のような存在に、自分を救ってくれる存在に……。

考え込んでいた事に気が付き、私は我に返る。

そして彼の行動を見て、嫌な予感を感じた。腰に下げている剣に手を掛けたのだ。

(いけない！)

咄嗟に私は呪文の詠唱を始めた。彼は男子生徒を殺すつもりかもしれない。

いかにあの男子生徒に非が有ろうとも、殺しては彼が悪い事になる。況してや相手は貴族の子息だ、確実に死刑に成るだろう。

そんな事を考えて私は詠唱したのだが、突然彼は私の方に強い殺気を飛ばしてきた。

私はその殺気に当てられ、詠唱を止めてしまった。

彼の眼は私を捉え、こう告げていた。

詠唱を止めなければお前から殺すぞと。

私は逆らえなかった。そして、そんな自分が信じられなかった。自慢ではないが、それなりに戦闘をしてきているし、戦いと言うものも知っているし、相手から殺意を向けられた事もある。だからそれなりの自信はあったし、殺気を向けられる事にも慣れていたのだ。

なのに私は今、彼の向ける殺気に恐怖を抱いている。

動けない私を確認すると彼は剣を抜き、男子生徒に突き付けて言った。

「さて、選ばせてやる………………。自身の尊厳に、貴族の誇りに賭けて、その害虫にも劣る命を、自らの手で終らせ、誇りある死を選ぶか。最後まで俺と言う平民に、貴様の塵にも劣る誇りを踏み躪られながら死んでいく事を選ぶか。二つに一つだ、俺が五つ数える間に選べ。どちらを選ばない場合、沈黙の同意とみなし後者を実行する」

そう言うと彼は数を数え始めた。

殺気に当てられ、数秒間動けなかったが、直ぐに我に返り、再び詠唱を始める。しかし、このままでは間に合わない。

「四」

(だめ、間に合わない)

「五、終りだ……………死ね」

彼はそう言うと、剣を振り上げ、勢いよく振り下ろした。もうダメだ、そう思ったその時だった。

「ダメえええ！」

その場に似合わない高い声が響き渡り、振り下ろされた剣は男子生徒の眼前数センチの位置でピタッと停止した。

その場に居た殆どの人物が彼女を見ただろう。

私も驚きその方向に視線を向けた。

そこには一人の少女が居た。少女とは言っても私と同じ位の年の子だろう。

彼女は泣きそうな顔で必死に彼を止めていた。

「ラズお願い、止めて」

その程度の言葉で止まるのだろうか、私は疑わざる終えなかったが、彼は剣をどけ驚くべき事を口にした。

「マスターに感謝しろ……命拾いしたな。今後は発言には気を付けることだな」

そう、可の少女をマスターと言ったのだ。マスター、つまりは主人、あのか弱そうな少女を主人と呼んだ。

しかしそれなら納得できる、使い魔にとって主人の命令は絶対。私の風韻竜もそうだ、伝説の竜だと判った時は驚いたが、今はもう慣れた。

しかし人間の彼でも同じなのだろうか、私には判らなかつた。

そんな事を考えていると、私は今日の出来事の中で一番驚くべきモノを見ることになった。

剣を鞘に仕舞い、彼はその場にしゃがみ男子生徒の怪我の有る部分に手を翳した。そして次の瞬間、あり得ない事が起こる。

(……!!……治療魔法!?)



そう、彼は男子生徒に治療魔法を賭けていたのだ。遠目だが私には判った、あれは治療魔法だ。信じられなかった。平民である彼が何故魔法を使えるのだろうか。普通平民は魔法を使えない。例外として没落貴族や、平民と恋に落ち駆落ちした貴族などがあるが、彼がそう言う風には見えない。考えても答えは出なかった。なので直接聞くことにした。私は急いでその場を離れて行く彼を追った。

s i d e o u t

s i d e セクハラ爺にコッパゲ

学院長室で二人の人物は啞然としていた。

その人物は、この学院の最高責任者である、オールド・オスマンと教師であるジャン・コルベルであった。

二人が啞然としているのには理由があった。

それは、ミス・ロングビルが教師達の代わりに『眠りの鐘』の使用許可を取りに、才人とギーシュの決闘の報告をした事から始まった。

才人の左手のルーンがガンダールヴの物かもしれないと報告をしたコルベルと共に『遠見の鏡』で決闘を見たオールド・オスマンだったが。最早言葉も出なかった。

才人とギーシュの決闘の後に続けざまラズとデフロットの決闘を

見て最早放心状態。何故なら、どちらの決闘も平民が勝ってしまったからだ。しかも後者の決闘は誰が見ても判るくらい圧倒的に。最後の方で、これはヤバイ、生徒が殺される！と思ったが何とか彼の主人が止めたため未遂で終わった。

そして、最後に本日で一番驚かされるモノを目撃した。

なんと、平民であるはずのラスが治療魔法を使ったのだ。

これには二人で顔を見合わせて驚いた。

いったい彼は何者なのだろうか、生徒で実践経験は無いとは言えラインのメイジを軽くあしらい、さらには魔法まで使う。何処までも謎な人物である。そして、最初に我に返ったのはオールド・オスマンだった。

「……………うゝむ、ミスタ・コルベール」

「あ、はい、なんででしょうか？」

オールド・オスマンの言葉に我に返り、返事をするコルベール。そのコルベールに真剣な表情と声で言うオールド・オスマン。

「この事は他言無用じゃ、もちろん王室にもじゃ」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

興奮気味に言うコルベールに、至って冷静な態度と口調で言うオールド・オスマン。

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」

「その通りです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。その姿

形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます！」

なおも興奮気味に言うコルベール。少しウザイ。

しかし、そんなコルベールになおも冷静に言うオールド・オスマン。普段のセクハラばかりのオールド・オスマンとは思えない程の真面目な顔だった。

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……、その協力的な呪文ゆえに。知つてのとおり、詠唱中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは……」

そのオールド・オスマンの言葉を継ぐように、更に興奮したコルベールが喋り出す。正直、人が見たら引くくらいに気持ち悪い。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかつたとか！」

そのコルベールの熱弁を聞き、冷静に聞き返すオールド・オスマン。

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、本当にただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の少年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念のため『ディテクト・マジック』」

で確かめたのですが、正真正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの平民の少年を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが……………」

「彼女は、優秀なメイジかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか……………」

言うに事欠いて無能と宣ったコルベール。

「さて、その二つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約したただの平民の少年が、何故『ガンダールヴ』になったのか。まったく、謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……………」

「更にじゃ」

そう言うと、コルベールを見て、さらに真面目な声で言うオールド・オスマン。

「もう一人の青年の使い魔の彼じゃが、彼もそうじゃ、ガンダールヴの少年と闘ったメイジよりも強い、ラインのメイジをいとも簡単に倒してしまった。しかも、相手に負わせた怪我を治す力……。彼

のルーンはどうだったのかね？」

「あ、はい、召喚の儀が終わった後に、彼の主人のミス・ヘブランストのクラスを担当した教師に見せてもらったのですが、普通に良くある感覚共有のルーンでした。それが何か？」

疑問符を頭の上に浮かべ聞き返すコルベール。

それに顎の立派な髭を撫でながら考えるように言うオールド・オスマン。

「それじゃ、それが解せん。なぜ『ガンダールヴ』ではない彼があんなに強いのか……しかも治療魔法まで使えると来た、ルーン之力ではなく自力でじゃ。……ミスタ・コルベール。彼の契約したミス・ヘブランストはどんなメイジなのかね？」

「はい、私の専門ではありませんが中々に優秀な水のトライアングルメイジです」

「ふむ、更に解せんのだ。トライアングルであればもつとべつの幻獣でもいいはずじゃ。なのにメイジ殺しのように強い使い魔。いったいどう言う訳か……。考えれば考えるほど解らん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とメイジ殺しの使い魔、そしてその主人達を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまったては、またぞろ戦でも引き起こすじゃろうて。宮廷で暇を持てあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

頭をさげ言うコルベールに、少し間を置いて言うオールド・オスマン。

「それに、ミス・ヘブランストに何かあっては、我々がどうなるか解らんからのう……」

「……………確かに」

青ざめた顔で言うコルベール。

そしてオールド・オスマンは、一つ咳払いをして言葉を発した。

「おほん、…では、この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

こうして、学院長室の話し合いは終わりを迎えた。  
様々な疑問を残したまま。

side out

くその頃の使い魔く

その場に居るのも、アジアと一緒に居るのも気まずいので、俺は

適当に歩きだしたが何処に行けばいいのか判らない。

部屋に行ってもアジアが来るだろうし、だからと言って行く場所無いし。どうしたもんかな。

そう思いながら適当に歩いていると、ふいに後から話し掛けられた。

「待って」

その声に振り返って見ると、鮮やかな青い髪に赤縁眼鏡の幼い、ゲフンゴフン、いや少女がいた。

何か嫌な予感がするな。

「何か？」

「貴方に聞きたい事がある」

「何？」

「貴方は何者？」

うーん、何者と聞かれても。そう簡単にはらす訳にもいかないしな。

よし、ここは適当に誤魔化すか。

「何者と聞かれても、ただの平民の剣士だが」

「嘘」

おう、即答ですか。だが、その程度で動揺など

「あの時見せた力は何？」

「……………はい？」

「怪我を治してた」

「……………マジで？」

「やばい、ばれたのか!？」

「うおっ、どうしよう!くっ、どうすればいいんだ!？」

「いや、落ち着け、落ち着くんだけ、coolになれ前br、じゃなく、兎に角落ち着こう。」

「うっん、まさかこうも簡単に気が付かれるとはな。一応魔法ぢやあ魔法なんだが。」

「ふむ、昔の貴族の血が流れてると言ったら?」

「詠唱をしていなかった」

「バツサリ切られた!良く見てんな、しかし参った。もうマジで参った。いっそのこと正体ばらすか？」

「いや、まだまだ、まだ終わらんよ!」

「こうなったらがんと押しきってやる。」

「すまないが、君に教えるわけにはいかないんだ」

「なぜ?」

「ふむ、君にだって知られたくない事ぐらい有るだろう?」

「そう言うと黙ってしまった。数秒間にらみ合う。」



くうつ、沈黙が痛い。頼む、納得してくれ！

「……………判った」

お？まじか！？

イエス！よっしゃ！願いが届いたぞ！有難う神様！信じてないけど。言うより有難うタバサ！

よし！ここは感謝の意味も込めて笑顔でお礼を言おう！

「そうか、有難う。いつか教えよう、それと、何かあったら言ってくれ、君の力になるう」

想いを込めて笑顔を作る、笑顔はあまり得意じゃないが、ここは頑張らなければ！

思い浮かべるのは仲のいい家族、海辺ではしゃぐ恋人達、何と心が暖かく成るのだろう、自然と笑顔が漏れるぜ。

そして込めるは感謝の想い。

いよっしゃ、どんとこい、吸血鬼だろうが翼人だろうがどんとこい！全員打った切ってやる！あ、翼人は戦わないか。

「！……………うん、判った／＼／／」

どうやら喜んでくれたようだ。しかし少し様子がおかしい。

うん？どうしたんだろう？何か顔が赤いが……………熱でもあるのか？

「大丈夫か？顔が赤いが……………」

俺がそう言うと、何故かビックリした様子でこつ言った。

「！！？……………大丈夫」

そう言つと踵を返し、塔の方へ行つてしまった。  
いったい何だつたんだらうか。やはり良く判らん娘だな。何考  
えてるのか判らん。

そんなタバサが見えなくなるまで、見送つた。

しかし、本当にヤバイな。これからは迂闊に魔法は使わない様に  
しないと。

………まてよ、もしかして、もしかしたら、アジアにもばれたか  
も………。

ど、どうしよう。マジではれてたらどうする!?

うーん、さっきタバサに言ったようにメイジの血が流れてるって  
答えるか?

いゝや無理だらうな。

どうすつかな、うーん、………駄目だ、全然思い付かない。

………よし、少し休むか。直ぐそこに寄つ掛かる丁度いい木もあ  
るし。

こうして、絶賛現実逃避中の俺は、木に寄り掛かり、片足を伸ば  
した姿勢で目を瞑つた。

s i d e o u t

f i n

第七・五話

死刑執行、地獄の絶望を見せてやる（サイドストーリー編）

（後書

こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！

今回は閑話のような物になっており長くはありませんでした。

そして、この場をお借りしてお礼をさせていただきます！いずむ様、穹様、慚愧様々、貴重な感想とご意見、誠にありがとうございます！  
ます！

そして、この話を読んでくれる皆様、こんな駄作にお付き合  
いいただき、本当にありがとうございます！！

さて今回は、タバサ目線でした。しかし、タバサってあれでいい  
かな。かなり自信無いです。

さて次回に一つ番外編を挟み次からまた本編になります。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

そして、ご意見・ご感想又は誤字脱字や『ねえ、ここはおかしい  
でしょ？判ってんの？何？死ぬの？』などと言った事が有りました  
ら、是非とも教えて下さい！

真面目な話し、感想は作者の生きる糧になっております。 今後  
とも、この駄文駄作と共に、よろしくお願いします！

次回！番外編？ 『香水と使い魔』を、よろしくお願いします！

因みに作者はギーシュやキュルケは好きです。嫌いではありません  
ん、悪しからず。

## 主人公・オリキャラ などの設定

ここでは主人公達の設定とその他のオリキャラの設定を紹介し  
ます。

### 主人公達

グラスベル

種族：韻狼

性別：男性（雄）

年齢：213歳（人間時の見た目は19歳）

身長：180cm

韻狼族に転生した元日本人。原作知識はある程度持つてはいるが、  
全てを覚えているわけではない。

韻狼のグラスベル（以後はラズと表記）になってからは先住魔  
法の方で人間の姿になっている。

ラズは、前の人間の頃の記憶や経験があるので、人間の姿でいる  
事を好んでいるので人間の姿で要る事が多く、韻狼族の中では変  
人（狼？）扱いされている。

人間の姿の容姿は、髪は黒に近い青で少し長め。判りやすく言え  
ばテイルズオブデステニーのリオンより少し長めと考えて下さい。

身長はまあ外国人的には普通な位。

性格は面倒臭がりなくせに自分の気に食わない事や嫌いな事には  
徹底的に抵抗する。

よつは自分勝手の自己中心的な奴。

前世の性格からか理不尽な事が大嫌いで、理不尽な事には過剰に  
反応し、それに困っている人がいたら放って置けない優しい面もあ  
るが、大概は自分がその状況が気に食わないという事からの行動が

多い。

しかし、一度認められた人は何処までも助けると言う意外な一面も持っている。

女心には何処までも疎い。某聖杯戦争の主人公の如く、超度級の鈍感。

転生のさい、神(?)にある程度の力を与えられていて。

一つ目は、魔法先生ネギま!の世界の魔法。得意なのは、『闇』『風』『氷』で、治癒・治療魔法はあまり得意ではない。何故かと言つと、実際のラズは韻狼族なので普通の人間とは違い回復力は高く、身体能力は高いためあまり怪我もしないため。

二つ目は、ティルズシリーズの剣技や拳技。中途半端な感じもしますが、これには意味があります。

ティルズシリーズの魔法技や召喚技は詠唱が長いうえ、使い魔になるなら剣や拳だろうとの見解からです。ネギま!は無詠唱とがありますしね。

それに、人間の姿の魔法を使うと色々誤解されるため、剣技を使う事にしました。しかし、本編では人間の姿の時にもネギま!の魔法を使っていました。韻狼の姿の時より威力が多少落ち、出せる数も少なくなります。これは勝手なオリ設定ですが、先住魔法の力で人間の姿になっているため、その力がネギま!の魔法に影響を与える、そう思つて下さい。

因みに、前の人間の時の名前はヒキエツ関十かなめ要。

アタナシア・ルミール・ムグドラン・ド・ヘブランスト

種族：人間

性別：女性

年齢：15歳

身長：148？

転生して貴族の娘になった女の子。

侯爵家のヘブランスト家に産まれ、前の人生とは違う世界で健気に生きる。得意な系統は水で水のトライアングル、二つ名は『癒水』。

容姿は、腰まである長い紫の髪をツインテールにし髪飾りでとめている。

身長は148？と低く本人はとても気にしている。当然スリーサイズはその身長にあったモノだ。顔は母親似だが、身体の小ささと相俟ってかなり童顔。綺麗と言うより可愛いと言った感じ。

転生前は心臓病を患っていたこともあり、病弱だったため友達は少なく会うのは家族と病院関係の人ばかり。さらには、何かをするさい嫌でも人に頼る事が多かったため、他人に迷惑を掛ける事を嫌う。

性格は優しく温厚だが努力家。

転生前の記憶もあり、その影響からか家族や友達などの人の繋がりを大切にしている。

転生前の記憶はあるが原作知識は全く無い。そのため、ルイズと親友と言う関係なのは彼女の人柄から来る性格と考えが実を結んだ結果だ。

貴族ではあるが転生前の日本人としての考えがあるアタナシアは学院や周りの貴族たちには変わり者として認識されているが、彼女の人柄から嫌われてはいない。

真面目で純粋な所があるが天然で、周りからはよく誤解されることも。

因みに、転生前の名前は蘭崎真理恵。

## 人間の登場人物

グロイツ・ムグドラン・ド・ヘブランスト

種族：人間

性別：男性

年齢：41歳

身長187？

アタナシアの父親でヘブランスト家当主。代々侯爵の爵位を持つ家系。風のスクエアで、『豪風』の二つ名を持つ。容姿は、髪は焦げ茶色で短髪、揉み上げと繋がるぐらいの顎髭を生やしており、肌が極薄い褐色である。母にゲルマニア人を持ち、昔からその事で周りに馬鹿にされて来たが、本人は気にしていない。

しかし、そう言う経緯があり、人を見下したり卑下する人間や言葉が嫌い。

性格は誠実で優しいが頑固な面もある。

ヘブランスト家は広い領地を持ち、その領地で野菜を作らせており、代々多くの野菜を作って来た。

戦争時に物質として野菜を献上したり、戦争で多くの手柄を挙げた事で王宮から認められ、自分の軍を持つ事を許されたのが曾祖父のアンブローズの代である。

マリアンヌ・マクダウェル・ムグドラン・ド・ヘブランスト

種族：人間

性別：女性

年齢：34歳

身体：170？

ヘブランスト家当主グロイツの妻でアタナシアの母。水のスクエアで、二つ名は『麗水』。

容姿は、腰まであるロングヘアで色は紫、凜とした顔立ちにスラツとした体だが出るとこは出ていると言つ中々の美女。

身長の高さや見た目からクールに見られるが、性格は温和で優しく、少し天然。アタナシアはかなり母親の血を受け継いでいるのだろう。

結婚し姓を変える前の名前はマリアンヌ・マクダウエル・ボワエルデユ。

元々家が秘薬作りが得意な中流貴族であるため、治癒の水魔法が得意。

若くして結婚し、アタナシアを直ぐに身ごもった。家族愛が強く、アタナシアを愛して病まないいわゆる親馬鹿。

元々グロイツとは許嫁で、最初はあまり好きではなかったらしいが、有ることが切っ掛けでグロイツ命になった。

グロイツ曰く、見た目と性格のギャップに引かれたらしい。

デフロット・ド・フロイツ

種族：人間

性別：男性

年齢：17歳

身長：178cm

ラズと決闘をして心に傷を負った貴族の少年。

性格は傲慢で尊大、嫌みつたらしく今のトリスティンの貴族らしい貴族の子息。

平民を馬鹿にし、家畜や道具と同じ様なモノだと思っ込んで、現代の日本人なら誰もが嫌うだろう性格と考えを持っている人物。



まあハリーポッターのマルフォイの劣化番みたいな人物。　ラズとの決闘を経て考えが変わり。　後に領地の平民から、今までの領主とは違った偉大な領主と認められるのは、また別の話し。

アリカ（村娘）

種族：人間

性別：女性

年齢：17歳

身長：167cm

ラズが召喚される前に助けた村娘。

見た目は何処にでもいる娘。肩より少し長い赤茶の髪をポニーテールにしている。

中々に純情乙女な娘。助けられた事でラズに好意を抱くが、当のラズは持ち前の鈍感スキルを発動させ全く気が付いていない。因みに胸はデカイ。

村の村長

種族：人間

性別：男性

身長：172cm

年齢：76歳

ラズが召喚される前に助けた村の村長。

何処にでもある村の村長。

ツルツとした頭に白い髭を生やしたいかにも村長な村長。

村の代表で領地の貴族に謁見しお願いをしたり、村の規則を決めたり色々大変な人。

因みに趣味はポエムを読む事。

### 韻狼族

グレベツト

種族：韻狼

性別：雄

年齢：子供当時12歳（現215歳）

全長：当時1m20cm（現3m43？） 韻狼族の子供でいわゆるガキ大将、韻狼族子供の中でも一番歳上。

我が儘で強引な所もあるが、何だかんだで仲間の事を考えている根は良いやつだが、やり方が極端だったり持ち前の行動力で周りを振り回したりと空回りばかりしている。

ボルモルド

種族：韻狼族

性別：男性

年齢：当時8歳（現211歳）

身長：当時1m5cm（現2m90cm）

韻狼族の子供でラズやグレベットの弟のような存在。

気の弱い性格のせいか、強気な人に弱く、よくグレベットに言い負かされたりしているが、心根は真っ直ぐで優しい子。少し優柔不断な所もあるが、遣るときはやる奴。

年下の子には優しい兄として慕われている。

ルナミール

種族：韻狼族

性別：女性

年齢：当時12歳（現215歳）

身長：当時1m15cm（現3m）

韻狼族の子供で一番歳上のお姉さんの存在。

子供の中で一番落ち着きがあり、喧嘩や話し合いの場ではいつも間に入り中立の立場が多い。

年下の子達の面倒を見るのが好きでよく世話を焼く優しいお姉さん。

そんな彼女だか時には皆が驚くような行動を見せる事もある。

アルトリシャ

種族：韻狼族

性別：女性

年齢：当時8歳（現213歳）

韻狼族の子供で少し勝ち気な女の子で、グレベットやルミナールの妹のような存在。

その勝ち気な性格からよくグレベツトと喧嘩している。

大概はルミナールやラズに止められ収まる。

感情的には成りやすいが、優しい一面もあり、よくルミナールと小さい子達の面倒を見たりしている。

ラズに淡い恋心を抱くものの、自分の心に正直になれず、想いを告げることが出来ないでいる。

### ゲルゼルグ

種族：韻狼族

性別：男性

年齢：500歳（人間時は見た目30代後半位）

身長：人間時190cm（韻狼時7m28cm）

ラズの父親で韻狼族の中の変わり者。

世界を旅しながら人助けをして回る。しかし、ラズに剣を預けた後に、暫くしてから消息が一切不明になる。

### リズラルル

種族：韻狼族

性別：女性

年齢：478歳（人間時は見た目30代前半位）

身長：人間時172cm（韻狼時6m82cm）

ラズの母親で韻狼族の中の変わり者と生涯の契りを交わしたこれまた変わり者。

性格は、冷静沈着だが冷徹ではない。母として、親としての優し

さを持っている。

グレベットやルミナル、アルトリシャやボルモルドの親達とは年が近く仲がいい。

韻狼族の長

種族：韻狼族

性別：男性

年齢：????

全長：10m54cm

韻狼族の長。兔に角謎の存在、何れだけ長く生きているかは誰も知らない。

現韻狼族の中で最強の存在らしい。

子供曰く、めっちゃくちゃ怖いらしい。

主人公・オリキャラ などの設定（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです！

今回は単なる紹介です。特には何も無いと思います。  
これからもよろしく願います。

番外編 香水と使い魔（前書き）

先ずは謝罪を……、遅くなりま誠に申し訳ありません。

## 番外編 香水と使い魔

決闘から次の日の昼下がり。昼食である賄いを貰い、腹を満たした後、一人考えていた。

召喚されてから三日目、昨日一昨日と飯を恵んでもらい、俺は何をしただろうか？

二日目はケーキの配膳を手伝ったが、ギーシュとサイトの決闘で途中退席。そして今日はまだ何もしていない。

そう思った俺は早速何か手伝うため、動いた。

厨房の奥には、食材のチェックをしている、厨房の責任者であるマルトーさんがいた。その旨を伝えるため俺はマルトーさんと呼んだ。

「お忙しい所済まない、少しばかり良いだろうか」

「うん？おお！誰かと思えば『我らの盾』じゃないか！」

我らの盾？なんじゃそりゃ？

いきなりのマルトーさんの発言に思考が止まるが、直ぐに我に返る。うーん、何か色々面倒だからその『我らの盾』について聞くのは後にしよう。

そう言う訳で、俺はさつき考えていた事を聞く事にした。

「突然済まないが、何かやる事は無いか？いつも美味しい飯を貰っている恩を返したい」

そう、俺はただ飯が嫌だった。まあアジアの使い魔だから俺の飯代はアジアの家が払っているようなものだが、それこそ何かせすには居られなかった。



だって良く考えてみるよ、いくら使い魔だからと言ってアシアを守る時以外は暇だし、守るような事なんてそうそう起こりはしないぜ？つまりは、このままじゃ何もしない紐男だぜ？

いくら何でもそりゃ男としてのプライド（見栄）が許さん。と言っ訳で、手伝いを申し出たんだが……………。

「何言ってんだ！『我らの盾』に手伝いなんてさせらんねえよ！」

と言われてしまった。参ったな、昨日の決闘がまさかここまで弊害を生むとは。本当はサイトをあつさり勝たせるだけだったんだか……………。

それからが大変だった。俺にはこんな仕事は手伝わせられないと言いつ張るマルトーさんを何とか言いくるめ、説得する事小一時間。

何とか手伝わせてもらう事になり、何をすれば言いか聞いた所、昨日と同じ様に午後のティータイムを楽しむ貴族達にスイーツを配ってほしいとの事。

よし来たと二つ返事に了承すると、何処から出してきたのか、いつの間にかシエスタが執事服を用意していた。

え〜と……………、マジで着なきや駄目ですか？

とても期待するような目で此方を見る（メイドの）使用人達。

はい、判ります。着なければいけないんですね。

仕方なく着替える事にし、外の厨房の裏で着替えてきた。

しかし、執事服なんて来た事無いし、上手く着れてるか判らん。

「着てきたが……………、どうだろうか？」

そう聞き返したのだが、誰一人返事をしてくれない。

顔を赤くして目を刺らす人や、啞然とした顔でボ〜ツと此方を見ている人がいる。

そ、そんなに似合わないのかな……………。

軽く落ち込んだ俺だったが、直ぐに気を取り直し配膳の手伝いをする事にした。　気持ちを切り替え広場に向かう事にした。

所変わって広場。　昼食を食べ終わり、仲の良い者同士で喋ったり、一人お茶と自然の空気を楽しんだりする貴族が沢山いた。

とは言っても、殆どが女子の貴族であり、全女子が居るわけでも無いので対した人数では無いが。

まあ人数なんてどうでもいい。　さあ、紐にならないため、俺の精神的健康の為に遣るぞ〜！

そして、ケーキと紅茶のようなお茶が入ったワゴンを押して歩き始めた。

すると、歩き始めて直ぐに呼び止められた。

「その使用人、お茶をいただけるかしら」

そう言われたので、直ぐに返事を返しお茶を入れる。

呼ばれた席には二人の貴族がいた。

ポットを軽く揺らし、カップに紅茶を注ぐ。

回りに飛び散らないように細心の注意を払いながらも、相手を待たせないよう素早く。

二人分出すため、濃さがバラバラにならないよう、交互に注ぐ。

ふう、こんなもんだらう。

素早く、しかし雑に成らないよう丁寧に紅茶を入れたカップを置く。

入れた紅茶はベルガモット（だと思う、匂い的に）。　爽やかな柑橘系の香りが、気持ちを高揚させる。

楽しく話をするにはいい紅茶だらう。

好みで味を調整出きるよう、砂糖の入った瓶を置く。

そして今日のスイーツはチーズケーキ。甘味を抑えた、チーズの香りが豊かな、本格派のチーズケーキ。

切り分けたケーキを皿に移し、その皿をテーブルに置く。そして一言。

「大変お待たせ致しました。それでは、ゆっくりお楽しみ下さいお嬢様。」

自分に出きるであろう最上の笑顔を浮かべ述べる。

普段であれば絶対しないので、折角だから執事に成りきってみる。気分はさながら某悪魔な執事のような。

まあご主人様は秘薬造りが趣味な人だが。間違ってもオモチャ会社のトップではない。

「それでは、失礼します」

そう言っただけの日テーブルに向う。

今度のテーブルは、一人で座っている所だ。

食後の穏やかな午後を、太陽の暖かな陽を浴びながら優雅に読者を楽しむ。

まさにそんな感じだ。

邪魔をしないよう、なるべく音を立てないように入れる。

先程使ったポットとは違うもう一つのポットを取り、カップに注ぐ。

今度のお茶はカモミール（だと思っ、匂い的に）。鎮静作用とアロマのリラックス効果で、ゆったりとした午後の一時をご提供。

注ぎ終わったカップをゆっくりと静かに置く。動いたさい引っかけたり、ぶつかったりしないよう、見やすく手の届く位置に置いたのを確かめ。

声は掛けず無言で一礼して次のテーブルへ。

そんなこんなで、チーズケーキも直ぐに配り終わり、紅茶も無くなつたてしまった。

さてどうしようかと考えていると後から声を掛けられた。

「ラズさん」

誰かと思ひ振り返るとシエスタだった。

地獄で仏、渡りに船。困ったときのシエスタさんです。

丁度いいので聞いてみる事にした。

「良いところで会った、済まないのだが手持ちのケーキと紅茶が無くなつてしまったのだが、どうすればいいだろうか？」

「え？もうですか？速いですね、でしたら一度厨房に戻つて新しいのを取つて来てくださいますか？私は貴族様を使い終わった食器を回収しますので」

「了解した」

そう言つて俺はワゴンを押して厨房に向かった。しかし、さつきから気になるんだが通るたびに貴族の生徒から見られているような気がするのだが……俺の執事服はそんなに似合わんか？

少し落ち込むな………（泣）

そんな事を考えながら表情には出さず厨房に向う。ふふん、ポーカーフェイスには自信があるぜ！

まあ今は果てしなくどうでもいい事だが。

厨房に入り、ケーキと紅茶が無くなった旨を告げ、直ぐに代わり

を用意してもらおう。

メイドさん達は直ぐ様に用意をしてくれた。うむ、有能なメイドさんだ！

ケーキと紅茶の追加を貰うと、軽くお礼を済まし厨房を出て広場に向かう。

広場に着くと直ぐに貴族の女子生徒から声が掛かった。

「ちょっと、紅茶貰えるかしら」

二人組の女子生徒だ、直ぐに返事を返し紅茶を入れる。

「かしこまりました」

丁寧な返事と最高の笑顔で持つて答える。正に気分はプロの執事。

おっと、紅茶を入れる前にミルクの有無を聞かなきゃな。

「ミルクはどういたしますか？」

「私を入れて頂戴」

こちらは金髪ブロンドでストレートロングの女子生徒。

「私はストレートでお願いしますわ」

こちらはブラウンでシャギーの掛かったセミロングの女子生徒。

「かしこまりました」

注文通り、最初の女子生徒はミルク入りを、次の女子生徒はストレートを入れる。

紅茶を入れてみると、ふと視線を感じたのでそちらを見る。すると今紅茶を入れてあげている女子生徒がじくっつと此方を見ていた。

何だろうか、俺の顔に何か付いてるか？

なんだか遣りずらいので聞いてみる事にした。

「どうかいたしましたか、お嬢様」

俺は笑顔でそう質問した。すると、何故か慌てた様子で「な、何でも無いわ」と言われてしまった。あからさまに何か有りそうだが、むう気になる。

しかし追及することも出来ないの（ゴタゴタになったら面倒だし）、その場は笑顔で挨拶をしてその場を離れた。

それから何席か回ったが何処も同じ様な反応をされたのでいい加減慣れた、ああ、どうせ俺の執事服は似合わないさ。人、此を開き直りと言う。

そんなこんなで次のターゲットを探していると、見知った顔があった。

長い金髪をオールバックにし、デコ見せ縦ロールの言わずと知れたモンモランシーさん、通称モンモン。

しかし少し様子が変わり、何だかな浮かない顔でテーブルに肘をつき如何にも元気が無いご様子。

まあ、原因は判るんだがな。十中八九ギーシュの事だろう。まったく、どうしようもないなああの気障な青二才は。

だが悲しいかな、俺にはその傷付いたハートを癒して遣ることは出来ない。

今の俺の出来ることは紅茶を淹れる事だけだろう。

てなわけで俺にできる事をする事に。

ゆつくりと近づき驚かせない様に、笑顔で、優しく、丁寧に声を掛ける。

「お嬢様、紅茶はいかがですか」

Side Out

Side モンモランシー

私は落ち込んでいた。

昼食も食べないで一人、広場のテーブルに腰を掛けずっと考えていた。

判ってはいたのだ。ギーシュはあの女好きで有名なグラモン家の四男である。

手当たり次第の女を口説き自分を薔薇と称して止まない気障男。

私から見てもそう思うし他の女から見てもそうなんだろう。

私だって最初は本気じゃなかった。いやある意味では本気だったか。

軍師の家系であるグラモン家は、トリステインでも有名な家系の貴族だ。だから、打算的に近づいた。

我が実家のド・モンモランシ家はトリステイン王家と水の精霊との盟約の交渉役を何代も務めてきた。でも、お父様が盟約の更新のさいに水の精霊を怒らせてしまい、領地の干拓に失敗してしまった

ため、ド・モンモランシ家は盟約の交渉役から外されてしまい領地の経営が苦しくなってしまった。

なので、少しでも各上の力のある貴族と縁をもち、モンモランシ家の跡取り婿として迎えねばならない。

そうでなくても、力のある貴族と仲良くなるに越したことはない。そう、私はあらゆる手段を用いても、家を建て直さなければいけないのだ。

そう言う意味で私はギーシュに近づいた。そう、最初はそうだった。

頑張つて彼に近づき、好意がある振りをし、言葉で誘い、好きでもない甘い言葉を囁いた。

他の女を近付かせないようにもした。彼に気に入られるように化粧もしたし、得意の香水もプレゼントした。

でも……彼は私だけを見てはくれなかった。

そしてあの日、私は気付いた。

ああ、私は本当に……彼が好きなんだなと。

そして私は、そんな自分に驚き、戸惑い、そして悲しくなった。

判っていた、判っていたはずなのに……。私は彼が囁いたあの言葉を、『君だけだ』と言うあの言葉を信じてしまった。

だから、あの日一年のケティと言う子に彼が言ったあの言葉に、私は裏切られた様な絶望感に襲われた。

『いいかい、僕の心の中に住んでいるのは、君だけ』



泣きたかった。泣いて喚き散らして、知りうる暴言を投げつけたかった。

でも……………、彼と対峙したとき、上手く言葉が出なかった。だから、冷静を装った。

でも、彼の口から出た言葉にまた怒りが暴れた。テーブルに有ったワインの壺を掴み頭から浴びせるようにかけ、一言怒鳴り、私は走って自分の部屋に帰った。

逃げるように部屋に飛び込み、制服にも関わらずベッドに潜り込み、声を押し殺し一人泣いた。

悔しかった、悲しかった、惨めだった。そして何より、そんな自分が嫌だった。打算だったはずだ、本気じゃなかったはずだ、計画で計算で、そこに恋愛感情はなかったはず……………なのに。

いつの間にか彼を好きになっていた。だから、だからこそ自分が許せなかった。下心で、打算で近づいた。そんな私に彼を責める資格なんて無い。そう思うとひたすら自己嫌悪だった。

悔しい、悲しい、苦しい、そして惨めで、そんな感情を抱いてる自分に自己嫌悪した。

そして夜まで泣き続け、いつの間にか泣き疲れて眠ってしまったのか。気が付けば朝だった。

朝目が覚めて、鏡の前で映る自分を見て霞の掛かった様な頭で考える。

(酷い顔……………)

自慢の髪はぐしゃぐしゃで、着たまま寝た制服はシワだらけ。かおは一晩泣き明かしたせいで赤く腫れているし、泣いた跡が見える。眼も充血して真っ赤だ。

(最悪……………)

心の中でばやいてもその酷い状態が変わるわけではない。

仕方がないので身支度を整える事にした。

こう言う時に何だが、水のメイジでよかったと思う。

常日頃から水は使うから部屋に常備している。

まあ魔法で出せば良いかもしれないけど、今はそれすら遣りたくないほど気持ちは下向きだ。

顔を洗い、紙を整え服を着替える。さっきよりはだいぶましになったが人前に出られる顔じゃない。

気持ちは落ち込んだままだし、今日は授業をサボろうかと思った所で……きゆるる……

お腹は正直だった。仕方がないので食堂に行く事にした。今ならまだ間に合うだろう。そうして、意思とは反対な欲を満たすため、食堂に向かった。

今日の授業は火の講義。でもまったく頭に入って来ない。まあ元から火の講義はよく判らない。勉学的にと言うよりは、この授業の

先生の言っている事が理解出来ない。

カラクリ？へびくん？生活の向上？

あんなガラクタを作って何が火の魔法に関係するのかわからなかった。

たぶんそれは皆同じだろうと思う。

そんなこともあって私は終始ボツツとしていて、気が付けばいつの間にか授業は終わっていた。

授業は終わり、本来なら昼食を取るのだが、私はそんな気分ではなかったので一人で広場に向かった。

広場に着き端の席に座りボツツと一人考える。

昨日の事、ギーシュの事、そして自分の事。

彼が、ギーシュが憎い。ギーシュに近づいたあの一年の女子が憎い。

でも……………そんな自分が一番憎くて嫌いだ。

いつその事自分から謝ろうか？

いや、それも嫌だ。そもそも二股をしたのはギーシュだ！最低な事をしたのは彼なのだ！私が謝る必要はないはずだ！

でも……………。

そんな考えを何十回繰り返したのか、いつの間にか周りには食後の雑談や休憩などで集まった生徒で溢れていた。

同姓の友達という生徒、または異性と楽しそうに話している生徒。

……… なんだか見ていると、段々と自分が惨めに思えてきた。

ため息を付き、別の場所に行こうかと思ったその時だった。

突然横から声を掛けられた。

「お嬢様、紅茶はいかがですか」

その声の方に振り向くと、厨房などの使用人と言うよりは執事のような服装の男がいた。

その男の声を聞いたとき、何故か判らないけど安心してしまった。優しく、穏やかで、透き通るようなその声の主に、私は暫しボウツと見とれていた。

私より少し年上で、背の高い穏やかな表情の笑顔と物腰。

始めて見るはずのその男に私は不思議と心が安らいだ。

どれぐらい見つめていたのか、その男の声で我に返った。

「二種類の紅茶が御座いますが、どちらにしますか？それとミルクはどうなさいますか？」

「え？あつ！えつと……。ま、任せるわ！」

「かしこまりました」

そう笑顔でいい、男は紅茶をカップに注ぎ始めた。

カップに流れるように注がれるが零れる事は無く、暖かそうな湯気をたてた紅茶を私の前に置く。

その紅茶を手に取り一口、口に含んだ。

「う………苦い」

耐えられない事は無いが少し苦かった。

でも何故か、不思議とその苦味は嫌じゃなかった。

そんな私を見た男はクスツと笑うととても微笑ましい物を見るような目で言った。

「砂糖を入れてませんから、それは苦いですよ。さあ、好みでお入れください」

そう言って差し出された砂糖の瓶を引たくるよう受け取り、慌てて砂糖を入れた。頬が僅かながら熱くなった。

何となくさっきの事が恥ずかしくて無言で砂糖を入れた紅茶をもう一度口に運ぶ。

「あ………おいしい」

さっきは苦かった紅茶は、砂糖を入れた事で適度な甘さになり、紅茶独特の香りと苦味がアクセントになりとても美味しく感じた。

そして程よい苦味と甘さの余韻が、身体に染み渡る、それは何故か私の心にまで染みて、凍え傷付き荒れ狂っていた私の心は、いつの間にか何か暖かいモノで満たされていた。

そして私は無意識の内に聞いていた。

「この紅茶はあなたが淹れたの？」

その男は穏やかな表情で答えた。

「いいえ、恐れ乍ら、この紅茶はメイド達が淹れた物です」

「……………そう」

あてが外れ少し肩透かしされたようなそんな気持ちになった。

「しかし——」

でも、次にその男が言った言葉に私は驚いた。

「カップに注ぐさい、一緒に愛情もこめましたので、その分美味しくなったのかも知れませんね」

穏やかで優しい微笑みを浮かべそう言った男。暫しの驚きの後、自分の顔が急激に熱くなるのを感じた。

（な、ななな！？あ、愛情って！？）

急激な顔の熱の上昇と、男の言葉に私は恥ずかしさと混乱で頭が一杯になってしまった。

しかし、こう言う時に限って嫌なことは起きるものなのね。

——くきゅるるう——

しまったと思った時にはもう遅かった。完全に聞かれた、うう——  
／／／／／

いくら平民だとは言え、まさかお腹の音を聞かれるなんて……………。

私は恥ずかしさで顔を伏せてしまった。

ああ、こんなことならちゃんと昼食を頂いておくべきだったわ。でも後悔してももう遅く、既に私の恥ずかしいお腹の音は聞かれた後で……。

さっきよりも顔は熱く恥ずかしさで鼓動が早くなる。とても気まずく、どうすればいいのか判らず頭は大混乱。

うっ、もう泣きたい……。

もう完全に頭はパニックになり何も考えられなくなり羞恥心に押し潰されそうになったその時だった。

コトリと言う何か固いものをテーブルに置く音が聞こえ、私は恐る恐る顔を上げると、目の前にはお皿に乗った二切れのチーズケーキが有った。

私は直ぐ様男の方を向いた。そして私が見た物は……。  
何か愛しい物を見るような暖かい眼差しを此方に向けていた男がそこにはいた。

「今日のデザートはチーズケーキです。紅茶に良くあいます。召し上がって下さい」

「え、でも……」

二切れある、と私が言う前に、その男は人差し指を口の前に持ってきて、『秘密です』と口を動かす形だけで、私に伝えてきた。

私は啞然としていた。

「それでは、ごゆっくりお楽しみ下さい。紅茶のおかわりなどのさいは直ぐにお申し付けください」

そう言って去っていく男をしばし啞然と見送った後、我に返った私は。

(つて、二つも食べたなら太るじゃない！もっと察しなさいよ！)

と思いながらも悪い気はしていなかった。

それどころか、何故か暖かい物が胸の中に残っていた。

男の置いていったチーズケーキは、食べ馴れチーズケーキのはずなのに何時もより甘く感じた。

おまけ

Side 女子生徒二人組

「ミス・セレネあなたは昨日のことどう思います?」

金髪ブロンドでロングストレートな少女がもう一人の少女に言った。

「昨日のことと仰いますとあの決闘の事ですか?ミス・アフレ」

セレネと呼ばれたブラウンのシャギーの掛かったセミロングの少



女が聞き返す。

「ええ、そうです」

「どつとおっしやられても……、うう、思い出しただけでも体が震えますわ。あの決闘……と呼んで良いのかすら判りませんが、二度と見たくありませんわ。殿方はあれの何が面白いのかしら」

「ええ、セレネのおっしやる通りね。私も生きた心地がしなかったわ」

彼女達は誤解をしている、サイトとギーシユの決闘程度で有るならば、学院の男子達は楽しみながら見ていただろう。

しかし、デフロットとグラスベルの決闘、基一方的な虐待は、見ていた殆どの貴族がもう二度と見たくないと思っただろう。

あれはもう決闘などという礼儀を重んじた甘いゲームの様なモノではない、あれは完全なる絶対的な力で弱者をねじ伏せる、謂わば暴力だ。

「でも驚きましたわ、まさか平民が貴族をまるで赤子の手を捻るように倒してしまうなんて」

「そうね、何せ相手はメイジ殺しだもの。……あら紅茶が無くなっ  
てしまいましたわね。」

アフレがそう言うところに丁度使用人が通り掛かった。

「ちょっと、紅茶を貰えるかしら」

アフレの言葉に足を止める、そして此方を向き優しい微笑みで返

事をした。

「かしこまりました」

その時！彼女達の中を何か衝撃の様なものが駆け抜けた！！

（な、何！？この衝撃は何なのですか！？）「ミルクはどういたしますか？」

使用人の男のその言葉に我に返った二人は慌てて返事をした。

「私は入れて頂戴」

「私はストレートでお願いしますわ」

その返事を聞いてまた優しい、暖かい笑顔で了解の返事をする使用人の男。

「かしこまりました」

そして、その笑顔に何故か鼓動が速くなる二人。

（う、こっ、これは……………）

（いったい何なのですか？）

そのよく判らない現象に、二人は戸惑いお互いの顔を見合せた後に、どちらともなくその使用人の男をじっと見ていた。

二人の視線を感じ取ったのか、使用人の男はふと二人の方を見て数秒キョトンとした顔を見ると、今度は穏やかな笑顔で聞いて来た。

「どうかしまったか、お嬢様」

（お、お嬢様！？）

「な、何でもないわ／＼／＼」

「……………／＼／＼／」

その使用人の男の言葉にアフレは誤魔化す様にはぐらかし、セレネは下を向いて黙ってしまった。

だがお嬢様と呼ばれるのは別段珍しくはない。

学園では呼ばれる事は無いが、実家ではお付きのメイドや執事、その他使用人達からは当たり前のように呼ばれていた。

なのに何故だろうか、この使用人に呼ばれたとき瞬時にして鼓動が速くなった。分からない、いったいこれは何なんだろうか。

そんな事を考えていると、使用人の男は「それでは、失礼します」と一言言い残し別の生徒の所へ行ってしまった。

二人は暫くの間、使用人の男をじつと眺めていた。

その胸に、理解できないが、何か暖かいモノを宿しながら。

後に彼女らが、此のときの使用人がデフロットを決闘と言う名の一方的虐待でボコボコにした平民だと知り、怖がるかと思いきや。戦っている時の冷たさと、使用人の時の優しい微笑みのギャップで萌えると言う荒業をやつてのけるのだが、それはまた後の話し。

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

## 番外編 香水と使い魔（後書き）

こんにちは、又は今晚は！お久しぶりでございます！グルタミンです！

長いこと投稿できず誠に申し訳ありません、生活の事情とスランプで長らく手を付けられてませんが、もう一度書き始める事にしました！

覚えててくれましたかね？私としては忘れられていると思っってますが…………。

兎に角！今回は番外編を投稿しました！

まあ例の如くまた駄文になっているのですが…………。すいません、マジで文才無いっす…………orz

はてさて、今回は番外編で急遽内容を変更をしたのですが、次からは本編になります。

少し進んだらまた番外編をやりますので、長い目で待っていてください。

そして、毎度の如くですが。ご意見・ご感想、又は誤字脱字の報告。そして『何これ？やる気案の？死ぬの？』等のご指摘、是非お待ちしております！よろしく願います！

さて次回は！第八話『虚無の曜日で野暮用』を、よろしく願います！

ああ、本当に久しぶりでブランクとスランプです……。

第十話 虚無の曜日で野暮用（前書き）

かなり遅れましたが第十話です！

## 第十話 虚無の曜日で野暮用

アジアに召喚されてからもう8日目だ。

今日も今日とて部屋を掃除し、終わったら食堂へ行く予定だ。

今はアジアを起こして食堂に向かわせた後だ。

最初は洗濯もしようと思ったのだが、なぜかアジアはやらなくていいと言って（半強制的に）、やらなくていい事になった。

俺的にはどうせなら遣ることはやっておきたいのだが。てかそう言った仕事やらないと暇になっちゃうんだよね。

まあ兎にも角にも仕事は終了した。今の時間はだいたい8時頃だろうか、普段であるならば皆授業なのだろうが何分今日は虚無の日である。

つまりは日曜日のような物で週唯一の休みの日と言っているだけだ。

さてと、他に何か遣るべき事が無いか考えてみたが何も無い。

まあ先ずは厨房にでも行って飯を貰うか。

そうして俺は、労働により気持ち良く空かせた腹を満たすため厨房に向かった。

厨房に向かい廊下に出て階段を降り、厨房に続く廊下に出て三人の人物に出会った。

「あ、ラズ丁度よかったわ。今呼びに行こうと思ってたの」

ぴょこんと言う擬音が似合いそうな動作で俺の目の前まで来たアジア。

ふむ俺に何の用だろうか。

しかし、その疑問はもう一人の人物に言われ解決する。



「サイトの剣を買いに町までアジアも一緒に行くのよ。アンタも来るのよ、ご主人様が来るんだからアンタも行くのは当然でしょ」

さも当たり前のように言ってくれやがったよこのチミツ子は。

いや、まあ別に暇だからいいんだけどね。

うむ、そうか。剣を買いに行くと言うことはデルフ回収イベントか。

ふっ、これでまた一人（一ふり）舞台の役者が揃うのか。

……………すみません、調子に乗りました。

ふむ、そう言えば昨日の夜、外で剣を振ってたら女子塔の部屋の一つが、何故か急に炎上したっけ。その後に何か落ちてきたし。

そうか、あれはキュルケのサイト誘惑事件の惨状だったわけか。

そんな馬鹿な一人漫才と考察を心の中で繰り広げていると、突然のツンデレさんの声で現実に戻る。

「何よ、一緒に行くのが嫌だって言っの」

「駄目……………かな？」

おっといけない、黙ってたのがいけなかったのか俺が行きたくないと思っていると誤解されたか。

ルイズは怒った顔で、アジアは困った様な不安そうな顔でこつちを見ていた。いや、まあルイズは怖くはないがな、むしろ可愛い方だ。

といけない、返事を返さねばな。

「大丈夫だアジア、問題ない」

「本当に？……………よかった」

「まったく、なら早く言いなさいよ」

うむ、そんなに俺は断る様に見えただろうか？

まあいいか、出かけるのだから準備が必要だ。今の俺は剣を持っていない、何故ならアジアとルイズに学校の中では持ち歩かない様に言われたからだ。何でも剣を持っている俺は一種の威圧感が有るらしく周りの貴族の坊っちゃん方が怖がるらしい。まああの事件の後だから仕方ないと言えば仕方ないがな。

て事で剣を部屋まで取りに行くことに。

「それじゃあ馬を借りに馬小屋までいきましよう」

おっと、話が進んでいる。

「済まないが剣を部屋から取ってきたい、先に馬小屋まで行っていてくれないか」

「むう、早く来なさいよ」

「うん、じゃあ先に馬小屋にいるね」

「じゃあまた後でな」

三人の返事を聞き部屋に戻る俺。サイトいま始めて喋ったよな、サイトの剣を買いに行くはずなのに。

部屋まで戻り、壁に立て掛けてある剣を取りまた部屋を出る。一番下まで降りた所で俺は最初にしようとしていた事を思い出した。俺朝飯食ってないよ。いや、一食ぐらい我慢できるが食べておくに越した事は無い。

しかしどうしたものか……。そうだ！マルトー親父に頼んで

サンドイッチを作って貰おう。それなら移動中の馬の上でも食べられるかもしれない。かなりの曲芸状態になるが。

てな訳で厨房に直行、マルトー親父の熱い抱擁と悪魔のキスを綺麗に避け本題へ。

「済まないのだが、サンドイッチを作って貰えないだろうか」

「サンドイッチ？何だ、どこか行くのか？」

「ああ、少し町までな」

そう説明すると何故かマルトー親父は嬉しそうな顔をして返事をして了承してくれた。

数分してできたサンドイッチをもらった。もらったのだが……。何か量が多いんですけど？

「済まん、つい張り切り過ぎて作りすぎちゃった！」

いや、なぜ貴方に張り切る必要が？

良くわからんが……。まあサイトとかルイズも居るし、四人で食べれば丁度いいか。

そんな感じでバスケットのようなカゴ一杯のサンドイッチを手に持ち馬小屋の方へ。

え？場所は知ってるのかって？ふっ、俺に抜かりは無いぜ。大丈夫、ちゃんと場所はメイドさんに聞いてきた。

厨房をでて暫く歩き門のような出入口と小さな小屋が見えた、あれが馬小屋かな。もう待っているであろう三人の元に急ぐ。

すると、何か怒鳴るような声が聞こえた。

「どう言う事！馬が足りないなんて！」

「そうおっしやられても……、今は馬は三頭しかないのです」

「どうにかありませんか？」

「そう言われましてもこればかりは……」

どうやら怒鳴り声の主はルイズのようだ、どうやら馬の数が足りないらしい。

「どうかしたのか？」

「お、ラズ。何だそれ」

尋ねた俺にサイトが逆に質問してきた。こらこら、質問に質問で返さない、おじさん感心しないぞ。

「サンドイツチだ、それで、あの二人はどうしたんだ？」

まあ一応聞く。

「ああ、何か馬の数が足りないんだって」

「そうか」

さっき聞いてたから判ってるけど。

何をそこまでもめる必要が有るだろうか、三頭しかないなら誰か一人が誰かの後に乗ればいい。

まあ、ルイズとサイトは無理だろう。てか今のルイズじゃ嫌がる。となると俺とサイトか？

……… 絵図等的に何か嫌な物があるが、まあ仕方ないだろう。

「もう、良知があかないわ！」

「大きな声を出して何を騒いでいるんだ？」

「あ、ラズ、実は」

アジアから話を聞き、俺は一つの提案をした。そう、さっきの話だ

「そうか、ならばこう言うのはどうだろう。三頭馬を借りて一頭を二人で使えばいい、ようは誰か二人が一緒に馬に乗ると言うことだ」

俺のその言葉に最初に反応したのはルイズだった。

「あのねえ、二人で馬に乗るのはいいけど道は行きだけじゃないのよ？ 帰りだって馬は使うんだから。それに、誰と誰と一緒に乗るのよ」

ふむ、馬の体力の心配か。ならば餅は餅屋だ。直接馬に聞いてみればいい、フッフッフ、韻狼の力なめるなよ！

俺は馬小屋にいる馬の所まで行き小さな声で馬に話しかける。

（少し聞きたい、行きと返りで約六時間の道のりなんだが体力の方は持つか）

（兄さん、俺達を馬鹿にしてもらっちゃ困りやすぜ。こつちとら走ることに命を賭けてるんでい！六時間だろうが十時間だろうがどんと来いでい！）

なぜ江戸っ子風なのかは判らないが、しかも馬なのに馬鹿にする  
など来た。じゃあお前は何なんだ！

話がそれだが、随分と頼もしい言葉だった。ならば問題ないだろ  
う。

馬の確認を終えルイズの所まで戻る。

「馬は大丈夫だ、あれなら四時間の往復も耐えられる。誰が一緒に  
乗るのだが、俺とサイトが乗ればいい、アジアとルイズは一人で乗  
ってくれ」

「そう、それなら　「ちょっと待った!!」な、いきなり何よ！  
？」

突然サイトがルイズの言葉を遮る様に話に入って来た。  
何だいきなり、あまりの自分の空気さに物申すのか？

「いくらなんでも男とニケツは嫌だ！」

この男、馬鹿につき対処しようがない。てかお前は何がしたいん  
だ？せつかく話が纏まりかけてたのに。てかニケツって言ってもル  
イズ達は判らんだろ。

ああ、ほら、ルイズの頭の上に『？』が浮かんでるよ。

仕方がないのでサイトにニケツの意味を聞く。すると意味を理解  
したルイズが怒りだした。

「あんだねえ、誰の為に町まで行くと思ってるのよ！こんなときに  
我が儘言ってるんじゃないの!!」

今回はルイズが正しい。まあサイトの気持ちは男として判るが、

今回は我慢してもらいたい。てかしろ。

ギヤアギヤアと言い相を始めた、仕方ない止めるか。そう思い二人に声をかけようとしたその時、服の裾を引っ張られた。

引っ張られた方を見るとアジアだった。まあこの場には俺を含めて五人しか居ないのでまあこう言った行動をする者は限られる訳だ。

「ねえ、ラズは馬には乗れる？」

「ああ、乗れるが」

その返事を聞くや否や、言い争っているサイトとルイズの元へ行くアジア。

「ねえ、ラズと乗るのが嫌なのよね？」

「え、ああ、まあそうだけど……」

「そう、なら大丈夫よ。私とラズと一緒に乗るわ」

なんと、そんな事を言ってくれやがりました。アジアさん、貴方はいったい何をお考えで？

「な、何言ってるのアシア！？ダメよそんなの、使い魔って言うたって平民なのよ？平民と一緒に馬に乗るなんて！」

「うーん、別に私は問題ないけど？ラズは私と一緒に嫌？」

「いや、別にかまわないが……」

「そう、なら問題はないよね」

どう問題ないのだろうか。この世界では世間的に問題があると思うのだが。

……まあ本人が問題無いと言ってるんだ、大丈夫だろう。

勘違いして欲しくないのだが、けして投げた訳ではない。……本当だぞ？

とそんな訳でアジアの意向で（無理矢理）一緒に乗ることが決まった。

アジアの行動の事でまだルイズがサイトを責めているが、ハッキリ言って時間が無駄だ。早く出発したい。しかし、アジアは何を考えているんだ？

何とか二人を宥め透かし、一行はトリステイン城下町に向かうのだった。

さて、所変わって今はトリステイン城下町。

原作やアニメでやってた通り、大通りとは名ばかりでかなり狭い。さらに言わせて貰えば、狭い上に汚い。本当に此が大通りかよ。

たしかブルドンネ街だったか？

人がごった返してる、5メートル程しかない名ばかりの大通りを歩く。………何故か先頭を。

おいおい、そう言うのは主人公の役目だろ？

そしてその主人公であるサイトは、何かのんびり周りを見ながら後ろを付いて来ている状態である。

おいこら主人公、仕事しろ！



そう思っていると後からルイズが指示を出してきた。

「あ、その路地裏よ」

言われた通り路地裏に入る。

さっきの大通りより汚いな。ゴミや汚物が道端に転がってるぞ。それに悪臭がひどい。

「きたねえ」

「だからあんまり来たくないのよ」

俺の後ろで喋る二人、てかさんな所を先頭で歩かせてんのか、このチミツ子め。

そう考えながら歩いていると、十字路にでた。

さて、ここからどう行くんだ？

振り返りルイズの方を向く。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど……」

キョロキョロ周りを見回すルイズ、すると直ぐに一枚の銅の看板を見つけ、嬉しそうに言った。

「あ、あった。あれよ」

剣の形をした看板が下がっている。

うむ、武器屋だな。

ルイズを先行にして石段を上がり、羽扉をあけ、俺達は店の中に入って行った。

店の中は昼間なのに薄暗くランプが灯っている。

壁や棚に、所狭しと剣や槍、それにナイフや斧が乱雑に並べられていた。他にも甲冑が数種類飾られてある。

原作通りの店だな。

すると店の親父が話し始めた。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

これまた原作通りの会話だな。なら自然とデルフが出てきてお買い上げになるだろう。

そう思った俺はルイズ達をそっちのけで周りの武器を見始めた。

最初に目に入ったのはナイト・ソード、言わずと知れたロングソードの事だ。 鏢の真っ直ぐなものや湾曲している物、様々な形があるが、どれも実践向きの良い剣だ。

次に目に入ったのはショートソード。まあショートと言っているぐらいだ、言わずもがなロングソードより短く70センチから80センチ程の長さの物だ。

そして目線を壁から中央の棚に向けると、こっちにはブロードソがあつた。

ワルーン・ソード、シンクレアー・サーベル、スキアヴォーアなど中々に種類がある。

てか凄いなこの店、何気に種類が豊富だ。質としては中の上位か、それでもましな方だ。

そして、さらに目線をずらすと今度はナイフが見える。

これはマン・ゴージュか。レイピア等の剣と対で持つナイフで、相手のレイピアを受け止め、相手の剣先を引っ搔ける凹凸で刀身を折るための独特な形状をしている短剣だ。

おお、こつちはキドニー・ダガーだ。鍔の形が腎臓キドニーの形をしている短剣だ。刀身は普通のナイフだが。

そしてロンデル・ダガーだ。柄頭と鍔が円盤形ロンデルをしている短剣だな。こちら刀身は普通のナイフだ

そしてこつちはステイレットか、刃のない突き専門の短剣だな。アイスピックを想像すれば判りやすいだろう。

ここはなんて店なんだ！武器の宝庫だよ！見てるだけで面白いぞ！！

そんな感じで若干暴走していると、突然ルイズが話を振ってきた。

「わたしは剣の事なんかわからないから……。そうだね、ラズ、貴方が選んでちょうだい」

え？何故に俺に選べと！？

何とこのチミツ子は俺に剣を選べと言ってきた。いやいや、ここは店の店主かサイト自身だろ？何故にここで俺に選ばせる。

「て、おい。何でラズ何だよ」

その疑問を直接チミツ子にぶつけてみようとしたら、先にサイトが言ってくれました。

「何故って、アンタが剣の事詳しくそうには見えないし、ラズは見た目も剣士だしこの間の事もあるでしょ？まあ私は聞いたただけなんだけど、それに武器の事には詳しくそうだし」

「……確かに」

あら、剥れながらも認めてしまったよサイト君。

いや、まあ長く生きてますからそこらの学者よりは知識はありますが。転生者だし。

でもさあ、そう言うのは自分で決めるべきじゃないのか？

「さあ、早く選んでちょうだい」

あ、いや、選んでちょうだいって……………。

「いや、こつ言うのは自分で選んだ方が良くないか？」

サイトの方を向いて言ったが、当のサイトの口から思わぬ言葉が出てきた。

「…………いや、ルイズの言う通りだ。俺は武器には詳しくないし、何選べばいいか判らないし。その点ラズなら剣とかには詳しくそうだしな。まあラズが選んだ奴なら大丈夫だと思うし」

そう言われてしまった。こうなっては引くに引けない。まあ、俺がデルフを選んで渡せばいいんだから大した問題ではない。

そして俺は数有る剣の中からデルフを探す事にした。

しかし、さつき暴走した時も説明したようにこの店は何気に武器が豊富だ。

さて何処に有るのやら。

一棚一棚確り見ていく。

すると、籠のような物に数本の剣が乱雑に入っていた。その中に錆の浮いた一本の剣があった。片刃の長剣、デルフリンガーだ。

俺はその剣を手に取り眺める。

そしてその剣に向かって話し掛ける。

「喋ってくれて構わないぞ、君はインテリジェンスソードだろ？」

「……おでれーた、お前いつから気が付いてた？何で判った？」  
ふむ、どうやら当たりらしい。よかった、外れたらかなり恥ずかしい事になってたよ。

「剣が喋ってる！」

まあ知らなければ驚くだろうな。

「手に持った時に気が付いたさ、ただの剣ではないとね」

「ほう、最初はただのひよろつちくって優しい兄ちゃんだとおもったが、なかなかに見る目があるじゃねえか」

この憎まれ口、正しくデルFRINGERで間違えないだろう。  
すると、デルフの言葉に反応して店主が咎める様に言う。

「やい！デル公！お客様に失礼な事いうんじゃねえ！」

「うるせいくそ親父！武器の本当の値打ちも判らないボンクラのくせに偉そうな口たたくんじゃねえ！」

何とも言えない返しかただ。この後の話や展開を知っている身としては何とも言えない言葉だ。  
すると店主がまた言い返す。

「なんだとテメエ！やいデル公！とにかくこれ以上失礼があったら、貴族に頼んでテメエを溶かしちまうからな！」

「おもしれ！やってみる！貴族に頼むような人脈も金も無いくせに上等だ！」

「このお……やってやらあ！！」

あゝ、これじゃ売り言葉に買い言葉だ。終わりの無い黴こつこだよ。

原作ならサイトがとめたんだろが今は俺が見つけた状態だ。俺が止めなきゃ止まらんだろうな。

「まあ待ってくれ、別に俺は気にしちゃいない。それと、まだ名前を聞いてなかったな、俺の名前はグラスベル君の名前は？」

「オレか？オレ様は伝説の魔剣デルフリンガー様だ、よく覚えておけよ」

なんとメルフらしい自己紹介だな。

「オレを見抜いた観察眼とその態度、よし、気に入った。お前オレを買いえ」

おっと、気に入られてしまった。しかし俺がデルフを持っていても仕方がない。なのでさっさとサイトに渡すことにした。

「はは、それは光栄だ。だがちょっと待ってくれ。俺より面白い奴が居るんだ」

「お前さんより面白い奴？」

「ああ、サイト君」

「え？俺？」

「なんだ？この貧弱そうな坊主が面白そうな奴なのか？」

「……………」

デルフの言葉にムツと来ているのか黙りこくってデルフを睨み付  
サイト。

てか、サイトなんて名前お前意外に居ないだろ。  
手招きする俺にサイトが近づく。  
そしてサイトにデルフを差し出す。

「さあ、持ってみてくれ」

「あ、ああ」

おずおずとデルフを持つサイト。さっきまで喋っていたデルフだ  
が、サイトに掴まれると黙り込む。そして、驚いた様な声で喋り出  
す。

「これまたおでれーた！見損なつてた。てめ、『使い手』か」

「『使い手』？」

「ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え」

そう言われたサイトに俺の方を見る。仕方ない、もう一押しする  
か。

「見た目はアレだが、物は間違いなく一級品だ。買う価値はあると  
思うが、あとは君しだいだよ」

俺の言葉を聞いてしばし考えるように黙り込みデルフを見つめるサイト。数秒後、顔を上げて言葉を発した。

「うん、買うよ。ルイズ、これにする」

「え〜〜。そんなのにするの？まあラズが言うんだから悪いものじゃないんでしょうけど……。もっと綺麗でしゃべらないのになさいよ」

とても嫌そうに言うルイズ、其を説得するようにサイトは言葉を返す。

「いいじゃんかよ。しゃべる剣なんて面白いし」

「それだけじゃないの……。あれ、おいくら？」

ブックさ文句を良いながらも店主に尋ねるルイズ。律義なのか何なのか。

それに店主は手をヒラヒラ降りながら言った。

「あれなら百で結構でさ」

「あら、安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

ルイズはサイトから預けている財布を受け取り、エキユー金貨を100エキユー分カウンターにぶちまけるように出した。おいおい、もっと丁寧に出せよ。

「毎度」



店主は慎重に枚数を確かめると、頷きそう言った。

「どうしても煩いと思ったら、こっやって鞘に入れればおとなしくなりませあ」

サイトは頷くとデルフを受け取り、さっそく背負う様な形でデルフを装備した。

よし、これでデルフ回収イベントは終了だ。無事に用を終えたので俺は店を出ようと思いきや出口に向かおうとしたが、それをアシアに止められた。

「ねえ、ラズ何か欲しい物は無いの？」

何故かいきなりそう聞いてきた。いや、そう言われても困るのだが……。

断ろうとアシアを見るのだが……、何だが期待するような目で見方を見ている。参ったな……、これと言って欲しいものは無いんだが……。そっだ、ならアレにしよう！このさい丁度いいだろう。

「そうか申し訳ないな、ならナイフでも良いだろうか？」

「うん！でも何でナイフなの？もっと他の剣とかでもいいよ？」

嬉しそうな元気な返事のあと、少し不安そうな顔で聞いてくるアシア。

「もう剣は持っているからな。それに、部屋などの狭い場所で何か有った時、長い剣より短いナイフの方が何かと扱いやすい。そう言った意味でナイフの方が良いんだが」

「へえ、そうなんだ」

納得してくれたのか、アジアはそれ以上は言わなかった。

さてナイフだが何を選ぼうか？

さっき見ていたナイフの棚をもう一度見る。ふむ、本当に何にしよう。

……………よし、これにしよう。

俺が選んだのはロンドルダガーだった。まあどれも対して変わらないが俺は此を選んだ。何故なら使いやすそうだったからだ。

アジアに頼みカウンターに持って行き支払いを済ませる。なんと80エキユーもしてしまった。

「アジア、すまない、ありがとう」

「えへへ、別にいいよ。サイト君も買ってもらったし。それに何時も部屋の掃除とかしてもらってるし。むしろ私があるがとう」

そう言ってアジアはニコツと微笑んだ。そんな彼女は、年相応のまだ幼さの残った見た目にあう、可愛いながらも綺麗な笑顔だった。

こうして、俺達の買い物は無事に終了し、学園へ足を向けるのだった。

あ、ちなみにサンドイッチは買い物した後で四人で美味しくいただきました。

END

第十話 虚無の曜日で野暮用（後書き）

こんにちは又は又は今晚は！グルタミンです！

まいどの如くですが第十話です。今回は少しのほほんなどとしていきます。まあようはぐだぐだなのですが。

でも頑張りました！私的に頑張りました！

てなかんじで、今回もありがとうございます！次回はこの話の別キャラ視点になると思います。

では次回もよろしく思います！

第十巻話 他人の目線だどどう映って居るのだろう？（前書き）

ごんちは、第十巻話です。それではよろしくお願いします。

## 第十巻話 他人の目線だとう映って居るのだらう？

### Sideアシア

最近の朝はラズに起こされます。そして、ラズは私を起こすとすぐに部屋を出ていきます。なぜ部屋を出ていくのかと言うと、それは私が頼んだからです。

だって、使い魔でも男の人だし、流石に着替えを見られるのは恥ずかしいです。なので、色んな意味でルイズは凄いなと思う、サイト君が居ても平気で着替えるんだもの。

私には恥ずかしくてできません。なので夜の寝る前の着替えの時には、ラズに部屋の外で着替え終わるまで待つてもらいます。

あ、それと洗濯物は使用人のメイドさんに頼んでいます。

ラズが洗ってくれると言っていたのですが………男の人に服とか、し、下着とか洗ってもらうのは………恥ずかしいです。

そんな感じで最近ではラズに起こしてもらおう朝なのですが、ある早く目が覚めた日の朝、ラズが居ませんでし。疑問に思ったのでお越しに来たとき何故いないのか聞いてみました。

何でもあさ早くから鍛錬をしているそうです。………凄いなと思います。そして同時に納得しました。

このあいだの決闘の時も、途中で止めただけですが、それでも判ります。

すれ違い様のラズは息が乱れるどころか、汗の一滴もかいていませんでした。

後で聞いた話ですが、ラズがあそこまでしたのには理由がありました。

それを聞いて私は、ああ彼は人の為に怒れる、優しくも強い人だと思いました。

そして、その心も力も。何より自分に厳しく、そして堅実だからこそ持てるのだと思います。

まあそんなこんなで、それが最近の私の朝です。

今はと言うと私は食事中です。朝起きてルイズとサイト君との三人で朝食中です。今朝の朝食は白ワインと照り焼きの様なソースの掛かったチキンと、ガーリック味のパンに野菜のスープ、そして魚のムニエルに果物です。

ハッキリ言っただけ量が多いです。一人では食べきれません。なのでいつも一品程残してしまいます。多い時は二品です。

ああ、これは最近の話ですが、サイト君が物足りなさそうな顔でこっちを見ていたので、残した料理をあげようとしたらルイズに怒られました。ルイズが言うには。

「ダメよアジア、使い魔を甘やかしたら癖になるわ」

だそうです。うん、厳しいのは悪いことじゃないけど、これはちょっと意地悪じゃないかと思いました。

だって、サイト君はいわゆる育ち盛りの訳だし、あの具の無いスープと堅いパンだけじゃヤツパリ足りないと思うのですが。

でも残ってしまうと、作ってくれた厨房の人に失礼な気がして……。

前に、食べきれないから量を減らして貰おうと頼みに言ったんだけど、身分が違いすぎて貴族と話せないって言われて話してもできませんでした。なので今度はラズと一緒に行ってもらおうと思います。あの事件以来、使用人の人達の間でラズは人気があるそうなので。でも、その話を聞いた時には、嬉しい気持ちの他に何かモヤモヤした物を感じました。あれはいったいなんなのでしょう？

そんな事を考えながらも、私は朝食を食べ終えました。

……食べ終わつたのですが、その、ヤツパリ量が多く最後まで食べられませんでした。うう、朝から鶏肉はちよつと無理です。お魚は好きなので大丈夫なのですが、お肉は……。一杯になつたお腹を擦りながら、チキンとにらめっこしていると不意に向かいの席から声を掛けられました。

「ねえ、ミス・ヘブランスト。そのチキンは食べないのかい？」

声をかけて来たのはミスタ・グランドプレでした。

ミスタ・グランドプレは、物欲しそうにチキンを見えています。

「えっと……よかつたらいりますか？」

「いいのかい!？」

「ええ、どうぞ」

「ありがたく貰うよ！」

そう言つとミスタ・グランドプレはチキンの乗つたお皿を素早く取ると、あつと言つ間にチキンを食べてしまいました。

最近朝食の時、よくミスタ・グランドプレと向かい合わせになります。

私は良くご飯を残してしまうので有る意味では助かってたりするのですが。

そして、無事に朝食を終えたので、ルイズの方を見ると、ルイズも丁度食べ終わつていて、ハンカチで口元を拭いていました。

そして、拭き終ると突然こんな事を言いました。

「ねえアジア、私今日町に行くんだけどアジアも一緒に行かない？」

「町？町ってトリスティン城下町？」

「そうよ」

へえ、町かあ、小さい頃お父様達と一緒に行ったきりだし、ちよつと行ってみたいかもです。

「ねえ、どお？」

目を輝かせながら言うルイズ。普段の勝ち気な彼女も可愛いけど、こつ言った時の彼女は普段と違った可愛さがあると思います。

「うん、いいね。私も行きたいな」

「本当！？やったあ！」

ふふ、こんなに楽しそうなルイズも久しぶりに見ます。  
何だか私も楽しくなってきました。

「そうと決まれば直ぐに準備ね！さあ、行きましょアジア。ほら、アンタも直ぐに行くわよ」

「……………へいへい」

何だかやる気の無い返事をするサイト君。ヤッパリご飯が足りてないからでしょうか？

そんなサイト君に鞭打つ様に、耳を引っ張って歩き出すルイズ。  
そ、それは痛いよルイズ？



食堂から出た所で私はある事に気が付きました。

そうです、私はラズに部屋の掃除をしてもらっていたので、ラズはまだこの事を知りません。

「どうしようルイズ、ラズ部屋の掃除をしているから、この事を知らないわ。勝手に決めてしまつて大丈夫かな？」

「ラズなら大丈夫よ、聞き分けは良いしどっかの駄目犬と違って機転は利くし。何より自分の立場と言うものが判つてるようだし。そう、どっかの駄目犬と違つてね」

そう言つてサイト君を睨むような呆れたような目でみるルイズ。え〜と、そこまで言わなくても。

「何だよ、何が言いたいんだ！」

「あら、まだ判つてないようねこの駄目犬は」

「ふん、言つてる！そう言つお前だつて、その駄目犬すら手なずけられない駄目主人だろうが」

「な、ななな、なんですつてえ。よ、よりにもよつて駄目主人、……アンタ、覚悟はできてるんでしょうねえ？」

そう言つと、何処から出したのか、いつの間にかルイズは馬用の鞭を持っていました。何処にそんな物を？

「な！？ちよ、ちよつとまで！それは洒落にならないって！？」

そう言つて、鞭を振るうルイズから逃げるサイト君。

あ、ちよつと待つてよ〜！

「待ちなさあーい！！！」

そう言いながらサイト君を追いかけて行くルイズ。

その二人を追いかけるのですが……、な、何であんなに速いの人とも？

うっ、運動は苦手だから辛いよ。二人とも、待つてよ〜。

暫く走りやつとの事で二人に追い付きました。

二人に追いついた私は息を切らしながらルイズに話しかけました。

「ル、ルイズ……ちよつと、速いよ……」

追いついた私が息を整え最初に見た光景は。腕を組んで地面に倒れているサイト君を睨むルイズと、地面に踞りピクピクと痙攣している様な状態で、俯せに倒れているサイト君でした。

「えつと……、大丈夫？」

「……もう……ダメ、ガク」

そう言って動かなくなるサイト君。ルイズはいい気味よと言って見ているだけでした。

「うっ、でもルイズ。今回はちよつと遣りすぎだよ？いくらなんでも馬用の鞭で叩くなんて」

「でもアシア、コイツは使い魔のくせに有ろう事が貴族でありご主

人様である私を馬鹿にしたのよ？これは許されざる事だわ、然るべき罰が必要なのよ？」

「ルイズ、それでもよ。確かにサイト君はルイズを揶揄したかもしれないけど、でも最初に悪く言ったのはルイズよ？」

「確かに、そうだけど。でもコイツは使い魔なのよ？使い魔が主人に逆らい、あまつさえ馬鹿にするなんて聞いたことも無いわ、使い魔はメイジの手であり足なのよ？それが逆らうなんて有ってはいけないわ」

むう、ルイズったら、私はそう言う考えが嫌いです。

使い魔だって生きているし感情だって有ります。ましてやサイト君は人間です、こんな扱いは人として許せません。

私は少し真剣な顔でルイズを見て言いました。

「……………ルイズ、その考えは野蛮だと思っわ」

「うっ、ど、どうしてよ？」

「サイト君は使い魔で有る前に人間だよ。確かに平民かもしれないけど、だからって酷い扱いをしていい訳じゃないわ。お父様に昔言われた事があるの。いくら貴族に権力や力があっても、それを正しく使えなければ貴族としても人間としても失格だって。いくら力を持っていても、人間として立派でなければ人は付いて来ないわ」

昔お父様に貴族とは何かと言う話を聞かせてもらいました。その話をきいて、私はお父様を誇りに思いました。

いつか私も、お父様の言う様な立派な貴族になりたいと思いまし

た。

なので、今ルイズがやっているような事は、貴族としても私個人としても許せません。

それに、私の親友と言えるルイズには、例え平民だとしても人の尊厳を、命を軽く扱うような人間になつて欲しくありません。

「……………」

「ルイズ、貴方が考える立派な貴族って何？」

真剣な顔で、ジッとルイズの眼を見る。一瞬考える様に視線を下に下ろしたルイズは、次には確かな物をその眼に宿して言いきりました。

「もちろん平民にも、貴族にも尊敬される様な、貴族の中の貴族よ」

「そう、なら尚更だね。人を人として見れない人が、他人から尊敬はされないもの。だから、ね」

そう言つて私はルイズの肩を掴み、俯せ状態から回復したサイト君の方に向かせました。

「いつつ……………。つて、何だよ？」

「えっと、その。さっきは悪かつたわね……………」

「え？あゝ、いや、まあ俺も馬鹿にしたしな」

「そ、そうよね。だからこの話しはこれでお仕舞いよ。まっく、貴族に謝られたんだから光栄に思いなさい」

「……なんだよ、謝った途端に此かよ」

「何か言ったかしら？」

「い、いや、別に何にも」

ふふ、うん。これで仲直りね。まだちょっとルイズが素直じゃないけど、でも大きな一歩ね。

照れ隠しに強がるルイズは少し可愛いと思います。

二人の中直りが終わって、とても良い雰囲気の中。すぐ横から人が階段を降りてくる音がしました。

私達は直ぐに気が付きその方向を見ると、丁度呼びに行こうとしていたラズの姿がありました。

必死で二人を追いかけていたのですが、ちゃんと女子塔に向かっていたようです。

私は何となく嬉しくなって、スキップするように移動してラズの前に行きました。

「ラズ丁度よかったわ。今呼びに行こうと思ってたの」

私がそう言うのとラズは、要は何だと言いたそうな顔をしていました。

私はさっきルイズと話していた事をラズに聞いて見ようと思ったのですが、良く良く考えてみると町に行く事は判っていますが、何のために行くのかはまだ聞いてませんでした。

なので私は頭にクエスチョンマークを浮かべながらルイズの方を見ました。すると私の視線に気が付いたルイズは、空かさず答えてくれ、ラズに説明してくれました。

「サイトの剣を買いに町までアジアも一緒に行くのよ。アンタも来るのよ、ご主人様が来るんだからアンタも行くのは当然でしょ」

とてもルイズらしい説明の仕方でした。

するとラズは、腕を組んで真剣な顔をして何かを考え始めました。静かな沈黙が続きます。

うう、ヤッパリ勝手に決めた事を怒っているのでしょうか？

私の胸に不安がのし掛かります。

すると、意を決したようにルイズがラズに聞きました。

「何よ、一緒に行くのが嫌だって言うの」

うん、ルイズに頼ってばかりじゃダメだよ。

「駄目……かな？」

少し弱々しくなりましたがちゃんと聞けました。

でも不安による緊張で胸がバクバク言っています。

私とルイズの言葉にハツと意識を此方に向けたラズは、今度はさっきの真剣な顔とは違つ、とても優しい笑顔で言いました。

「大丈夫だアジア、問題ない」

「本当に？……よかった」

はうう、安心しました。

「まったく、なら早く言いなさいよ」

ふふ、ルイズも安心したのか軽いため息を付いて安堵の表情をし

ています。

「それじゃあ馬を借りに馬小屋までいきましよう」

ルイズの言葉で私達は馬小屋に向かおうとしましたが、それをラズが止めました。

「済まないが剣を部屋から取ってきたい、先に馬小屋まで行っていてくれないか」

そう言えばそうでした。あの事件以来、周りの子達や他の学年の人達もラズを怖がるので、少しでも恐怖心を与えない様に、普段は剣を外してもらっていたんです。

でも少し悲しいです。皆は怖がりませんが別にラズは怖くはありません。本当は人の為に動けるとても優しい人なのに、それを知らないなんて凄く残念で勿体なく思います。

「むう、早く来なさいよ」

「うん、じゃあ先に馬小屋にいるね」

「じゃあまた後でな」

私達がそう言って馬小屋に向かうのを、ああと一言言ってラズは部屋に剣を取りに行きました。

馬小屋に向かい進む私達ですが、私は途中である事に気が付きませんでした。そう言えば私お財布を持って来ていません。

「ごめんルイズ、私財布を持ってきていなかったわ。戻って取って

来るから先に馬小屋に行つてて」

「あつ！ちよつと、アシア!？」

ルイズの制止も聞かず、私は直ぐに元来た道を戻りました。  
女子塔の階段まで行き、階段を急いで登る。

自分の部屋の階まで来て息があがり、歩いて息を整えつつも部屋の  
前まで行き、部屋に入りました。

部屋の中にラズの姿は無く、剣もありませんでした。何かちよつ  
と残念な気がします。

部屋に入り、もの入れの箱から自分の財布を出し。中を確認して、  
二人の後を直ぐに追いかけました。

小走りで急いで馬小屋に向かいました。

馬小屋に付くと、まだラズは来ていないのかそこに馬小屋管理の  
使用人の人と、ルイズとサイト君の三人がいました。  
でも少し様子が変わります。

「ルイズ、どうしたの？」

「アシア！もう大変なのよ！馬を借りようとしたんだけど、馬が足  
りないのよ、もう！よりにもよってこんな時に……。もう！ど  
う言う事！馬が足りないなんて！」

半分癡癪を起こしたように言うルイズ。

「そうおっしやられても……。今は馬は三頭しかないので」

使用人の人も困った様に言っています。



「どうにかありませんか？」

「そう言われましてもこればかりは……………」

私も聞いて見ましたが、ヤッパリダメそうです。  
うーん、困りました。

「もう、良知があかないわ！」

ルイズの叫びも虚しく響くだけで、問題が改善される訳ではありません。

その時横から聞きなれた、そして良く通る声が聞こえました。

「大きな声を出して何を騒いでいるんだ？」

「あ、ラズ、実は……………。馬の数が足りないの、それで困ってて」

私は今の状況を説明しました。

でもラズは驚きもせず、一つの案を出しました。

「そうか、ならばこう言うのはどうだろう。三頭馬を借りて一頭を二人で使えばいい、ようは誰か二人と一緒に馬に乗ると言うことだ」

成る程です、確かにそれならば三頭でも十分に間に合います。  
でも気になる事があります、それは

「あのねえ、二人で馬に乗るのはいいけど道は行きだけじゃないのよ？帰りだって馬は使っただから。それに、誰と誰と一緒に乗るのよ」

そう、今ルイズが言った通りです。

誰と一緒に乗るかです！因みに私はあまり乗馬は得意ではありません。そう言うのはルイズの方が上手です。

あ、でもサイト君は馬に乗れるのでしょうか？それも気になりますし、ラズはどうなのでしょう。

私がそう考えていると、またラズが提案をしました。

「馬は大丈夫だ、あれなら四時間の往復も耐えられる。誰と一緒に乗るのだが、俺とサイトが乗ればいい、アジアとルイズは一人で乗ってくれ」

何故でしょう、何だかとても納得できません。

こう言った場合は確かに男の人と乗るのはあまり良くないかも知れません。でも何故でしょう、とても負けた気がします。誰に？…

……… サイト君に？

女としてもとても複雑な気分です。

そんな事を考えながら、心の中の黒い物に思考を染めていました。でもサイト君の次の言葉を聞き、チャンスだ！と思いました。

「そう、それなら　「ちょっと待った！！」な、いきなり何よ！？」

「いくらなんでも男とニケツは嫌だ！」

ラズと一緒に乗るのを嫌だといったサイト君。ふふふ、それなら私に良い案があるんだから！

ラズに尋ねられ、サイト君が『ニケツ』の意味を説明し、ルイズはその意味を理解して怒り始めました。

「あんだねえ、誰の為に町まで行くと思ってるのよ！こんなときに我が儘言ってるんじゃないの！！」

それからまた二人の喧嘩が始まった。それを見かねてラズが止めようとしていますが、それを私が止めます。

ダメです、今回は私の役目なのです。それに、ラズに聞きたい事が有りますし。

「ねえ、ラズは馬には乗れる？」

「ああ、乗れるが」

うん、それなら大丈夫ですね。

聞きたい事を聞き終え、私の案を実行するのに問題がない事が判りました。

ふふふ、ちょっとした意地悪発動です！

「ねえ、ラズと乗るのが嫌なのよね？」

「え、ああ、まあそうだけど……」

「そう、なら大丈夫よ。私とラズと一緒に乗るわ」

私がそう言うと、三人は驚いた顔をしました。

特にラズの驚いた顔は、普段の凜とした顔と違って、少し間抜けでいて可愛いんです。

すると、驚いた顔を怒った顔に変えてルイズが言いました。

「な、何言ってるのアシア！？ダメよそんなの、使い魔って言った

って平民なのよ？平民と一緒に馬に乗るなんて！」

ルイズが凄いい剣幕で怒って来ます。えっと、そんなに駄目なのかな？

「うーん、別に私は問題ないけど？ラズは私と一緒に嫌？」

「いや、別にかまわないが……」

「そう、なら問題はないよね」

「な！？そう言う問題じゃないわよ！ラズがよくてもダメなのよ、使い魔でも平民なのよ？平民と同じ馬に乗るなんて、他の貴族に知られたら馬鹿にされるし軽く見られるわ。だから主人と従者の関係は確りと持たないとダメよ！アジアだって判るでしょ？」

……そっか、ルイズは私の事を思ってたのね。うん、ヤツパリ優しいなルイズは。少し反省です。

「私の為にありがとうルイズ」

「な！？べ、べべ、別に、アジアのためとかじゃなくて、私は貴族として注意しただけよ」

顔を真っ赤にして否定するルイズ。でも照れ隠しなのはバレバレです。

「ふふ、ルイズは優しいね。」

「だっ、だから違うわよ！」

「でも大丈夫よ、別に誰かに会いに行く訳じゃないもの。少しの間だし。さあ、早く行きましょう」

「あ！？ちよっと、アジア！」

そう言っつて私は、ルイズの呼び止めも聞かず、ラズの手を引つ張つて馬の所へ行きました。

馬を馬小屋から出してもらい、馬に乗ります。すると、ラズが私にバスケットを渡して来ました。大きなバスケットで、中は一杯なようです。

バスケットを渡したラズが私の後ろに乗ります。

その状態が、私の後から馬に繋がった手綱を握っていて、私が包まれるような状態でした。

……今更なのですが、この状態が凄く恥ずかしいのに気が付きました。

お、男の人とこう言っつふうに出かけるのは始めてです。

お父様と出かけた事はありますが、お父様は家族なので、家族以外は……その、ちよっと緊張します。

そして、いざ出発になった時に、ラズがこんな事を言いました。

「アジア、すまないが出来れば俺に寄りかかってくれないだろうか？結構揺れるから、寄っ掛からないと危ない」

よ、寄りかかるのですか！？

あ、あう。い、一緒に乗るのも恥ずかしいのに、よ、寄りかかるなんて……。い、いいえ、これは安全のためです。そう、安全のためなんです！だから変な意味はありません、断じて！

「う、うん」

うっ、凄く恥ずかしいです。顔が真っ赤になって行くのが自分でもハッキリと判ります。

私が寄りかかると、ラズはユックリと馬を走らせ始めました。何だか一緒に乗っている私を気遣ってくれてる様です。これから三時間ですか。先がとても長いです。

Side END

オマケ

～食堂での風上さん～

その日も少年はある少女の向の席に腰掛けていた。

最近知ったのだが、よく朝食を残す少女はゼロのルイズの親友らしい。

この間の喧嘩の時の事を思い出し、少し心が暗くなる。

この事でその少女に嫌われていないだろうか？

別に最初はただの同学年の少女としか思っていたなかつた。

最初に聞いたのは二週間程前だつた。残した料理をもらおうと話しかけ、最初の言葉に心が動いて高鳴つた。

「ミスタ・グラントプレは食べ物大切にするんですね。食べきれなかったので凄く助かります」

普通、人の食べ残した物を貰うなど、平民がする事だと馬鹿にされ、それが女性なら相手にされないか、避けられてもおかしくない。しかしその少女は違った。

自分の行動を馬鹿にするどころか、大切にしていると誉めた上に笑顔で助かるとお礼まで言われたのだ。

衝撃だった、今まで女の子にそんな事を言われた事がなかった。その日からほぼ毎日向に座り続けた。

そうして何時も食堂で会う日々を過ごして行くなかで、少しずつ積み重なっていく思いに気が付いたのはつい三日程前だった。

そして今日は週に一度の虚無の日。  
今日は朝から心臓が高速で鳴っていた。積りに積もったこの想いを行動に変えることを昨日決め、今日の虚無の日にデートに誘おうと心に誓った。

そして、食堂に行き何時ものようにその少女の向に座る。

心臓はバクバク言っていて、料理の味などさっきから全く感じない。

何時ものように黙々と食べるが、心臓はその時の近づくにつれ鼓動はその早さを増す。

虚無の曜日と言うことで朝の食堂は、この後の予定の話し合いの声でかなり煩いはずなのだが、自分の心臓の音で全く聞こえなかった。

瞬く間に自分の朝食を食べ終えて、少女の方を見ると、少女は食べきれなかったチキンをジッと睨み付けていた。

そんな顔も可愛く見えて、数秒見とれてから我に帰り。何時もの様に話しかけた。

「ねえ、ミス・ヘブランスト。そのチキンは食べないのかい？」

「えっと………よかつたらいりますか？」

「いいのかい!？」

「ええ、どうぞ」

「ありがたく貰うよ!」

何時もの感じのやり取りをし、貰ったチキンを食べ始める。

朝食のこのやり取りを出来る事が最近は自分の癒しになっていた。200gは有ろうチキンを、瞬く間に食べ終えて、ふとその少女の方を向くと丁度此方を見ていたのか、少女と目が会った。

ニコツと優しくも愛嬌のある微笑みに、咄嗟に目を反らす。

高速で鳴る心臓が更に速度を上げる。

このままではいけないと、意を決して今日のデートに誘うべく前を向いて言葉を発した。

「ミ、ミス・ヘブランスト!よかつたら今日僕と」

しかしソコに少女は居なく、有るのは誰も座っていないイスと、彼の突然の行動に驚き、彼を見ている生徒だけだった。

沈黙して固まったように動かなくなる少年。

そしてその日彼は、食事とトイレ意外で部屋を出ることはなかった。



E  
N  
D

第十巻話 他人の目線だとう映って居るのだろうか？（後書き）

こんにちは又は今晚は！グルタミンです。

第十巻話ですが、結局話しは進みませんでした。  
難しいですね、話を進めるのは。

なので、少し皆様に意見を聞きたい、と思います。  
次の話ですが。

？ラズとアジア以外のキャラの視点ですぐに土くれのフーケの話し  
に入る。

？まだフーケの話しに入らないでラズとアジア以外のキャラの視点  
を書く。

すいませんが、感想を書いて頂きたい、二つの番号のどちらかを  
感想の最後に入れて下さい！よろしく思います！！

と言うわけで、今回もたいした話ではなく、サッパリ話が進んで  
いませんが、これからもこの作品をよろしく願います。

では、また次の話で。

**第十式話 それぞれ気になるらしい（前書き）**

ご指摘のあったマヨネーズを変更しました。

男爵さん、ありがとうございます！

2011/5/25……マヨネーズを加筆修正

## 第十式話 それぞれ気になるらしい

虚無の曜日はいつとも一日本を読んでいる。週の中でこの日だけが私の楽しめる日。

今も部屋で一人本を読んでいる。

今読んでいるのは一人の男とその仲間が、ドラゴンからお姫様を助ける話。

自分より年上の仲間と出会い、人間として成長していく主人公。お姫様を助けに行く道のりで様々な人に出会う。その人達との出会いの中で成長していく主人公。その主人公を見て周りの人達も変わって行く。

今も本の世界に没頭していた。

(ドラゴンのブレスが!? 危ない、避けて!!)

まさに今、物語の佳境に入った時だった。

突然部屋のドアが叩かれ、話の中から引き戻される。

私は、自分の世界に対する無粋な闖入者に少しの怒りを覚え、その鬱陶しい無粋な闖入者を無視する事にした。

しかしその無粋な闖入者はさらに強くドアを叩き始めた。

ハッキリ言って面倒くさいので、無視する事にした。

机に立てかけてある、自分の身長より大きな杖を振り、小さくルーンを唱える。

すると『サイレント』の魔法が発動し、風の流れが私と外の世界を隔絶する。そうして、邪魔者が居なくなりまた本の世界に入る。

すると、勢いよくドアが開かれ、闖入者が入ってきた。それでも私は本から目を離さなかった。

入って来たのは、私の同級生であり親友でもあるキュルケだった。彼女は二言、三言、大げさに何かを喚いたが『サイレント』の呪文

が効果を發揮しているため、彼女の声は私に届かない。

すると突然持っていた本が取り上げられる。

すると彼女は私の肩を掴んで彼女の方に振り向かせる。

しばし私は彼女を見つめた。

これが彼女ではなく他の誰かであれば、『ウィンド・ブレイク』で吹き飛ばしている所だ。……嫌いな奴なら『エアカッター』で髪でも服でも切り刻むかもしれない。

だが彼女は数少ない例外だ。仕方がないので私は『サイレント』の魔法を解いた。

すると、いきなり堰を切ったように話し始める。

「タバサ、今から出かけるわよ！早く支度してちょうだい！」

捲し立てるように言う彼女に言う。

「虚無の曜日」

そう言っただけは彼女から本を取り替えそうと手を伸ばした。でも彼女は、本を私の届かない位置に高く掲げる。

そのせいで必死に手を伸ばすが私は本が取れない。

すると彼女は演技のかかった喋り方で言ってきた。少しムカツときた。

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だが、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも、今はね、そんなこと言ってもらえないのよ！恋！」

それでわかるでしょ？と言わんばかりの彼女。

だがハッキリ言っただけ私には関係ない。それにこれでは状況を説明した事にならない。

なので私は首を横に振った。彼女は感情で動くが、私は理屈で動く。そんな彼女と私は何故か仲がいい、何故だろうか？  
すると彼女は、自分の説明を始めた。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね？その人が今日、あのにつきヴァリエールと、変わり者のヘブランストと出かけたの！あたしはそれを追って、四人が何処に行くのか突き止めなくちゃいけないの！わかった？」

彼女の言葉の中に気になるモノがあった。なので聞き返してみる事に。

「……四人？」

「そう、四人よ。ヴァリエールとヘブランストの主従、二組よ！出かけたのよ、馬に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

泣きつく様に頼むキュルケ。私の使い魔じゃないと追いつかないなるほど。ならば仕方がない、友人の頼みだ。それに、彼も行ったらしい。

あの事件以来、何か気になる存在の彼が。  
なので私は了承の意を示し頷いた。

「ありがとう！じゃ、追いつかけてくれるのね！」

友人が自分にしか解決できない頼みを持ち込んだ。ならば仕方がない。それに彼もいると言う、ならば受けるまでである。

私は窓をあけ、口笛を吹いた。

甲高い口笛の音が、遠くに響きながら青空に吸い込まれる。

そして、窓枠によじ登り、私は外に向かって飛び降りた。  
私に続くようにキュルケも窓から飛び降りる。  
落下する私達を、青い影が受け止める。その青い影は、バサバサ  
と力強く両の翼をはためかせ、私達を乗せ空へと飛び上がる。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

シルフィードとは、今私達が乗っているドラゴンの事で、私の使  
い魔の名前だ。

キュルケが突き出た背鰭につかまり感嘆の声をあげた。

シルフィードは、寮塔に当たって上空に抜けていく上昇気流を器  
用に捕らえ、一瞬で二百メートルも空を駆けのぼった。そして私は  
キュルケに尋ねた。

「どっち？」

すると彼女は、あ、と声にならない声をあげて言った。

「わからない……。慌ててたから」

「馬四頭、食べちゃだめ」

シルフィードは短く鳴いて了解の意を伝える。

そして青い鱗を太陽の光を反射させて輝かせ、力強く翼を振り始  
めた。

高空に上がり、その視力で持って馬を見つけるらしい。

まあシルフィードは風竜でありドラゴンだ、草原を走る馬を見つ  
けることなど、この風竜にとっては容易いことだろう。

自分の忠実な使い魔が仕事を始めたのを確認し、私はキュルケの  
手から本を奪い取り、シルフィードの背鰭を背もたれにしてまた本

を読み始めた。

暫く本を読んでいると、シルフィードから報告がくる。

「キュイ、キュルルルル……キュルル、キュイ（お姉さま、見つかったのね、でも……三頭しかないのね）」

シルフィードからの報告は予想していた物と少し違った。

四頭ではなく三頭、四人で出かけるのなら四頭のはずだが……。シルフィードが間違える事は無いだろう、嘘を付いているとも思えない。

だとしたら誰かが二人で乗っている事になるが……。私はいったい何を考えているのだろうか。別に誰が誰と乗っていようと、どうでもいいことだ。そう思い考えるのを辞めた。

再び私は視線を本に戻す。

暫く飛んでから、シルフィードからまた報告が来た。

「キュイ、キュルル、キュキュイ（お姉さま、見えたのね、追いついたのね!）」

その鳴き声を聞き私は前を見た。少しずつ高度を下げていき、三頭の馬が走っている高度まで下がる。

辛うじて馬が三頭走っているのが判る程度。

この高さからだとな誰が乗っているのかは判らない。

使い魔はこう言った時に便利だ。使い魔とは感覚などを共有できる。なので、私はシルフィードの視覚と同調させた。

一人で乗っていたのはミス・ヴァリエールとその使い魔だった。一緒に乗ってる馬をシルフィードに見るように命令する。

そして見えたのは、ミス・ヘブランストとその使い魔だった。貴族と平民と一緒に馬に乗っているのはかなり珍しい。と言うよりもあり得ない。普通プライドの高い貴族は平民に同じ物を使わせる



事などあり得ない。

そんなのは、あの変わり者のヘミス・ブランストぐらいだろう。しかし何故だろうか、理由は判らないが少しムカムカしている私がいる。本当に判らない。」

そんな何故だか苛ついていている自分に疑問を感じながらも、私は再び本に意識を移す。

更に一時間程飛んで町に着いた。

キュルケと一緒に四人の後を追う。ブルドンネ街を歩き、暫く行くと脇道に外れて行く。

はぐれないように 付いて行き、一つの武器屋に入って行く。

私達は暫く外で隠れるように出てくるのを待っていた。

いったい彼女達は何しにきたのだろうか。

貴族である彼女達には武器はいらない。だとしたらやはりその使い魔である彼等だろうか。しかし、ミス・ヘブランストの使い魔は既に剣を持っている。

と言うことはミス・ヴァリエールの方だろう。ミス・ヘブランストの使い魔の彼には、武器は足りているだろうからきつとそうだ。

そんな事を考えながら彼女達を待っていると、店の中から見覚えのある四人組が出てきた。男女二組のうち、背の低い男は背中に剣を背負っている。先程までは見かけなかった物だ。

出てきた彼女達を見ながらキュルケは唇をギリギリと噛み締めている。

「ゼロのルイズったら……、剣なんか買って気を引こうとしちゃって……。あたしが狙ってるってわかったら、早速プレゼント攻撃？ なんなのよ~~~~ッ！」

そんな事を言いながら悔しがるキュルケ。ミス・ヴァリエールにそんな意図は全くないと思うが……。今の彼女に言っても聞き入れないだろう。

そして彼女達が見えなくなると、キュルケは直ぐに彼女達が出てきた店に入って行った。ここに居ても仕方がないので、私も付いて行く。

キュルケに続いて武器屋の戸をくぐる。店の主人は私達を見つけて目を丸くした。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ！」

そんな驚いている主人はお構い無しにキュルケが聞き返す。

「ねえ、ご主人」

そう言いながら髪をかきあげ、ワザとらしく笑いかけるキュルケ。そんな彼女を見て顔を赤らめる店の主人。

……ある意味私には出来ない技だが、まずやろうと思わない。しかし何故だろうか、何だか釈然としない。

そしてキュルケは続けて言う。

「今の貴族が、何を買っていたかご存知？」

「へ、へえ。剣でさ」

鼻の下を伸ばしながら言う店主。……何だかイラツとする。なんだかどうでもよくなった、なので私は本の続きを読むことにした。

「なるほど、やっぱり剣ね……。どんな剣を買っていったの？」

「へえ、ボロボロの大検を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「へえ、何故かは知りませんが一緒に来ていたもう一人の男が選んだようで」

本を読んでいた私の意識を現実に向けるのに、その言葉は十分な効果があった。

「もう一人の男？」

「へ、へえ、もう一人の背の高い深い青の髪の優男の方ですわ」

聞き直してやはり疑問に思った。何故彼がミス・ヴァリエールの使い魔の剣を選んだのだろうか。

「何故？」

「へ？いや、私も知りませ」

「……そう」

「急にどうしたのタバサ？」

「…別に」

「あら、そう…？」

短く答えてまた本に視線を向ける。

しかしそんな態度とは裏腹に心の中ではその事を考えていた。

何故彼がミス・ヴァリエールの使い魔の剣を選んだのか。

確かに彼ほどの者なら剣に詳しいかもしれないが、貴族が、あのプライドの高いミス・ヴァリエールが親友とは言え他の貴族の使い魔、と言うより平民に選ばせるなんて……。

そこまで彼とその主人は信用が有るのだろうか？

いや、ミス・ヘブランストならばまだ判るが、いくらなんでもつい最近会ったばかりの彼がそこまで信用が有るとは思えない。しかし現に選ばせている。

だがこの事に関しては、考えても答えは出そうにない。

それよりも気になるのは、さっき店の主人が言っていたボロボロの剣を選んだと言う部分だ。

普通誰かに対して選ぶ剣なのに、ボロボロな物を選ぶだろうか。

彼の事だ、何か理由が有るのだろうか、その理由が全く想像付かない。

彼は謎が多い。そしてその行動は良くも悪くも予測出来なさそうだ。

「若奥様も剣をお買い求めで？」

思考の海に落ちていた私を、店の主人の言葉が現実引つ張り上げる。

「ええ、みつくるってくださいな」

キュルケがそう言うと、もみ手をしながら主人は、店の奥に消えて行った。

そして直ぐに何かを持って戻ってきた。

店の主人が持って来たのは、綺麗に裝飾され宝石などが付いている長剣。

綺麗だが実際に使うには何だか使いにくそうな剣だった。

……これはどうなのだろうか、剣は使わないが色々戦い慣れているから判る。この剣は使えないだろう。

しかし、そんな感想を抱いた私と違い、キュルケは気に入ったようだ。

「あら。綺麗じゃない」

「若奥さま、さすがお目が高くいらっしやる。この剣を鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でき。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう?」

店の主人のその言葉に頷くキュルケ。

「おいくら?」

「へえ、エキュー金貨で三千。新金貨で四千五百」

……アホなのだろうか、いくら何でも高すぎだ。実際の値段がどれくらいかは判らないが、いくらなんでもあり得ない。その値段では庭付き一戸建てどころか小さな城が買える値段だ。それに、剣の柄に彫つてある名前なんて後でも彫れる。そんな物は証明にならない。

「ちょっと高くない?」

どうやらキュルケもそう思ったらしい。しかし店の主人は譲る気は無いのだろう、どっしりと構えこう言った。

「へえ、名剣は、釣り合う黄金を要求するもんでさ」

それにしても高すぎると思う。

するとキュルケは少し考えこんだかと思うと、徐に店の主人の顔に自分の体を近づけた。

そして店の主人の顎の下を手で撫でながらキュルケは言う。

「ご主人……、ちょっとお値段が張りすぎじゃございませんこと？」

「へ、へえ……。名剣は……」

店の主人が先程と同じ事を言おうとするが声が若干上擦っている。そして店の主人が言い終わる前に、キュルケはカウンターに腰掛けて、右の足を持ち上げる。

「お値段、張りすぎじゃ、ございませんこと？」

そう言ってユツクリと投げ出した足をカウンターの上に持ち上げていく。

その動作に合わせるように、店の主人の目は、キュルケの太腿に釘付けになっている。

そこからがひどかった。

「さ、さようで？では、新金貨で四千……」

キュルケの足がさらに持ち上がり、太腿の奥が見えそうになる。

「いえ！三千で結構でさ！」

鼻の下を伸ばし、欲に負けて値段を下げる店の主人。

「暑いわね……」

キュルケは答えずにシャツのボタンを外し始めた。

「シャツ、脱いでしまおうかしら……。よろしくて？ご主人」

そう言いながら店の主人に熱っぽい目線を送るキュルケ。

「おお、お値段を間違えておりました！二千で！へえ！」

哀れにもまた値段を下げる店の主人。これだから男は……。よし、次から値段を下げる度に呼び方を変える事にしよう。

キュルケはシャツのボタンを一つ外した。

そして店の主人の顔を見上げる。

「千八百で！へえ！」

伸びつばなしの鼻をさらに伸ばし値段を下げる男。……哀れすぎるが、何だかムカつく。

キュルケの谷間があらわになる。そして男の顔を見上げる。

「千六百で！へえ！」

キュルケはボタンを外す指を止めると、今度はスカートの裾を持ち上げ途中で止める。

男（馬鹿）の哀れな顔がさらに哀れな表情になる。……もはや救いようがない。

「千よ」

キュルケはそう言って再び、スルスルとスカートの裾を持ち上げ始める。

そいつ（塵）は息を荒くしてそれを見つめている。

キュルケの指がピタツと止まると、そいつ（塵）は悲しそうな声をあげた。なんだか感にさわる。

「あ、ああ……」

「千」

「へえ！千で結構でさ！」

とうとうその愚者（塵）が落ちた。

キュルケはカウンターからすつと降りると、さつさと小切手を書き、それをカウンターの上に叩きつける。

「買ったわ」

そう言って剣をつかむと、さつさと店を出て行く。それに私も続き店を出る。

哀れな愚者（塵）の後悔の叫びが後から聞こえたが、そんな事は知った事ではない。

と言うより自業自得だ、存分に後悔してほしい。

店をでて元来た道を歩く。狭い道からブルドンネ街の大通りに出る。

隣を見ると上機嫌で歩くキュルケがいる。

散々に値切った剣を見ながらキュルケが言った。



「うふふ、これならダーリンも喜ぶわよ。みてなさいゼロのルイズ、あなたの買った剣なんて目じゃないわ。これでダーリンの心は私のモノよ！」

そう言いながら歩く彼女。

だがそうだろうか？私にはそうとは思えない。べつにミス・ヴァリエールの使い魔はどうでもいい。気になるのはミス・ヘブランストの使い魔である彼が選んだ剣だ。

ただのポロボロの剣だとは思えない。

でも今の私にはそれが何なのか知る術は無い。

考えても仕方がない。

横で一人喋っているキュルケをそのままに、街の入口まで歩いて行く。

街の外に出ると、見計らった様にシルフィードが降りてくる。

そしてシルフィードは私達を乗せ、学園に向かって飛びはじめ。瞬く間に空高くまで飛び上がるシルフィード。高速で風を切りながら飛ぶ。

頬を撫でる風が冷たくて気持ちがいい。

考えすぎた頭を冷やしてくれる。

そして私はまた、本の世界に入って行く。

S i d e   E N D

くその時の怪盗さんく

学院長の秘書であるミス・ロングビルは書き物をしていた。

今書いているのは生徒から出された重要文献の閲覧希望届だ。

貸出し禁止の本や教師以外の閲覧厳禁の書物は、必ずこの閲覧希望届けを出さなければいけない。

本来ならば、学院長がやらなければいけないのだが、その学園長はただいま爆睡中である。

つくづく仕事をしない御老体だ。書類を片付けながらついこの間あつた事を考えていた。

あの男と対峙した数秒間、まるで生きたこちがしなかった。今でもあの眼を思い出しただけで、掌にジツトリと汗が浮かぶ。

学園長室の一階下にある、珍しい物が沢山保管されている宝物庫がある。

その宝物庫の、巨大な鉄の扉を見上げる。

扉にはかなり太い門がかかっている。そして門には、これまた巨大で頑丈な錠前が付いている。

さすがは魔法学園成立以来の宝物庫、守りもかなりの物だ。

ミス・ロングビルは、慎重に辺りを見回すと、服のポケットから鉛筆程の長さの杖を取り出した。

その杖を手首を使って軽く振ると、スルスルと伸び、杖はオーケストラなどで使う指揮棒程度の長さになった。

そして低く呪文を唱え、完成した魔法を錠前に向けてかける。

しかし、錠前は何の変化も見せない。

「まあ、ここの錠前に『アン・ロック』が通用するとは思えないけ

どね」

クスツと不適に笑うと、ミス・ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

朗々と呪文を唱え魔法を完成させる。

その完成した魔法、『錬金』を分厚い鉄のドアに向かってかける。魔法は扉に届いたのだが、結局何の変化も見せなかった。

「スクウェアクラスのメイジが、『固定化』の呪文をかけているみたいね」

そう呟くミス・ロングビル。『固定化』の魔法は、物質の酸化や腐敗を防ぐ魔法である。これにかけて物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。

『固定化』をかけられた物質には、物質に化学反応を促し瞬時に性質を変化させる『錬金』の魔法も効かなくなる。

魔法をかけたメイジが、『固定化』をかけたメイジの実力を上回らない限り、その法則を破る事は出来ない。ようは力業なのだが。

しかしこの鉄の扉に『固定化』の魔法をかけたメイジは相当の使い手であろう。

『土』系統は物質を変化させる魔法が得意だ。その『土』系統のエキスパートであるミス・ロングビルの『錬金』を受け付けられない程の実力だ、かなりの物だ。

かけた眼鏡を持ち上げ、さてどうしたものかと扉を見つめながら考えていると、ふいに階段を上がる足音と此方に近づいてくる気配がした。直ぐに杖を折りたたみポケットにしまう。

そして現れたのは、ミスタ・コツパゲならぬミスタ・コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここで何を？」

ミスタ・コルベールの間野抜けた声に、愛想のいい笑顔で返す。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……………」

「はあ。それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで一日がかりですよ。何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょうね」

そんな判りきつた事に相槌を打つ。

しかしミスタ・コルベールは、扉の前で立ち往生していたミス・ロングビルを疑問に思い状況を聞いた。

「なぜこんな所で立ち往生を？オールド・オスマンに鍵を借りればいいではないですか」

それに対しミス・ロングビルは苦笑いを浮かべながら返す。中々の演技派だ。

「それが…………、ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……………」

「なるほど。ご就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしよう」

そう言ってミスタ・コルベールは歩き出したのだが、直ぐに立ち止まり振り向いた。

「その、ミス・ロングビル」

「なんででしょう?」

何か照れくさそうに言うミス・コルベール。

「もし、よろしかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですか?」

ミス・ロングビルは少し考えたあと、にっこり微笑んで、申し出を受ける。

「ええ、喜んで」

そう言ってミス・コルベールの横に並んで歩き始める。

了承を得たミス・コルベールはかなり嬉しそうだ。

すると、ミス・ロングビルが少し砕けた言葉遣いで話しかけてきた。

「ねえ、ミス・コルベール」

「は、はい?なんででしょう」

自分の誘いがあっさり受け入れられたことに気をよくしたミス・コルベールは、跳ねるように答えた。

「ミス・コルベールは宝物庫の中に入った事はありません?」

「ありますとも」

得意気に答えるミスタ・コルベール。  
それにさらに質問するミス・ロングビル。

「では、『破壊の杖』をご存知？」

「ああ、あれは奇妙な形をしておりましたなあ」

ミス・ロングビルの目が怪しく光る。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか、はい。それより、何をお召し上がりになります？本日のメニューは、平目の香草包みですが……。なに、僕はコック長のマルトー親父に顔が利きましてね、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を」

「ミスタ」

ミス・ロングビルは、ミスタ・コルベールのお喋りをやんわりと遮った。

今日の昼のメニューなど、どうでもいいのだ。今知りたい事は別の事である。

「は、はい」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジを連れても、あけるのは不可能でしょうね」

「そのようすな。メイジには開けるのは不可能と思います。なん

でもスクウェアアークラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に  
対抗できるよう設計したそうですから」

ミスタ・コルベールの話しに笑顔で相槌を打つ。

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらっし  
やる」

ミス・ロングビルは頼もしげにミスタ・コルベールを見つめ、そ  
う言った。

「え？いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多  
いもので……。研究一筋と申しましようか。はは、おかげでこの年  
になっても独身でして……。はい」

「ふふ、ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は、幸せでし  
ようね。だって、誰も知らないような事をたくさん教えてくださる  
んですから……」

そう言ってミス・ロングビルは、うつとりとした熱い視線でミス  
タ・コルベールを見つめる。

「いや！もう！からかってはいけません！はい！」

こいつ、つくづく単純な男である。

するとミスタ・コルベールはがちがちに緊張しながら、禿げ上が  
った額の汗を拭いた。

それから真顔になってミス・ロングビルの顔を覗き込む。

「ミス・ロングビル。ユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』

「はご存知ですか？」

「なんですの？それは」

「ははあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな。その、なんてことはない、ただのパーティーです。ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとか何とか！そんな伝説がありましたな！はい！」

「で？」

その余りにも白々しい話し方に、ミス・ロングビルはにっこりと笑って促した。

「その……、もしよろしければ、僕とおどりませんか、そういうはい」

照れながら話し、最後の方は尻すぼみな感じになってしまった。そんなミス・ロングビルにまたまた笑顔で返すミス・ロングビル。

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫のことについて知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

ミス・ロングビルの言葉を聞いて必死に頭の中を探るミス・ロングビル。独身男は大変である。なぜかその姿は涙ぐましい。

やっとミス・ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたミス・ロングビルはもったいぶって話しはじめた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないので



すが……」

「是非とも、伺いたいわ」

その返事を聞いて得意気に話し始めるミスタ・コルベール。

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが一つだけ弱点があると思うのですよ」

ミス・ロングビルの目付きが変わる。

「はあ、興味深いお話ですわ」

「それは、………物理的な力です」

「物理的な力？」

ミス・ロングビルは判らないと言ったように聞き返した。

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありませんのですが、巨大なゴーレムが……」

「巨大なゴーレムが？」

ミスタ・コルベールは得意気に自説を語った。

それは、巨大なゴーレムで、外の宝物庫の壁を強い衝撃で殴れば、いくらスクウェアクラスのメイジがかけた『固定化』でも叩き壊せる可能性があると言うものだ。

その根拠は、衝撃は化学反応ではなく力の動きであり、『固定化』の守備範囲外であると推測できるからだ。

錆や風化は防げるが、外部からの突発的力には効果がない、それが『固定化』だ。

物質の強度を強めるのは『硬化』であり別物なのだ。まあ状態を保つと言う意味では似たようなモノだが。

ミスタ・コルベールの話を聞き終わったあと、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

その後、たわいもない話をしながら食堂まで歩いていった。

適当に相槌と返事をしながらも、頭の中では先ほどのミスタ・コルベールの話を元にした計画を練っていた。

すると突然、意も言われぬ寒気が全身を駆け抜けた。

それと同時に殺気のような物を孕んだ視線を感じ、その方向を見る。

すると広い廊下の反対側の壁に、一人の男が背を預けてよりかかり、此方を睨んでいた。

その男は、つい先日の決闘騒ぎで話の中心にいた人物だった。

その事件のさいの男の発言に、ミス・ロングビルは共感出来る部分があった。

そして今、その男が此方を睨んでいる。何故だかミス・ロングビルは動けなかった。まるで蛇に睨まれたカエル状態だ。

「ミス・ロングビル、どうかしましたかな？」

ミスタ・コルベールの言葉で我に返り、体の自由を取り戻した。

「いえ、なんでもありませんわ」

ミスタ・コルベールの方を向きそう言って、またあの男の方を見るが、すでに男の姿はなかった。ふと自分の手が湿っている事に気が付く、見てみると手にはジツトリと汗をかいていた。

しかし不思議だった。

まるで全てを見られているような、これからやろうとしている事を見透かされているような、そんな錯覚に陥るような眼だった。

あの男は危ない、何が危ないのか判らないが、とにかく危ない。

ミス・ロングビルの中の何かがそう告げている。

一抹の不安を拭うように、再びミスタ・コルベールとの話に戻る  
ミス・ロングビル。

しかし彼女は知らなかった、今思っていた事が、まさか現実にあるうとは。

END

オマケ

〳〳その時の使い魔さん〳〳

最近の飯は美味しい、美味しいのだが、やはり昔の味が恋しくなる。

もう何年食べていないのだろうか、あの味を……………。

そう、それはマヨネーズだ。あの味は中々出すことが出来ない。似たようなソースはある。だが、あのキューーのようなマヨネーズはなかなか作れないのだ。そうあの味はかなり難しい、…………あれは、良い物だ。

さてどうしたものか、俺は真剣に考えていた。

だいぶ昔に自分で作ってみようと試した事があるが、失敗に終わった。

材料や分量を頭のなかで考えながら、何が足りないのか模索する。うう、ああ~~~~!!判らん!!!

いったいどうすればいいんだ!?何が足りないんだ!?

そんな事で一人思考の迷宮に落ちていた俺だが、ふと前を見ると教師であるミスタ・コツパゲと、美人秘書のミス・ロングビルが歩いていて。

ちくしょうコツパゲめ、人がマヨネーズに悪戦苦闘している時に美人と仲良くお喋りだと……………。

そう思いながら怨念のこもった『もっと禿げろ』と言う視線を、コツパゲの禿げた頭に向けていると、ミス・ロングビルが突然此方を見た。

とっさの事で睨んだ目を元に戻すタイミングを逸してしまった。

数秒見つめあった後、ミス・ロングビルがコツパゲに話しかけられ視線を外した。

なので今がチャンスとばかりに俺はその場を離れた。

べ、別に居ずらかったわけじゃないんだからね!

とまあ、ツンデレ的のりはいいとして今はマヨネーズだ。

そうしてまたマヨネーズの試行錯誤に没頭する。

今一度確認してみるか、確か俺が作ったのはこんなかんじの物だ。

材料・分量はこんな感じだ。

卵黄1個、トリステインの田舎町のダルトバ村で育てている鶏の卵は最高に品質がいい。買いに行くのに苦労したな。

塩小さじ1くらい、さじを持ってなかったので食用スプーンの半分くらいを入れた。塩を取りに行ったのはあの村だったな、海に近く鉱山もある町ベルチアノン、あそこの町の賑わいは良かった。

この町で取れる岩塩はかなり質が良い。買うのが高かったな。手に入れるのに、ある意味此が一番苦労した。

そして酢、小さじ1〜3くらいだ。これもさじが無かったので食用スプーンを使った。

この世界に酢は簡単に作れるためかなり安く買えた。

ワインビネガーがあるがあれも酢と同じような調味料だ。これは東のアスベリまで取りに行った。

最後にオリーブ油120〜180mLくらい、これは流石にちゃんと道具を仕入れた。

本来はサラダ油が理想なのだが、サラダ油は現代技術の特殊な精製方で作るため、この世界には無かった。

オリーブの実から採取する油、オリーブオイルである。質の良いオリーブ油と言えば、緑溢れるブルジュの村だ。ここの油は職人に選ばれ厳選された実を使い造られている。

以上の材料を使う。集めるのに苦労したものだ。

さて手順だが、オリーブ油以外のものをボールでよく混ぜ、白っぽくなってきたら、オリーブ油を数回に分けて入れよく混ぜる。

至って簡単だが、最初の油以外を混ぜるのは結構大変だ。

オリーブ油を混ぜるのも、確り混ぜるように少しずつ入れるから時間がかかる。

そうして出来たマヨネーズだが、まあ普通に美味しかった。だが、やはり昔に食べたマヨネーズには程遠かった。

さて今回はどうしようか、例えばだ、何か別の調味料を加えるのはどうだろうか？ そうだな……、コショウとか。この場合はブラッ

クペツパーかな？

まあいい、他にもレモンなんてどうだろうか？酢や油ばかりだから爽やかになっていいかもしれない、いっそうの事両方入れても良いかもしれない。

フッフッフッフ、いいぞ、何だか出来るような気がしてきた！

よし！そうとなれば直ぐに試作だ！

そして俺は調理場と道具を借りるべく、マルトー親父に頭を下げるため厨房に向かった。

おわり

第十式話 それぞれ気になるらしい（後書き）

さていかがだったでしょうか。第十式話でしたが。

マヨネーズですよ、時代はマヨネーズ！！

まあ本当はそこまでマヨネーズへの拘りはありませんが。

そんな感じで次の話しは土くれのフーケの話に行く予定です。…

……あくまでも予定です、はい。

そんな訳で、今回も話が進みませんでした。次回こそ進むと思いますのでよろしく願います。

そして、ご意見ご感想もよろしく願います。

てな事で、次回もよろしく願います！でわまた次で会いまし

よう！

十惨話 そのう言えばそのうだったよつな気がする(前書き)

久々の投稿になります。短いうえに長い間書いてなかったので文章が変かもしれませんが、そこら辺は勘弁してください願います。

1 / 17 …… 誤字を訂正しました。



十惨話　そう言えばそうだったよつな気がする

今は夜、双月が光り輝き星は瞬き踊っている。

広場の中央で俺は一人、星々の光に照されながらたたずんでいる。トリスティン城下町から帰ってきて、今は夕食後。

いつもの様に厨房の手伝いをして食事を済ませ、アジアに鍛錬をする旨を伝え外にいる。

鍛錬と言ってもたいした物ではない。素振りをしたり、簡単な技を使ったりと難しい事など何一つ無い。

……元々が転生したから使いたい技を試してるのが転じて癖になっただけだしな。

とまあそんな訳で一人剣を降っているのだ。

しかしたただ振るだけでは意味が無い。

そこで仮想の敵を目の前に創造（想像）しながら剣を振るう。

敵はラインメイジが三人。接近戦もできる奴だ。

眼を閉じ意識を集中して敵を想像する。

数秒の静止の後、仮想の敵に向かって走り出す。

ルーンを唱え出す三人の敵。

瞬時に一番近い敵を斬り伏せようとしたが避けられる。

横からもう一人の敵が素早く『ブレード』の魔法で斬りつけて来るが、其をバックステップでかわす。

しかしまだ敵の攻撃は止まらない。三人目の敵が『ファイアボール』の魔法を飛ばしてきた。素早くかわそうと動くもギリギリでかわせない。仕方なく剣を楯にしながら弾道を反らして防ぐが、爆発の勢いに押され吹き飛ばす。

何とか転ばないように態勢を立て直すものの残り二人のメイジが

左右から襲いかかってきた。

片方の攻撃を避けもう片方の攻撃は剣で防ぐ。  
すると空かさずまた『ファイアボール』が飛んで来る。

仲間の攻撃に巻き込まれないよう、逃げようとする敵の二人のうち攻撃を剣で防いだ方を蹴っ飛ばし、もう一人の腕を掴み強引に引っ張り腹に剣を突き刺す。

そして、そのまま剣で刺した敵を楯に使い、爆煙に紛れてもう一人の背後に周り一閃。

さらに、間を空けず残りの敵に『魔神剣・双牙』を放つ。だが敵もやる者で、ギリギリで攻撃を防ぐ。

だがまだ甘い。俺は『魔神剣・双牙』を放って直ぐに駆け出していた。

攻撃を防いで出来たその隙に、敵に向かって『獅子戦吼』を叩きつける。

獅子の形をした氣に吹き飛ばされる敵。

地に伏し動かなくなった敵に近づき止めに剣を突き立て仮想戦闘は終わった。

まあ、仮想の敵での戦闘なので当然実際に魔法が使われた訳でも吹き飛ばされた訳ではないが。

さて次は他の技も試そうかと地に刺した剣を抜き取ったその時だった。

不意に背中から声を掛けられる。

「ずいぶん熱心にやってるのね」

その声に振り向くと、そこに立っていたのはルイズとサイト、そしてキュルケにタバサだった。声の主はルイズだったらしい。

……あれ？何でこんな時間に……、ああそうか、あの馬鹿げた

決闘か。

確かどっちの剣を使うかどうかだったっけ。そう言えばそんなのもあったな。

どうでもよすぎて忘れてたよ。

まあでも、一応知らないふりして聞いとくか、その場に俺は居なかった訳だし。

「ルイズにサイト、それとタバサに………失礼、そちらのご婦人は始めてお会いしますね」

「ええ、そうね。私はキュルケよ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。よろしくお願ひしますわ」

そう言つて髪を掻き揚げるキュルケ。

流星は色香を武器に男を釣るキュルケだ、その動作と見た目が相まってとても艶っぽい。確かに美人だしサイトが鼻の下を伸ばすのは判る。判るのだが………、生憎と俺は色香には騙されない。それに美人とは言つても、俺からすればまだ年端もいかない少女だし、タイプでもない。

まあそんな事はどうでもいいか。

「これは失礼いたしましたミス・ツエルプストー。私の名前はグラズベルと申します。以後、お見知り置きを」

とまあ、一応丁寧に返しておく。まあ相手は貴族だし、何かあったら色々めんどうだしな。

しかし、その考えは杞憂だったらしい。

「あら、そんな固くならなくていいわよ。ヴァリエールのように呼

「び捨てても構わないわ」

「だそうだ、……………まあこっちは楽だから別にいいのだが。」

「……………そうか、ならばお言葉に甘えよう。俺の事はもちろん好きに呼んでくれてかまわない、よろしく頼む」

「そう言った俺を見て、キュルケは何か気がついたかのような表情を見せた。」

「あら、さつきまでの何処か尖ったような雰囲気も良いけど、今のその笑顔の方が素敵よ」

「何故かそんな事を言われた。」

「い、いきなり何だ？」

「そうか、すまないな。初対面の人に対してはいつもそうなんだ」

「まあとりあえず謝っておいた。」

「フフ、別に責めている訳では無いわ。むしろ逆よ、褒めてるのよ」

「訂正、何故か褒められた。何故だ？」

「まあいいか、自己紹介でだいぶん話がそれってしまったが本来の質問をするでしょう。」

「所で、四人は何をしにこんな夜更けに外に来たんだ？」

「その俺の問いに、ルイズがハツとした顔で言った。」

「そう！そうよ！決闘よ！ラズの剣舞に見とれて忘れてたわ！」

いや、剣舞ではないんだが……。もう面倒臭いので突っ込まない事にした。

なのでそのまま話を進める事に。

「決闘？またこんな時間に、何があつたんだ？」

そこからが長かった、ルイズがキュルケにああだと言ったら、今度はキュルケがルイズをこうだと言う。

説明のほすがいつの間にか罵りあい。

まあ話をまとめるとだ、ルイズがサイトに剣を買ってやったがキュルケが自分の買った剣より高い剣を買ってサイトによこした。

その上相手はあの因縁の深いツエルプストー家の人間であるキュルケだ、更に気に入らない。

一方キュルケは、恋は自由なんだ！情熱の恋に他のしがらみなんて無意味だ！つまりは私の勝手でしょ！と言う訳だ。

そして相容れない二人の出した結論が、『よろしい、ならば決闘だ』である。

……。何だかな。まあ家系の因縁だとか歴史的因縁だとかは良く分からないからどうとも言い難いが……。俺的にはハツキリ言うてバカらしい。

ルイズさんよお、お前さん達はお前さん達だろうに。過去の爺さんや婆さんの事なんかもう関係無いだろ？まあ、貴族にそれは無理かな。

とは言つてもルイズばかりがって訳でもない。

キュルケには頭つから賛成出来ない。なぜなら、彼女の言う恋は本来の恋だとは思えないからだ。

彼女は完全にルイズで遊んでる節があるし、彼女の場合は恋愛ゲ

ームだろう。

何れだけ早くサイトを落とせるか。

まあ恋愛感なんて人それぞれかもしれない。だが、そんな物は恋愛処が恋ですら無いと俺は思う。

これまた俺的考えで悪いが、キュルケは恋してる自分に恋してるだけだ。

だから男が自分に振り向いた途端に興味を無くす。そんなもの恋なんて呼ばない、たんなる自己愛だ。俺はそう言う自惚れ馬鹿が大嫌いだ。

そんな訳で二人は決闘するらしい。

……はい、余りにも馬鹿げているので介入させていただきます。

二本の剣の事で騒がしく言い合う二人、それをアワアワ見ているサイト。

そんなサイトに俺は話しかけ、行動に移る。

「サイト、その剣を貸してくれ」

「え？これか？」

キュルケに貰ったであろう金ぴかの装飾の激しい剣を持ち上げるサイト。

それに頷いて答える俺。

「ああ、それだ」

俺の意図が判らないのだろう、首を傾げながら頭に疑問符を浮かべ下手物剣（俺命名）を渡してくる。

そして剣を受け取り二メートル程距離を取りサイトの方に振り返る。その俺の行動にサイト以外の皆も疑問符を頭に浮かべている。そしてサイトとその他に向かい言った。

「サイト、上段から一撃叩きつける。デルフを頭上で横に構えて防いでくれ。サイト以外は少し離れてくれ」

「え？え？」

「ちょ、ちょっと！いきなり何なのよ？」

「……見ていれば判る」

おっと、俺が言おうとしていたのにタバサ嬢が先に言ってくれたよ。

とまあそんなわけで、サイトは頭の斜め上でデルフを腹が見える横にした状態で構える。

さて準備は整った。

「…行くぞ」

「あ、ああ」

「おう！どんどん！」

少し緊張しているのか、上擦った声で答えるサイト。それとは反対に威勢のいいデルフ。

どんどん…お前は本当に剣か？

そのサイトとデルフに向かい、俺は力強く地を蹴る。  
二メートルの距離を一瞬で縮め、下手物剣を大きく振り上げかなりの力でもって叩きつける。

「ぐっ…！」

「ぬお！？」

次の瞬間、金属同士がぶつかる甲高い音と、金属が折れる音が闇夜の中で響き渡る。

一瞬の間の後、闇夜の空から降ってきた折れた剣の刃が地面に刺さる。

そして何処からか声上がる。

「…え？」

その声はサイトの物だった。

まあ簡単に状況を説明すると、デルフを構えているサイトに下手物剣で斬りかかり、デルフとぶつかった下手物剣が折れたのだ。

「ふむ、やはりな」

「て、何がやはりだよ！何一人で納得してるのよ！あんなことして、怪我でもしたらどうするのよ！」

そう良いながらルイズが走ってきて俺に詰め寄る。

ルイズに突っ込まれ基怒られた。ふむ、サイトと俺どちらの心配をしたのかね。まあ確実にサイトだろうが。



そんな事を考えながら、俺は無表情に言った。

「よかったなルイズ」

「な、何がよ？」

「君の与えた剣の勝ちだ」

そう言ってデルフを見る。するとデルフが勝ち誇ったように言い  
きった。

「へ、当たり前だ。そんななまくらに負けるようなデルフリンガー  
様じゃねえや！」

別に褒めた訳じゃないんだが……。まったく、威勢の良いことで。  
心の中でそう思いながらデルフから視線を外し、キュルケとタバ  
サの所に向かう。

キュルケの前に行き折れた剣を見せて言う。

「残念だな、君の負けだ」

その俺の言葉に、少し吃りながらも答えるキュルケ。

「ま、まあ今回は選んだ剣が悪かったわね」

完全に負け惜しみだ。それに今回はと言ったな、これは聞き捨て  
ならないぞ。

「今回は…だと？」

「な、何かしら？」

少し不機嫌げみに言った俺の言葉に、吃りながらも言葉を返すキユルケ。

悪いが言わせてもらっぞ。

「ふざけるなよ、剣は戦いの道具なんだ、オフザケのための玩具じゃない。もし今のが戦場での戦いならば、この剣を使っていたサイトは確実に殺されていた、死んでいたかもしれないんだぞ？」

「…！？」

俺の言葉に肩をビクつかせるキユルケ。

どうやら感じている物はあるらしい。

「…戦いには今回も次回も無い。その一回一回が命の取り合いなんだ。……君はその殺し相に使う道具を贈ったんだ、君の恋愛観を否定はするつもりはないが、もっと考えて贈るべきだった。この剣で戦って死ぬサイトを見なくてよかったな」

そう言って折れた剣をキユルケに渡し、俺はその場を離れるため踵を返した。

後ろからルイズの声がしたが俺は無視してその場を後にしようとして、ある事を思い出した。

そうだ、そう言えばこの決闘って確か土くれのフーケのイベントに関係あるやつじゃなかったっけ？

えっと確か、決闘でルイズの失敗魔法が壁に亀裂を作って、そこをゴーレムが攻撃して壁が崩れて……。

……ヤバイ、もしかしてイベント潰した？

やっちゃった？俺やっちゃった！？

やっべえ、どうしよう。どうすればいいんだ！？

今からルイズに魔法を打ってもらうのも不自然だし、俺がやるのもやっぱりおかしいし……ヤバイ、八方塞がりだ！！

そう心の中で一人焦っていた時だった。突然双月の光を遮る様に影が掛かった。

瞬時に上を向き状況を把握する。

「全員逃げろ！！」

俺の突然の叫びに皆が上を向き、そして驚愕する。

「な！？」

「キ、キヤアアアア！」

悲鳴を上げるキュルケ、驚き眼を見開くルイズ。サイトは今一現状のマズさを把握できていないのか啞然と見つめている。唯一タバサだけは瞬時に警戒態勢に入っている。

そこにいたのは全長30メートルはあるゴーレムだった。

岩を削ったような見た目のそのゴーレムは、この暗闇の中で眼光だけが怪しく光っていた。

てかあの目って光るのか、初めて知った。

おっと、兎に角今はこの状況を何とかしなければ。

俺がそう考えているときだった。

そのでかいゴーレムが俺に向かい拳を降ってきた。

うお！？でかくてトロいのかと思っただら何気に早いぞ！？  
くそ、油断してたからかなりギリギリだった。

後ろに飛びゴーレムの拳を避ける。しかし、逃さないと言わんばかりに拳を飛ばしてくる。

くそっ…！しつこいなっ…！！

二発目を横に転がり避け、続けて来た三発目は後ろに飛び退く。しかし、ゴーレムは続けて攻撃するべく四発目を振りかぶる。だがこっちだってそう簡単にはあたってやるものか。しかし、次の攻撃をかわすため何処に避けるか考えていた俺の後ろに人の気配を感じた。誰かと思い後ろを見ると、そこにはキュルケが震えて尻餅をついていた。

んなっ！？何でいるんだ！？原作だと真っ先に逃げるだろ！？

その現状に驚いていた俺は、ゴーレムの攻撃が来るのを思い出し直ぐに前方に向き直したが、既にゴーレムの攻撃が目前まで迫っていた。

くっ…！畜生こっとなったら…！！

腰にある剣を抜き直ぐに地面に突き立てる、そして魔力を一気に解放する。

「守護方陣…！！」

俺を中心に魔方陣が浮かび上がり、その魔方陣から白い光が立ち上る。

ゴーレムの拳は、その魔方陣から上がる光に触れた瞬間、ガリガ

りと削れ消滅して行った。

あ、あぶね〜。何とかなつた〜。

何とか四発目を防いだ、操者が驚いたのかゴーレムの動きも止まっているようだ。

すると、後ろからバサバサと何かが翼を動かす音が聞こえた。

振り替えるとキュルケが上に上がって行くところだった。

どうやらタバサが回収したらしい。

キュルケはこれで大丈夫だろう。

心配要素が一つ消えた事に安堵した俺は、再び視線を前に戻した。すると、ゴーレムは既に次の攻撃に入っていた。

うおう！？ヤベ！？

「守護方陣！！」

慌て発動させた技は、これまたギリギリで間に合った。

さつきと同じようにまたガリガリと拳を削って行く。

ふう、間に合った。

しかし安心するのはまだ早かった。ゴーレムは残ったもう一つの拳を横風ぎに降り下ろして来た。

でも単なる岩の拳なら問題はない！守護方陣で削り消すだけだ！！

そう思い俺は楽観視していた。

だがそれがいけなかった、ゴーレムの拳は守護方陣にぶつかる直前に拳が鉄に変わったのだ。

な！？しまった！？

守護方陣に当たった鉄の拳は、少しは削れるものの、たいした効果もなく俺に迫ってくる。

くっそ！！

剣を引き抜きガードに回し、拳と同じ方向に飛び衝撃を和らげる。そして、それと同時にネギまの魔法で防御する。

くっ！レフレクシオー（雷楯）！！

魔法を発動させた次の瞬間、ゴーレムの拳が当たり物凄い衝撃が俺を襲った。

レフレクシオー（雷楯）の効果でダメージはたいして無かった。しかし、攻撃の勢いで吹っ飛ばされ、俺は上手く受け身も取れず木に激突した。

その際、ぶつかった右脇腹から、メキヤ、ベキと言う嫌な音と、激痛が走った。

ぐう！？……ヤベエ、肋骨何本か逝ったかも。

衝撃と激突のダメージで体は動かない。

無理に動かそうとすると右脇腹から激痛が走る。

何とか顔をゴーレムの方に向ける。

するとそこには、ゴーレムの後ろで杖を構えたルイズの姿が見えた。

ば、馬鹿野郎！何やってるんだ！？早く逃げろ！！

その声に出そうとするも、口からは掠れた蚊の鳴くような声しか出ない。

「あ……う……にっ……にげ……る」

絞り出した声はルイズに届く事はなく、その声を最後に俺の意識は闇へと落ちた。

つづく

十惨話 そのつえばそうだったよつな気がする（後書き）

今日は又は今晚は、グルタミンです。

前書きで書いた通り長い間執筆が滞っておりました、それには色々と言が……有るわけではなく、スランプと行き詰まりです、単純に。

そして他の作者さんのSSを読あさっていたのもあります。

まあつまり、何が言いたいのかと言うと……すみません！自分弛んでました！待っていてくれた方申し訳ありません！！

とにもかくにも、また書き始めました、直ぐに更新出来るかは判りませんがなるべく早く更新出来るように頑張りますのでよろしくお願いします。

とまあ謝罪ばかりになってしまいましたが、今回はいかがだったでしょうか？

読んでいただいた人には解るように、今回はオリ主の初敗北です！そんな感じで物語も少しずつ動き変化して行きます。

次回はオリ主以外の視点で話を進めるつもりです、お楽しみに！てな訳で今回はこの辺で、ご意見・ご感想もお待ちしております、よろしくお願いします！

ではでは、また次回お会いしましょう！



第十四話 土くれのフーケ討伐前編（前書き）

ルイズのセリフを修正しました。

H001さん、ご指摘ありがとうございました。

2011/5/25……ルイズのセリフを修正

## 第十四話 土くれのフーケ討伐前編

Side サイト

俺は今信じられない物を見ていた。

めちゃめちゃでかいゴーレムが出てきたかと思うと、そのゴーレムがラズに向かって攻撃し始めた。

最初は軽く避けていた、でもキュルケを庇い攻撃を受けちまった。ゴーレムの攻撃で吹き飛び木に叩きつけられるラズ。

最初は何が起こったのか判らなかつた。

ラズが……負けた。

そんな事を動かない頭で漠然と考えていたが、突然の爆発音に我に返った。

音のした方を見ると、そこには背を向けるゴーレムに杖を向けるルイズの姿があつた。

(な！？何やってんだアイツ！？)

魔法を使ったんだと思う。

ゴーレムがルイズの方に向き直り、腕を振りかぶる。

(ヤバイ！？)

そう思った俺はデルフを握り走り出していた。

何時もより体が軽く感じるが今は考えている余裕は無い。

(くそ！間に合え！！)

デルフを持ち全速力で走る。

横目にはルイズに向かって放たれる拳が見えた。

(えい！ままよ！)

全速力で走りルイズを抱きかかえるように前方に飛び込む。  
倒れ込んだのと同時にルイズが居たと思う場所から物凄い衝撃音が上がる。

体を起こし見てみると、そこには地面に突き刺さるゴーレムの拳があった。

(あ、危ね。ギリギリセーフ)

ホット胸を撫で下ろす俺にルイズが突っかかってきた。

「ちょっと！何すんのよ、魔法外れちゃったじゃない！！」

な、何言ってるんだコイツはこんなときに。

「お前馬鹿か！死ぬ気かよ！！」

「煩いわね、どんなときでも貴族は敵に背を向けないのよ！！」

「死んだら意味ないだろ！」

「アンタに貴族の誇りなんて判らないでしょ！」

「ああ判らないね！判りたくもない！！」

そんな公論をしてる俺達の横に何か音が立てて降りて来た。  
見るとあの青い竜だった。

青い竜の上から、青い髪の女の子が降りてきて俺とルイズに言っ

た。えっと、確かタバサだっけか？

「……………そんな事をしてる場合じゃない」

「そうよ、ラズは！？」

いっけね、言われて思い出した。

そう言えはラズは吹っ飛ばされたんだった、喧嘩してる場合じゃねえ！

幸いゴーレムは此方に關心はないのか塔の方を向いている。

それを確認して俺達はラズの方に駆けて行った。

ラズはうつ伏せた状態で倒れていた。

「ラズ、大丈夫か！？」

「ラズ、ラズ！？」

「……………大丈夫、意識を失ってるだけ」

「ほ、本当か？」

「……………」

俺の言葉にコクリとうなずくタバサ。よ、よかった。マジ危ない状況だったらどうしようかと思っただぜ。

ルイズも安心したのか尻餅を着いた状態で胸を撫で下ろしている。

「……………右の肋骨が折れてる」

「ちよ、全然大丈夫じゃないだろ！？」

「おいおい、十分に大怪我だよ!？」

「ちょっと、大変じゃない早く治療をしなきゃ」

ルイズがそう言ったのに被せるように、突然轟音が鳴り響いた。驚き音のした方を向くと、そこにはパンチで塔の壁を打ち砕いたゴーレムが目に映った。

「くっ……!」

するとルイズが突然ゴーレムに向かい走り出した。

「おい待てよルイズ!何する気だ!」

「何って、止めるに決まってるでしょ!」

「お前、何無茶な事言ってるんだ!さっきだって死ぬところだったんだぞ!」

「やってみなくちゃ、わかんないじゃない!」

「さっきもやっただろ!無理だっつもの!」

俺がそう言つとキツとルイズが睨み付けてきた。

「あんた言ったじゃない」

「え?」

な、何を？

「ギーシュと決闘した時、言ったじゃない。下げたくない頭は下げられないって！」

「そりゃ言ったけど！」

まったく、状況が違うだろうが！

そう言おうとした俺の言葉を遮る様に、続けてルイズが言う。

「私だってそうよ。ささやかだけど、プライドってもんがあるのよ！ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ！」

たく、そんなことがよくだらねえ。

「いいじゃねえかよ！言わせとけよ！そんなことで無茶して取り返しのつかない事になるよりましだ！」

俺がそう言うと、ルイズは強く杖を握りしめ言った。

「無茶でも無理でもやるのよ！私は貴族よ、魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃないわ！例え死ぬほど危なくても、敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ！」

あーもう、この判らず屋が！

俺は、またゴーレムに向かって行こうとするルイズの肩を掴み此方を見せ頬を叩く。

パーンと言う乾いた音が響く。

「貴族の誇りがプライドが何だ！死んだら終わりじゃねえか！ばか

「！」

啞然と俺の言葉を聞いていたルイズの瞳から涙が零れる。くし  
やつと顔を歪め、地面にへたり込み鳴き始めた。

「だって……悔しくて……。わたし……。いつもバカにされて……。  
今だって……。友達の使い魔が傷ついてるのに……。わたし、何も  
出来ない……」

「泣くなよ」

まったく、普段意地張ってるくせに。

いつもの気が強くて生意気なルイズは何処に行ったんだか。

そう思いながらもルイズから視線を外し、塔に穴をあけ腕を入れ  
ているゴーレムを睨み付けた。

すると腕の入った穴から長いロープを着た人影が現れた。

何かすげームカつく。

アイツのせいでこうなったんだよな？畜生、何か一矢報いる方法  
はないか？

そう思っていると、不意に声がかかった。

「ルイズ！サイト君！」

聞き覚えのある声だ。

俺の事を君付けで呼ぶのなんて一人しかいない。  
見るとアジアが俺達に向かって走ってきていた。

「いったいどうなってるの！？あのゴーレムは何！？」

アジアが矢継ぎ早に聞いてきた。

しかし俺はどう答えていいか判らなかった。

どう答えるか考えていると、不意にルイズが喋り始めた。

「アジア……ごめんなさい……私、何も出来なかった……」

「え……？どう言う事？」

疑問顔で聞き返すアジアに、声を震わせながら言うルイズ。

「ラズが……ラズが……」

しかし上手く言葉に成らないのか、そう言って横たわるラズの方を見る。

いつの間にしたのか、ラズは仰向けに寝ていた。

「……え？……ラ、……ラズ？」

信じられない物を見るような顔で、横たわるラズを見詰めるアジア。

「あ、いやアジアあれば　「ラズ！！」聞いてないよ」

俺の言葉も聞かずにアジアはラズの元へ駆けて行った。

てかルイズ、その言い方だとまるでラズが死んだ様に聞こえるぞ。俺はそんなアジアを見たあとに、地響きを上げながら遠ざかって行くゴーレムを睨み付けた。

(この野郎、覚えとけよ。ルイズを泣かせたこの借り、高く着くぜ)

そんな事を心の中で吐き捨てながら、今だ泣きじゃくるルイズを



なだめ立たせると、ラズの元に向かった。

S i e d O u t

S i e d アシア

夜になりそろそろ今日が終わります。

今私は日課の日記を付けています。

今日は凄く楽しかったです。

ルイズと一緒に買い物に行き、帰りにラズが持ってきたサンドイッチを皆で食べました。

優しく、暖かくて、とても楽しい時間でした。

日記を通して、今日と言う想い出のページがまた、私の中に綴られます。

日記を書き終わり、そろそろ寝る用意をしようと思ったその時でした。

夜の学院に、地響きのような轟音が鳴り響き、大きな振動に部屋が揺れました。

突然の出来事に私は唖然と椅子に座り尽くしていましたが、数秒してから我に返りました。

外で何かあったのかな？

そう思った時、私の中に何か嫌な物が湧き上がりました。

こんな所でじっとしている場合じゃない、行かなくちゃ。

そんな感情が私を支配します。

でも何処に行けば？

そう思った時ふと有ることが頭に浮かびました、そう言えばラズがまだ外で鍛錬しているはず。

それを思い出した時、私の体は自然に動き出していました。

力一杯廊下の石畳を蹴り、階段をかけ降ります。

速く！速く！急げ！急げ！

私の中の嫌な何かが、私をそう急かします。

さつきまでの幸せな気持ちには裏腹に、今は黒く渦巻くような嫌な何かが私の心に重くのし掛かっています。

夢中で走り塔を出て、いつもラズが鍛錬をしている広場に向かいます。

その間、嫌な何かは止まることなく、むしろどんどん湧き出て来て、私の胸を押し付けます。

必死で走り、広場の入り口に差し掛かった時、私の目に映った物は30メートルはあるゴーレムが、塔の壁に腕を突き刺した奇妙な常態でした。

一瞬、あまりの光景に足を止めてしまいました。前方にサイト君とルイズがいるのを見つけ、二人の方に駆けて行きました。

「ルイズ！サイト君！」

私の声に気がつきサイト君が此方を向きました。

二人の元に着き、今のこの状況について聞きました。

「いったいどうなってるの！？あのゴーレムは何！？」

私の質問にサイト君は考え込んでしまいました。

すると、何故か俯いてたいたルイズが顔をあげ私に言ったのです。

「アジア……ごめんなさい……私、何も出来なかった……」

ルイズのその言葉を聞いても、何の事か私には判りませんが、でも、ルイズの顔を見てただ事ではない事は判りました。何故なら、あの気丈で強がりなルイズが泣いていたからです。

「え……？どう言う事？」

考えるべくも無く、私は聞き返していました。

しかし、私の中の何かは其を拒んでいるかの様に、心の中を掻き乱します。

駄目だ！聞くな！聞いてはいけない！

しかし、その言葉に逆らうように、私はルイズの言葉を待っていました。

そして、ルイズが口を開き言葉を発しました。

「ラズが……ラズが……」

ラズ？ラズがどうしたの！？

そう聞き返したい筈なのに、私の口は鍵で閉めた様に動きません。話した後にルイズが向く方を、吊られて私も向いてしまいました。そこにいたのは

「……え？……ラ、……ラズ？」

仰向けに横たわるラズの姿でした。

眠る様に静かに横たわるラズ。

それを見た私の鼓動が急激に加速する。

何で？ どうして？ 嘘……だよね？ だって……そんな……。

そのラズの姿を見て私の頭の中は真っ白になってしまった。  
嘘だ、そんな……ラズが死ん。

真っ白になった頭でそこまで考え、気が付けば私は走り出していた。

「ラズ！！」

駆け寄り側にしゃがみこむ。

必死にラズの体を揺らす。反応が無い。

「嫌、…嫌！ラズ！」

目を開けて欲しくて必死に揺さぶる私の腕を、横から止める手がありました。

誰かと思いいその手の人を見ると、ミス・タバサでした。  
私と目があつたミス・タバサは静な、でも確りとした声で言いました。

「肋骨の骨折以外たいした事は無い。気絶しているだけ」

「…え？…気絶…ですか？」

私の言葉にコクリと頷くミス・タバサ。  
それを見て、私は力が抜けその場にへたり込んでしまいました。

あ、安心しました、よかったです。私はてっきり。

そこまで考えて、私は固まりました。

肋骨を骨折しているとはいえ、あそこまで取り乱した自分を思い出し今度は恥ずかしさが私を襲いました。

は、恥ずかしいです…。うう、穴が有ったら入りたいです。

と、とにかく！

何はともあれ、ラズが軽症(?)で安心しました。  
肋骨の骨折ならば今すぐ危ないと言った事も無いと思います。  
でも速く治療をしなくちゃいけませんね。

安心したので、私は早速ラズを治療できる場所に運ぼうと決めました。

運ぶため『レビテーション』の魔法を使おうと杖を出した時でした。

誰かに横から声を掛けられたのです。

誰かと思いきやそちらを見ると、ミス・ツエルプスターでした。

「ちょっと待ってミス・ヘブランスト」

「？、なんですかミス・ツエルプスター？」

私が問い返すと、ミス・ツエルプスターはいきなり頭を下げまし

た。

え？え？何で？

「ど、どうしたんですかミス・ツエルプストー！？」

驚いた私の問いに、ミス・ツエルプストーは頭を上げ訳を話し始めました。

「彼の怪我は私のせいなのよ……」

沈んだ表情で言うミス・ツエルプストー。

その重い言葉に私は、真剣な顔で聞き返しました。

「どう言う事ですかミス・ツエルプストー」

私がそう言うと、ミス・ツエルプストーは静に、でも確りとした言葉で話し始めました。

「だから彼は私を庇って怪我をしたのよ。……本当にごめんなさい」

そう言ってまた頭を下げるミス・ツエルプストー。

私に来るまでの出来事を聞き、私は納得していました。

ラズはミス・ツエルプストーを庇い怪我をしたそうです。

庇われた本人が言っているのも本当の事だと思っています。

しかし、怪我を負わせたのはあのゴーレムを操っていた人物です。別にミス・ツエルプストーは悪くないと思います。

なので、私は頭を下げてるミス・ツエルプストーにこう言う事にしました。

「頭を上げてください、ミス・ツエルプストーは悪くないです」

そう言った私を驚いた顔でミス・ツエルプストーは見ていました。

「でも彼は　「ミス・ツエルプストー」」

私は彼女の言葉を遮る様に声をかけました。

「別に私は怒ってないですよ。…いえ、違いますね。怒ってます。ですがそれは貴女ではなくラズを傷付けた人に対してです。だから私はミス・ツエルプストーを恨んだり怒ったりしません。それに…」

「…それに？」

一端言葉を止めた私に聞き返すミス・ツエルプストー。  
それに対して私は、確信を持ってこう返します。

「それに、ラズは気にしてないと思いますよ？」

私のその言葉を聞いてミス・ツエルプストーは狐に摘ままれたような顔をしていました。

ふふ、何だか面白いです。

「さあ、この話しは終わりです。速くラズを治療しなくちゃいけません」

「そ、そうね」

やっと驚いた状態から戻ったようです。  
さてラズを一人で運ぶのは少し大変です。  
そこでミス・ツエルプストーにも手伝ってもらおう事にします。

「ミス・ツエルプストー、一人で運ぶのは大変なので手伝ってもらえませんか？」

「ええ、判ったわ」

一二つ返事で了承してくれました。

「ふふ、ありがとうございます」

私が笑顔で返すと、ミス・ツエルプストーが言いました。

「ミス・ツエルプストーなんて堅い呼び方なんてしないでいいわよ。気軽にキュルケって読んでちょうだい」

「あ、はい、判りました。それじゃあ私も、ミス・アタナシアじゃなくてアシアって呼んで下さい。ふふ、よろしくねキュルケ」

「ええ、判ったわ」

そう言つとキュルケは、『レビテーション』をラズにかけてくれました。  
ました。

フワリと浮かび上がったラズを押しして動かそうとした私の袖をミス・タバサが引つ張りました。

何でしょうか？

私の顔を見て判ったのか、ミス・タバサが言いました。



「階段よりシルフィードの方が速い」

「どうやらミス・タバサの使い魔に乗せてくれるようです。」

「ありがとうございますミス・タバサ！」

私がそう言うと、何か考えるように視線をずらした後、小さな声で言いました。

「……タバサでいい」

「あ、うん！私もアシアって呼んで、よろしくね！」

そう言うとタバサはラズをタバサの使い魔、シルフィードの所まで押し始めました。

それに習って私も一緒に押ししました。その後はシルフィードに乗り、女子塔の私の部屋の窓から入りました。

ラズをベッドに寝かせます。

さて、ここからが水系メイジである私の腕の見せ所です。

ふう、終わりました。

作っておいた私特製の秘薬を使って、『治療』の魔法を使いラズの肋骨の骨折を治しました。

ふう、これでラズは大丈夫です。

まあ二三日は寝ていた方が良くもしませんが。

「さすがは『癒水』のアタナシアね」

「そんな、たいしたことしてないよ」

キュルケに誉められました。照れ隠しでそんな事を言っちゃいました。

えへへ、ちょっと嬉しいです。

「アジア！ラズは！」

キュルケとそんな話をしていると、慌てた様子でルイズが部屋にはいつて来ました。

「あ、ルイズ。大丈夫よ、今治療が終わったから」

「ほ、本当？」

「うん、本当だよ」

私がそう言うのとルイズは、へたへたと尻餅をつく様にその場に座ってしまいました。

「そ、そう……」

ふふ、ルイズったら。

安心したのか、腰を下ろしたルイズにキュルケが言います。

「あら、気と一緒に腰まで抜けてしまったのかしら？」

「……なんですって？」

あらあら、何時ものが始まってしまいました。

こうなると自然と終わるのを待つか、誰かが止めに入らないと終わりません。

……でも、ようやく何時もの二人に戻った様です。

キュルケも素直じゃないですね。普通に大丈夫って声をかければいいのに。

でも、これも彼女なりの優しさですね。

それから暫くして二人の言い争いは終わりました。

「まったく、相手にしてらんないわね。私、疲れたからもう寝るわ、それじゃあね」

そう言つと、キュルケはタバサと一緒に部屋を出て行きました。

「ふん、まったく相変わらずムカつく奴ねツエルプストーは」

そう言いながらも、すっかり何時ものルイズに戻っていました。よかったです！

そしてその後は、ベッドにラズを寝かせていて私が寝れないのでルイズの部屋のベッドと一緒に寝ることになりました。

前にも何かの用事の後そのまま一緒に寝た事があります。

久しぶりで少し楽しい気持ちです。

……でも、ラズの怪我がたいした事なくてよかったです。

ラズに怪我させた人、絶対に許しません。

覚悟しておいて下さい！

ラズを傷付けた人が、どう言う人物かも会う機会があるかも判らないのに、私はそう思い、決意の様な物を固めていました。

こうして、長かった私の一日は終わりました。  
ふあゝ。……私にもう眠いです。

くぐぐ

## 第十四話 土くれのフーケ討伐前編（後書き）

今日は又は今晚は、まいどお馴染みグルタミンです。  
さて第十四話はいかがだったでしょうか。

……ええ、ええ、相変わらずの駄文ぶりでしょう。  
しかも前編だし……。

まあ原作主人公達の仲が少し進展しました。  
ふっふっふっ、次は我が主人公達のばんですね。

さあ！フーケをフルボッコ フールボッコ フールボッコ ア  
ツトメイトですよ！

まあ、もしかしたら中編を挟むかもしれませんが。

てな感じで進んでいきます。

さてはて、今回はこんな感じですかね。

まあフーケ討伐編は早く終わらせたいと思っております。 ……  
できるだけ頑張ります。

てな訳でご意見・ご感想、又はご指摘・誤字脱字報告、そして御  
要望などなど、どんどんお待ちしております。よろしくお願いま  
す！

ではでは、また次回お会いしましょう！アデューー！

第十四話 土くれのフーケ討伐中編（前書き）

やはり中編になりました。

オリ主の師匠登場！イメージ的にはウイスキーの似合っナイスミドルです！

そしてやはりオリ主暴走気味。

## 第十四話 土くれのフーケ討伐中編

懐かしい夢を見ていた。

あれは俺が師匠に剣を習いながら旅をして約三年経った頃の時だ。

あの時は確か、片田舎の町で受けた依頼を片付けた日の夜だった。

依頼完了の報告を村長にし、借りた寢床で俺は剣の手入れをしていた。

今回の依頼はコボルドの討伐だった。最近溪谷に住み着いたコボルドの群れが、生け贄にするため若い娘をさらって行くらしく、すでに三人の娘が連れ去られていた。

コボルド事態は強くなかった。だが集団を相手にしなければいけないため、少し時間がかかってしまったが。

（ふむ、今日の戦いで判った事は、まず返し手が遅いことだな）

相手の攻撃を崩して返す際の技の速度が足りない。俺はそう感じていた。

（もっとだ、もっと速く斬らなければ……。どうすればもっと速くなるか……。？……。剣線の挿入角度？それとも踏み込みか？いや、重心の移動か……。？）

俺は剣の手入れをしながらそんな事を考えていた。

すると師匠が突然話を振ってきた。

「グラスベル」

「はい、何ですか師匠？」

深い思考に没頭していた俺は、その師匠の言葉に現実に戻った。そんな俺に、意識をそちらに向けたのを理解した師匠は言った。

「お前は信念を持っているか」

「信念……ですか？」

「そつだ、信念だ」

普段フザケてる様な発言ばかりの師匠のいきなりの真剣な話しに戸惑いつつ、言われた事に真面目に答える事にした。

「……判りません、今自分に信念と呼べるものが有るのか……。それにしても、突然どうしたんですか？何か何時ものフザケた師匠らしくなくて気持ち悪いですよ？」

とまあ真面目には答えたが、最後に師匠をからかうのは忘れない。

「……お前な、思っても言うか普通？てか仮にも師匠だぞ、もっと口をわきまえるよ」

「すみません、あまりにも有り得ない程気持ち悪かったのでつい」



「……もう何も言わんぞ」

少しいじりすぎたか、師匠は呆れ混じりでそう言ってきた。  
なので方向修正をすることだ。

「そうですか、それは残念です。で、突然何んですか？」

「……ったく、まあいい。……いやな、今日のお前の剣を振るう姿を見てな」

「……はい？」

すると師匠は唐突にそんな事を言い始めた。

はて、今日の俺の剣か……。教えてもらっている通りに振っていた筈だが、どこがおかしい所があったかな？

そう俺が考えていると、不意に師匠は話し始めた。

「お前、剣を振るう時に何を考えている？」

「え？……いや、特に何も」

「……そうか」

そう言うと師匠は黙り込んで何かを考え始めた。  
なので俺は素直に聞いてみる事にした。

「で、それと信念に何の関係が有るんですか？」

「知りたいか？」

そう言ってニヤリと笑う師匠。

……まったくこの人は、人が素直になつた途端にこれだ。

「……………今日は遅いのもうね　「あゝ判つた判つた、悪かつたよ」……………で？なんなんですか？」

俺が改めて聞くと、師匠の顔つきが真剣な物になつた。

「うむ、俺には信念がある。それは…、守る剣であれ。そして人の為の剣であれ、と言う物だ。俺は人を、生き物を斬るときは必ずその信念の下に斬ると決めている」

「人の為の剣……………なぜですか？何故自分ではなく人の為のなんですか…？」

俺がそう言うと師匠の周りの空気が突然変わった。

「それはな……………自分の為の剣は軽い、そして危険だからだ。周りが見えなくなる。そしていつしかソレは……………自分を殺す」

「……………自分を……………殺す？」

師匠のその静だが威圧のこもつた声に一瞬喉が詰まつた。

師匠がこんな話し方をするなんて珍しい。

普段自分から戦う事をしない師匠が、弟子とは言え人を威圧するなんて……………。

「そつだ……………。周りが見えなくなると、自分以外の命が軽く思えてくる。そして殺す事を躊躇わなくなり、殺す事に何も感じなくなる。

そして殺す事が当たり前になり……最後にや殺す事を楽しむようになる。」

「……………」

「人が人の命を奪うことに躊躇わなく為ったとき、ソレはもう人じゃない……………獣以下の化け物だ。そうなたらもう、そいつは人として死んでるのと同じさ」

「……………何故その話を？」

俺がそう聞くと、途端に師匠の威圧感は無くなった。

「うん？いやなに、今日のお前の戦い方を見てて、そろそろそう言った事を教えてもいい頃かなと思ってな」

「……………そうですか」

「まあ、焦る必要はないさ、じっくり考える。でも気を付けるよ……殺すのに慣れるなどは言わない、でも当たり前と思うなよ？人でいたいならな……………」

何か誤魔化されたような気もするが、師匠の何時もと違うその雰囲気にならぬ物を感じた。

なので俺はその師匠の言葉に真剣に答える事にした。

「……………はい、誓って忘れません。胸に刻んでおきます。」

「そうか、ならいいんだがな……………」

そう言つと師匠は真剣な表情から、何時ものフザケた表情になつた。

「さて、そろそろ寝るか。明日は日が昇るのと共にこの村をでる。そして溪越えだ、気合い入れてけよ？あそこはワイバーンもでるらしいからな」

そう言つと師匠は不適な笑みを浮かべてベッドに横になった。

そんな師匠を見て俺は思う。

この人は詠めない人だ。

普段フザケてるくせに、不意に振る話で確信をついてくる。

本当に判らない人だ。

でもだからこそ、俺はこの人に付いてい行こうと思つたのかもしれない。

……もう何百年も前の話だ。

何故今更こんな夢を見たのか判らんが、とても懐かしいな。

……信念か、もうだいたい前から考えてなかつたな。

でも、俺の体はその事を忘れてなかつたんだな。

今はそれが何よりも嬉しい。

『守る剣であれ。そして人の為の剣であれ』か、……師匠、アンタの信念はまだ俺の中で生きてるぜ。

でも、俺も一つ見つけたんだ、譲れない物が……信念と呼べる物が。

俺の剣は……、俺の牙は、守るだけじゃない更にその先に道を創る、導く牙だ。

長く生きた俺だから出来る事だと思う。だから……アンタのその信念と共に、貫くぜ。

どうやらそろそろ時間らしい。懐かしい夢の喧騒も段々遠くなり、体が引つ張られる様に意識が浮上して行く。

さて、俺の信念を貫きに行きますか。

「知らない天井……ではないな」

はい、開始一発かまりました！

さてと、懐かしい夢で、ある意味目が覚めた所で現状を把握しますか。

此所はアジアの部屋かな？すると今はアジアのベッドに寝てるわけか。

いやはや迷惑掛けちゃったな。

さて今は何時か、体内時計的には午前10時くらいかな。

んでもって体は……あれ？治ってる？

おかしいな、肋骨折った筈なんだが？

不思議に思い身体を起こし、自分の手で確かめてみる。

……もしかして、アシアか？

不意に周囲を見回すと、小さなテーブルの上に秘薬が入っていたであろう小瓶が、使った後そのままの状態で置いてあった。

何とまあ、肋骨の骨折程度で秘薬まで使ってくれたのか。本当に優しい娘だな。

そう思ってその小瓶を見ていると、軽いノックの後にドアが開いた。

「失礼しま……す、ラズさん？」

「ああ、シエスタか」

ドアの方を見ると、啞然としたシエスタがそこにいた。そして我に帰り小走りで俺の下までくる。

「お体は大丈夫ですか？」

「ああ、もうすっかりね」

そう言って立ち上がるうとする俺を、シエスタが慌てて止める。

「だ、駄目ですよラズさん！まだ起きちゃ！」

ふっ、韻狼族の回復力を舐めてもらっちゃ困るぜ。

ましてや秘薬まで使って治してもらってるんだ、もうサイクロンブレイクだって楽勝に出来るぜ！

……すまん、少し暴走した。

慌てるシエスタにやんわりと問題がない旨を伝える。

「心配を掛けたようだが問題ない、……ありがとう」

「……本当に大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとう。君は優しいな」

感謝の意味を込め笑顔で言った。やはり笑顔は大切だと思っただ俺は。

「……いえ、そんな。たいした事してませんから」

照れているのか、顔を赤くして下を向いてしまった。

「あの、それじゃあ………仕事がありますから！」

そう言って出て行こうとするシエスタを呼び止める。

おっと危ね、原作で展開はある程度は知ってるとは言え、ちゃんと場所を聞かないとな。

正確な位置までは判らんし。

「あ、ちょっと待ってくれ」

「……はい、何でしょう？」

「マスター……アシアは今何処に居るか知らないか？」

「ミス・アタナシアですか？…それなら」

馬に乗りひた走る。目指すは近隣の森。

あの後シエスタに場所を聞き。馬小屋に行つて馬を拝借してきた。目的地はさつき言つたように森だ。

まあ近いと言つても片道四時間かかるんだがな。

いや……、近隣とか言いながら王都であるトリスタニアより遠いつてどうよ？

まあ森の中の道を含めて四時間なんだろうから実質森までは三時間半位か？

高原をひた走る、とにかく走る。

一分一秒でも早く着くため、全力で馬を走らせている。

馬を借りたは良いんだがスタミナ持つかな？

まあ本人に聞いてみるか。

(なあ、全速力で走ってるが目的地まで持つか？)

(任せてください旦那！行きだけなら全速力でも持ちますぜ！)

(そうか、判つた。頼んだぞ)

行きだけならね。まあ帰りはアジアやルイズ達と一緒に帰ればいいし、行き程急ぐ必要は無いだろう。

しかし、間に合うか？

俺やアジアと言つたイレギュラーが居る時点で原作通り行くとは限らない。

勿論、サイトはいるから直ぐに終る可能性も否定出来ない。だ



がそれと同じで何か起こらないとも限らない。

まったく、考え出したら切りが無いな。

兎に角今重要なのは、少しでも急ぐ事か。

そんな事を考えていると、前方に僅に森林が見えてきた。

あそこか……。うん、中々のペースだな。まだ出発して二時間半過ぎた位か。かなりのハイペースだな。いや灰ペースかな？

そんな事を思ってる間にも森がどんどん近くなっている。

(よし、もう少しだ。頼むぞ！)

(振るえるぞハート！燃え尽きる程ヒート！)

うん、どっかで聞いたこと有るような気がするが俺は突っ込まん、突っ込んだら負けだ！

(やれやれだぜ)

しまった、突っ込んだ。しまった。

そんなこんなで馬鹿なことをやっているうちに森の入り口を通過した。

場所が通る様な道を走り10分程が経過した。

小屋はもう少しのはずだ、しかし場所が詳しく判らない。しゃーない、少し気配を探ってみるか。

……………うん？…お、一ヶ所変な所を発見したぞ。

動物の気配が無いのにいやに騒がしい何かの気配がする。  
多分ルイズやサイト達だろうな。

この距離だと横の森林を斜めに突っ切った方が速いな。  
俺は指で方向を示して指示を出し言う。

(友よ、今こそ駆ける時！)

(承知！！)

おお！？わかってくれるか！

俺の指示通りに馬は森林の中へ駆けて行く。

草を掻き分ける様に進み、時には木を避けて、馬は突き進んで行く。

やがて遠目だが動くものが見え始めた。

そしてそれは直ぐにルイズ達だと判った。

しかし、俺の目に有り得ない物が映った。

な！？何でアジアが戦ってた！？

そう、何故かアジアはシルフィードに乗っていなかった。

俺の考えではシルフィードの上か、他の安全な場所で治療要員で待機してると思っていたのだが、まったくの予想外だった。

畜生！後、少しだ！耐えろよ！

俺がそう思っていたその時だった。

疲れていたのか、それとも緊張や恐怖による筋肉の萎縮か、アシアは足をもつれさせ転んでしまった。

な！？バツカやろう！！

(すまん！背中借りるぞ！！)

俺はそう言つと、返事も聞かず、座っている体制から背中に立ち、さらに瞬時に背を蹴り飛び上がる。

(戦いの旋律！(メローディア・ベラークス！))

飛び上がりながらネギマの強化魔法を掛け、そしてさらに高い木の枝を足場にして飛躍する。

敵のゴーレムは既に腕を振りかぶっている。

さあせるかー！！

虚空舜動を使いゴーレムに急接近し、空かさず技を放つ。

「断空剣！」

魔力の流れと剣速が竜巻を生み、その竜巻が表面を削るように破壊し、鍛え抜かれた黒金の剣と自身の腕が敵を両断する。

ゴーレムの切れた腕を蹴り踏み台にし、アジアの前に背を向ける格好で着地する。

ゴーレムの切れた腕が地面に落ち轟音が響き、もとの土へと戻った。

膝を付きしゃがんだ状態からユックリ立ち上がる。

すると、後からアジアの震えるような声が聞こえた。

「……ラ……ズ」

「呼んだかな？マイマスター」

顔を横に向け目で後ろを見る。

そこには驚いた顔のアシアが俺を見ていた。

「……何で？……何で貴方が此処にいるの！」

ふむ、せっかく助けに来たと言うのに、家のマスターはお気に召さなかったようだ。

「何故と言われてもね、マスターの危機を救うのは使い魔の仕事だろ？」

「でも！！」

まったく、優しくて穏和なくせに変なところ頑固だな。

「アシア、よく頑張ったな。後は任せろ」

俺はそう言ってまた前を向く。

まったく面倒な奴だな、もう再生してやがる。

すると後から羽音と共に、何かが降りてくる気配がした。

そして、そこから走って近付いて来る人の気配が二つ。

タバサとサイトだろうな。タバサにはさっさとアシアを回収してもらおうか。

そして俺は後ろも振り向かず言った。

「タバサ、アジアを頼む」

「……判った」

モノ判りが良くて助かるね。

二人が遠ざかるのを気配で確認し剣を構える。

するとサイトが横に来て、同じように剣を敵に構える。

そして、横目で俺を見ながら言った。

「ラズ、怪我はもう大丈夫なのか？」

「ああ、お陰さまでな」

俺は敵を見ながら応え、そして問う。

「サイト、デルフ、…いけるか？」

「おう！やってやるぜ！」

「俺様が付いてるんだ！負けるわけがねえ！」

ふっ、頼もしいこつて。

さて、敵さんも完全に再生したよ。

よっしゃ！こつからが反撃の時だ！

うちのマスターを虐めてくれた分と、昨日の怪我の分、きっちり  
お礼してやるよ！覚悟しろよ土くれ！

u,u,u

## 第十四話 土くれのフーケ討伐中編（後書き）

毎度お馴染み、こんにちは、又は今晚は！グルタミンです！  
いや、やはり中編になってしまいました！

少しオリ主の過去が判りました、今後もどんどん出しますし周りのキャラ達にも話したりバレたりしていくつもりです。

次でフーケ編はラストかな？

もしかしたら他のキャラ視点でやるかもしれません。

そうだ！せつかだからアンケート取りましょうか。

？次回で終わってさっさと進むめ。

？別のキャラ視点も見てみたいかも。

こんな感じでどうですかね？

ああ……、早くワルドザマアwwwな所書きたいな……。  
でも筆遅いんで、すいません。

てな訳で次もアジアとグラズベルの二つの視点で書いて行こうと思います。

遅筆で稚筆ですが、暖かくて見守って頂けるとありがたいです。

……はあ、文才欲しいなあ……。

とこんな所で、今回は終りにしたいと思います。

まあ何時もの通りですが、ご意見・ご感想又はご指摘・誤字報告等々有りましたら、よろしく願います！是非！

ではまた次回お会いしましょう！アデュー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1082/>

---

ゼロの使い魔 導きの牙

2011年6月21日21時19分発行